

日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成

プラシャント・パルデシ（編）

2013年3月

「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」

共同研究プロジェクト報告

目次

1 . はじめに.....	1
2 . 研究目的.....	2
3 . 特色.....	2
4 . 研究計画・方法.....	2
5 . 共同研究者・研究協力者.....	4
6 . 日本語学習者用基本動詞「見出し」.....	5
6.1 【あがる】.....	5
6.2 【あげる】(移動).....	35
6.3 【さがる】.....	70
6.4 【さげる】.....	84
6.5 【かう】.....	98
6.6 【うる】.....	110
6.7 【かす】.....	121
6.8 【あげる】(授受).....	131
6.9 【もらう】.....	136
6.10 【はしる】.....	149
7 . 学術論文.....	165
8 . データベース.....	194
9 . 成果物一覧.....	195

1. はじめに

コミュニケーションの基本単位となる文の骨格を決める重要な要素の一つが、述語としての動詞である。日本語を外国語として学ぶ学習者にとって、日本語の運用能力を向上させるために、使用頻度の高い基本動詞の体系的な学習が不可欠である。具体的には、基本動詞の統語的振舞い（格枠組み、受動形の有無、アスペクト的な特徴など）、意味拡張（意味ネットワーク）、自他の対をなすカウンターパートおよび類義語との対比等々の全体像を把握することが、効率的な学習に必要なものである。さらに日本語の体系だけでなく、母語の体系と日本語の体系間の類似点や相違点を理解することは、学習効果を最大限に引き延ばすことに役立つと考えられる。

そこで本プロジェクトは、言語学、日本語学、日本語教育、対照言語学、第二言語習得研究、辞書編纂学、認知言語学、コーパス言語学などといった様々な研究分野の最新の知見を取り入れ、世界の日本語学習者の体系的且つ効率的な学習に役立つ「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」のプロトタイプを開発し、それに基づいて、日・中、日・韓、日・マラーティー語の作成を目指した。

上記目標の達成に向けての具体的な運用としては、関連の研究分野の最前線で活躍する日本国内外研究者のチームを立ち上げ、定期的に公開研究会およびワークショップなどを行った。

なお、本書に掲載する見出し語数については、2013年3月時点での状態に基づくものである。プロジェクトの成果は、2013年春に国立国語研究所ホームページ (<http://www.ninjal.ac.jp/handbook/>) にて公開予定である。

2013年3月31日
編集長／プロジェクト・リーダー
プラシャント・パルデシ

2. 研究目的

本研究の学術的な目標は、関連分野の知見を結集し「理想的な日本語基本動詞用法ハンドブックのプロトタイプ」の開発を目指すことである。また、応用的な目標は、当該プロトタイプに基づいて世界の日本語学習者の体系的且つ効率的な学習に役立つ、日・中、日・韓、日・マラーティー語版「日本語基本動詞用法ハンドブック」の作成を試みることである。

国立国語研究所内においては、言語資源研究系と連携して『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を最大限に活用し、コーパスから見えてくる頻度、コロケーション、文型などに関する知見を研究成果に反映させる。また、研究情報資料センターを通じて研究成果のデータベース化および公開を図り、日本語教育研究・情報センターを通じて世界の日本語教育現場への還元を図る。

また、本研究はその他に、日本語と外国語との対照研究の面において言語対照研究系、動詞意味論の観点から理論・構造研究系とも関わりを持つ。

3. 特色

日本初・世界初の機能を盛り込んだハンドブック・辞典の開発を目指す。

- (1) コーパス準拠のネット版のハンドブック・辞書
- (2) 語義ごとのコロケーション表示と、コーパスの実例との連動
- (3) コーパスにおける当該動詞の文法的な振る舞いに基づいた豊富な作例
- (4) 視聴覚コンテンツの導入
- (5) 認知言語学の知見の導入
- (6) 当該動詞の意味拡張・統語的な振る舞いの詳細な記述
- (7) 対照研究の知見の導入：学習者の母語の視点からの対照情報、学習上の注意点の記述
- (8) ネットによる時間と空間を超えた見出し執筆・編集の実現

4. 研究計画・方法

本研究は、多くの専門分野の研究者による共同作業を必要とした。本プロジェクトに携わった共同研究者・協力者の数は 61 名である。

平成 22 年度には、共同研究者全員参加による全体研究発表会を開催し（2011 年 3 月）、BCCWJ コーパスを見出し執筆に利用するために本プロジェクトで開発した検索ツール NINJAL-LagoWordProfiler の講習会を行った。

平成 23 年度の主な作業は以下の通りである。

- ・ ネット上で時間と空間を超えて見出しの編集が可能な執筆用 editor の完成。
- ・ 寺村誤用例集のデータベース化：誤用の種類，学習者の国籍，作文形式など複数の条件を組み合わせで検索できるデータベースの構築および 2011 年 12 月に一般公開。
- ・ コーパスを「読む」ツール NINJAL-LagoWordProfiler の機能追加を続行。最終的に日本語の研究に資するツールに。
- ・ BCCWJ コーパス検索ツール (NINJAL-LagoWordProfiler for BCCWJ, 略称 NLB) の機能追加。
- ・ 日本語の見出し語のプロトタイプを作成：10 見出し語が完成。
- ・ 二言語ハンドブックの実現に向けての国際ワークショップの開催：インド・プネー市で 2012 年 3 月に実施。

平成 24 年度に実施した主な作業は以下の通りである。

- ・ BCCWJ コーパス検索ツール (NINJAL-LagoWordProfiler for BCCWJ, 略称 NLB) の一般公開 (2012 年 6 月)。
- ・ NINJAL-LagoWordProfiler for BCCWJ および「中納言」を利用した作例の作成：7 見出しの合計語義数：91，例文数：522 文。
- ・ ハンドブックの最終成果をネットで発信するためのインターフェースを開発 (2012 年 9 月末に完成)。
- ・ 上記のインターフェース上で，日本語－マラーティー語，日本語－中国語，日本語－韓国語の対照版を展開。
- ・ 二言語ハンドブックの実現に向けての国際ワークショップの開催：中国・北京市で 2012 年 10 月 23 日に実施。
- ・ 本プロジェクトの最終成果として，合計 10 見出しの日本語－マラーティー語を完成。日本語－中国語，日本語－韓国語の対照版に関して 2 見出しを完成。
- ・ 前年度と同じく，作業の効率化を図るため，複数のサブグループを設け，サブグループの研究会を頻繁に行い，全体研究発表会でその研究成果を発表した。

- (1) 理論言語学グループ
- (2) 認知言語学グループ
- (3) 日本語教育グループ (言語習得グループを含む)
- (4) 対照言語学グループ
- (5) コーパス言語学グループ

5. 共同研究者・研究協力者

【50音順・敬称略】

1. 赤瀬川史朗(Lago 言語研究所・所長)
2. 阿辺川武(国立情報学研究所)
3. 秋田喜美(大阪大学)
4. 石川慎一郎(神戸大学)
5. 石田英明(大東文化大学)
6. 井上優(麗澤大学)
7. 今井新悟(筑波大学)
8. 今村泰也(国立国語研究所)
9. 上原聡(東北大学)
10. 于康(関西学院大学)
11. 大関浩美(麗澤大学)
12. 大曾美恵子(名古屋大学・名誉教授)
13. 大堀壽夫(東京大学)
14. 影山太郎(国立国語研究所)
15. 柏野和佳子(国立国語研究所)
16. 金愛蘭(早稲田大学)
17. 金廷珉(韓国・慶一大学)
18. 桐生和幸(美作大学)
19. 小磯千尋(大阪大学・非常勤)
20. 古賀裕章(慶應義塾大学)
21. 迫田久美子(国立国語研究所)
22. 白井恭弘(ピッツバーグ大学)
23. 徐一平(中国・北京外国語大学)
24. 砂川有里子(筑波大学)
25. 朱京偉(中国・北京外国語大学)
26. 徐尚揆(韓国・延世大学)
27. 曹大峰(中国・北京外国語大学)
28. 平香織(神田外語大学)
29. 高橋清子(神田外語大学)
30. 田中茂範(慶應義塾大学)
31. 塚本秀樹(愛媛大学)
32. 鄭聖汝(大阪大学)
33. ティモシー・バンス(国立国語研究所)
34. 名嶋義直(東北大学)
35. 成山重子(メルボルン大学)
36. 仁科喜久子(東京工業大学・名誉教授)
37. 西岡美樹(大阪大学)
38. 西光義弘(神戸大学・名誉教授)
39. 野田尚史(国立国語研究所)
40. 藤井聖子(東京大学)
41. 増田恭子(ジョージア工科大学)
42. 眞野美穂(鳴門教育大学)
43. 円山拓子(北海道大学・非常勤)
44. 丸山岳彦(国立国語研究所)
45. 南雅彦(サンフランシスコ州立大学)
46. 粂山洋介(名古屋大学)
47. 山口昌也(国立国語研究所)
48. 山崎誠(国立国語研究所)
49. 山崎直樹(関西大学)
50. 山泉実(東京外国語大学・非常勤)
51. 幸松英恵(東京外国語大学・非常勤)
52. 吉成祐子(岐阜大学)
53. 李在鎬(筑波大学)
54. 李相穆(九州大学)
55. Abhijit Deshpande
56. Hari Damle(フリーランス日本語教師)
57. Meena Ashizawa(フリーランス日本語教師)
58. Michihiro Ogawa(プネー大学・院生)
59. Nissim Bedekar(EFLU 大学)
60. Salil Vaidya(フリーランス日本語教師)
61. Vaishali Vaidya(フリーランス日本語教師)

6. 日本語学習者用基本動詞「見出し」

6. 日本語学習者用基本動詞「見出し」

6.1 【あがる】

I.

アクセント：LHH

活用情報：agar-・子音語幹動詞（グループ I）

II.

1. 人間・動物が下から上に移動：「着点」を明示
2. 人間・動物が下から上に移動：「経路」を明示
3. 人間・動物が水中から陸上に移動
4. 人間が家の外部から内部に移動
5. 訪問する（謙譲語）
6. 身体・物の一部が上方に移動
7. 物全体が高いところに移動
8. 水の範囲が高い位置に至る
9. 気体の出現
10. 物理的な声の発生
11. 意見・訴えの発生
12. 数量の増加
13. レベルの向上
14. 成果の出現
15. （より上級の）教育機関に新たに所属
16. 緊張する
17. 注目される状況になる
18. 見つかる
19. 終了・完成
 - 19A. 仕事の完了
 - 19B. ゲームでの終了
 - 19C. 費用がある範囲ですむ
 - 19D. 雨が降りやむ
 - 19E. バッテリー
 - 19F. 揚げ物の完成

Ⅲ.

1. 人間・動物が下から上に移動：「着点」を明示

語義：人間・動物（の体全体）が、自分の意志で（あるところから）より高いところに移動する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜人間・動物＞が＜着点＞にあがる

■ 共起例：

＜着点＞：①舞台・ステージ・壇上・表彰台・リング・屋根・屋上・甲板

②～の上：舞台の上・屋根の上

＜副詞的要素＞：ゆっくり（と）（力士はゆっくりと土俵にあがった）、そろそろ（と）、颯爽（さっそう）と（選手が颯爽とリングにあがった）

■ 非共起例：×ネコが膝にあがってきた。 → ネコが膝の上にあがってきた。

■ 例文・作例：

1. 屋上にあがって、花火見物を楽しむ。
2. 両選手がリングにあがり、あとはゴングを待つばかりだ。
3. ネコが屋根にあがって、日向ぼっこをしている。

■ 例文・コーパス：

1. と、その時舞台を見守る人々から拍手が起こった。演奏家たちが舞台上に上がったのだ。（春江一也著 『プラハの春』, 1997, 9 文学）
2. ある嵐の日のこと、パパは屋根に上がって修理をしようとした。（アニータ・アルバラード著・轟志津香訳 『わたしはアニータ』, 2002, 2 歴史）
3. オヒシールは甲板に上ると亦介の正面で帽子を取り、異国の言葉で話しかけてくる。（秋山香乃著 『五稜郭を落した男』, 2004, 9 文学）
4. ぼくの三人の息子たちも、この台に上がるのは大好きです。（ヒサクニヒコ著 『ぼくって何だろう？』, 1991, 分類なし）

■ 個別の解説

「選手などが 競技を行う場所に あがる」という場合、「競技を行う場所で、競技を行う」という意味まで表す場合がある。たとえば、「あの力士は 15 歳から土俵にあがっている」「最終回は、A 投手がマウンドにあがるだろう」などである。

■ 個別の誤用情報

「自動車」などの乗り物の乗る場所は、(多少なりとも) 地面より高い位置にあるが、「自動車にあがる」とは言えず、「自動車に乗る／乗り込む」と言う。

2. 人間・動物が下から上に移動：「経路」を明示

語義：人間・動物（の体全体）が、傾斜のある経路を通して、より高いところに移動する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間・動物>が<経路>をあがる

■ 共起例：

<経路>：階段・石段・坂・坂道・参道

<副詞的要素>：ゆっくり(と)(坂道をゆっくりあがっていく)、一気に(坂を一気にあがる)

■ 非共起例：

×切り立った崖を(命がけで)あがる → 切り立った崖を(命がけで)のぼる／よじのぼる。

■ 例文・作例：

1. 会場にお越しの方は、この階段をあがってください。
2. この年になると、ちょっとした坂道をあがるだけでも息が切れる。

■ 例文・コーパス：

1. 参道の途中、それも石段を上がって鳥居をくぐる直前に踏切がある。(今尾恵介著 『地図で歩く路面電車の街』, 1998, 6 産業)
2. この斜面を上がっていくと「ネプチューンの噴水」のある池に出る。(秋山満著 『イタリア鉄道の旅』, 1997, 2 歴史)
3. 思わず梯子段を上がろうと足を掛けると、上から声が落ちてきた。(牧宏著 『笛吹川ほとり』, 2003, 9 文学)

■ 個別の解説：

この「あがる」は、「彼はゆっくりと坂道をあがっていった／きた」というように、「～ていく／てくる」という形でよく使われる。

■ 個別の誤用情報：

「階段を二階にあがる」などとは言いにくい。つまり、「あがる」は、<経路>を表す「を」格と<到着点>を表す「に」格を同時にはとらない。この場合、「階段をのぼって二階にあが

る」「階段を使って二階にあがる」「階段で二階にあがる」などと言う。

3. 人間・動物が水中から陸上に移動

語義：人間・動物（の体全体）が、水中から、水のないところに移動する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜人間・動物＞が＜起点＞から＜着点＞にあがる

■ 共起例：

＜起点＞：プール・海・水・風呂・（お）湯・湯船・浴槽

＜着点＞：陸（おか）・岸・岸壁・島

■ 非共起例：

＜起点＞：×子供がビニールプールからあがる → 子供がビニールプールから出る

■ 例文・作例：

1. プールからあがって、一休みする。
2. 風呂からあがって飲むビールはどうまいものはない。
3. 船員たちは、半年ぶりに陸（おか）にあがった。
4. 海から岸にあがると、急に疲労感が襲ってきた。

■ 例文・コーパス：

1. おじさんは水から上がり、頭をぶるぶるとふって髪の毛の水を切った。（沢村凜著 『瞳の中の大河』, 2003, 9 文学）
2. 三人はそれから、湯から上がって宴会場に行った。（莉啓著 『水辺の神々・断片』, 2002, 9 文学）
3. 陸に上がった母ガメは、せっせ、せっせと砂に穴を掘って、これから始まる産卵に備えます。（楠木ほとす著 『産んではいけない!』, 2005, 5 技術・工学）

■ 個別の解説：

「海」「川」は「陸」よりも低いところに位置し、「浴槽」は「洗い場」よりも低いところにあることが多いことから、「水中から陸上などへの移動」は、「下から上への移動」である場合が多い。ただし、「風呂からあがる」という表現は、「浴槽から洗い場への移動」だけでなく、「浴室から浴室外への移動」も表すことができる。この場合、まず、「風呂」という語が「浴槽」だけでなく、「浴室」も表せることに基づき、移動の起点が、「水中」ではなく、「（浴槽）を含む」浴室」である。また、この場合、「下から上への移動」ではなく、むしろ「内部から外部

への移動」である。

■ 個別の誤用情報：

「部屋から出る」「部屋を出る」のように、「出る」という動詞は、起点を表すのに、「から」と「を」のどちらも使える。これに対して、「海／風呂からあがる」とは言えても、「海／風呂をあがる」とは言えない。

4. 人間が家の外部から内部に移動

語義：人間が、家の外部から、家の内部に移動する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>が<家の内部>にあがる

■ 共起例：

<家の内部>家、座敷、部屋、廊下

<副詞的要素>：こっそり（と）（こっそり人の家にあがる）、ずかずか（と）（ずかずか土足で座敷にあがる）

■ 非共起例：「ビル」などの建物の場合、「ビルにあがる」とは言えず、「ビル（の中）に入る」と言う。

■ 例文・作例：

1. 遠慮しないであがってくれ。
2. どうぞあがってください。
3. 家にあがるのは失礼だから、玄関先であいさつだけするつもりだ。

■ 例文・コーパス：

1. 松岡さんの家では奥さんが待っていてくれた。古い日本の家だ。座敷に上がって畳に座った。(永倉万治著 『食後は眠い』, 1996, 9 文学)
2. 私はイヴォンヌに礼を言って部屋に上がった。(帚木蓬生著 『薔薇窓』, 2001, 9 文学)
3. 信子が靴を脱いで廊下に上がり、妙子のあとについて行こうとした時、すぐ左手の襖が開いて、蹴とばしそうな位置に突然、奇妙なものがヌッと出てきた。(干刈あがた著 『ウォーク in チャコールグレイ』, 1993, 9 文学)

■ 個別の解説：

家の外部から、内部への移動にも「あがる」を用いることができる。もともと、家の内部は外部より高くなっていたことから、「上への移動」と「内部への移動」が同時に生じていたから

である。「縁側にあがる」という例には、「上への移動」と「内部への移動」が共に認められる。つまり、「縁側」は「庭」などより高い位置にあり、かつ、家の一部でもある。なお、現在では、「あがる」は、高低差のない「(家の) 内部への移動」にも使われる。

■ 個別の誤用情報：

家の住人は、自分の家に「あがる」と言えるだろうか。たとえば、庭の草むしりをしているときに、急に雨が降りだしたという状況では、「雨が降ってきたので、あわてて家に入った」と言うのが普通で、「家にあがった」とは言わない。したがって、「家の内部に移動する」という意味の「あがる」の主体は、お客など、つまりは家の住人以外である。(★「個別の解説」の②から移動)

5. 訪問する (謙譲語)

語義：人間が、ある目的を果たすために、他の人がいるところを訪問する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>が<他の人のところ>に<目的>にあがる

■ 共起例：

<他の人のところ>：お宅、ご自宅

<目的>：お届け、ご相談、(車で) お迎え

■ 非共起例：

<目的>：×お渡しにあがる → お届けにあがる

■ 例文・作例：

1. このことについて、先生の所にご相談にあがりたいと思っている。
2. 店の者がお客様のお宅にご購入品をお届けにあがった。

■ 例文・コーパス：

1. 商品はすぐにお取り寄せをいたしまして、わたくしがお届けに上がります。(鎌田敏夫著 『29歳のクリスマス』, 1998, 9 文学)

■ 個別の解説：

この「あがる」は「訪問する」に相当する謙譲語であり、4「人間が、家の外部から、家の内部に移動する」の特殊な(限定された)場合と考えられる。

■ 個別の誤用情報：

この「あがる」は謙譲語であるため、「家まで届けにあがってくれますか」という言い方はできない。この場合、「家まで届けてくれますか」と言う。

6. 身体・物の一部が上方に移動

語義：身体の一部、物の一部が、あるところから、より高いところに移動する。

表記：あがる、上がる、挙がる（「手が挙がる」など）、揚がる（「幕が揚がる」など）

自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜身体の一部、物の一部＞があがる

■ 共起例：

＜身体の一部、物の一部＞：手、肩、足、幕、軍配、遮断機

＜副詞的要素＞：いっせいに（いっせいに数人の手があがった）、さっと（東方にさっと軍配があがった）、次々（と）（次々手があがった）、高々と（主審の手が高々とあがった）、するする（と）（幕がするするとあがっていく）

■ 非共起例：

＜身体の一部、物の一部＞：×数人の腕があがった → 数人の手があがった

■ 例文・作例：

- ・さっと数名の手があがった。
- ・肩が痛くてあがらない
- ・行進の時、足が高くあがると格好がよい
- ・白鵬に軍配があがった

■ 例文・コーパス：

- ・会場では次々と手が上がった。基調報告者の張氏への質問が大多数である。(古森義久著『中国「反日」の虚妄』, 2005, 3 社会科学)
- ・私たちが席に着くとすぐ明かりが消え、幕が上がった。(マーガレット・P.ブリッジズ著;春野丈伸訳『わが愛しのワトスン』, 1992, 9 文学)
- ・最後に入室した男を見て、大統領の眉が上がる。(鳴海章著『日本海雷撃戦』, 1995, 9 文学)

■ 個別の解説：

「(さっと数名の) 手があがった」という表現は、「質問がある」「意見を述べたい」といった意思表示の動作であると理解できる場合が多い。また、「A に軍配があがる」は、相撲で「A

が勝つ」ことも表すことができる。これは、相撲では、「一方に行司の軍配があがる」ことと「一方の勝ちが決まる」ことが同時だからである。現在、相撲以外の競技にも「軍配があがる」が使われるようになっている。つまり、「巨人に軍配があがった」「(サッカーの) 日本代表チームに軍配があがった」などと言うこともできる。

7. 物全体が高いところに移動

語義：物の全体が、(空中などの) 高いところに移動する (その結果、よく見えるようになる)。

表記：上がる、揚がる (「国旗・花火が揚がる」など) 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<物の全体>があがる

■ 共起例：

<物の全体>：凧、アドバルーン、旗、国旗、ボール、フライ、打球、花火

<副詞的要素>：するする (と) (国旗がするするとあがっていく)、次第に (凧が次第に高いところまであがっていく)、高々と (高々とフライ・打球があがる) [野球]、次々 (と) (次々花火があがる)

■ 非共起例：

<物の全体>：×飛行機／ヘリコプターがあがる →飛行機／ヘリコプターが舞いあがる

■ 例文・作例：

1. ボールが高く／うまくあがる。[サッカー、ゴルフ]
2. メインポールに国旗があがった。[オリンピックなどの表彰式]
3. 夏の夜空に花火があがった。

■ 例文・コーパス：

1. 町の至るところから凧が上がり、オレンジ色の空に無数の点を付けているのだ。(石田ゆうすけ著 『行かずに死ねるか!』, 2003, 2 歴史)
2. 突然、おなかに響く賑やかな音がして、空に花火が上がった。(恩田陸著 『ライオンハート』, 2004, 9 文学)
3. それに対し欧州型では、ボールが高く上がるので、相手にカットされる危険性も少なく、押されているときに「陣地挽回」の意味を含めたキックをするときに有効だ。[サッカー] (日産 F.C.横浜マリノス編著 『サッカー』, 1994, 7 芸術・美術)

■ 個別の解説：

野球で「フライがあがる」と言う場合、「フライ」は「ボール」などの物そのものではなく、「ボ

ールが放物線を描いて飛ぶ状態」を表す。

■ 個別の誤用情報：

「凧」などが空中のより高いところに継続的に移動する場合、「(凧が、どンドン) あがっている (のを眺めていた)」とは言いにくく、「(凧が、どンドン) あがっていく (のを眺めていた)」と言う方が普通である。

8. 水の範囲が高い位置に至る

語義：(川や海の) 水の占める範囲が、元の位置より、高い位置に至る。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<水の占める範囲>があがる

■ 共起例：

<水の占める範囲>：水位、海面、潮、水

<副詞的要素>：どンドン (水位がどンドンあがる)、ぐんと、ぐっと、ぐんぐん、一段と、だんだん、次第に

■ 非共起例：「川の水位があがる」とは言えても、通常「川があがる」とは言えない。

■ 例文・作例：

1. 上流で大雨が降ったせいか、川の水位がぐんぐんあがってきた。

■ 例文・コーパス：

1. 30分間で38ミリの雨量だと1時間では80ミリ近くの雨が降った計算になる。そして、10分間で134センチと一気に水位が上がっている。(Yahoo!ブログ, 2008, 生活と文化)
2. 水が腰のあたりまで上がってきても、二人は水面下で手をつないだままだった。(マイケル・マーシャル著;嶋田洋一訳 『死影』, 2005, 9 文学)
3. 市長の顔はすこしあおざめた。潮が上がってきたことに気がついたからだった。(キングズリー作;芹生一訳 『水の子どもたち』, 1996, 分類なし)

■ 個別の解説：

7「物の全体が、(空中などの) 高いところに移動する」の場合、「アドバルーンがあがる」という例で確認すると、「アドバルーン」は「あがった」あとは、当然のことながら、元の位置には存在しなくなる。一方、「水位があがる」という場合は、「水」は元々占めていた範囲にあり続けることに加えて、より高い位置も占めるようになる。言い換えれば、「水」の占める範

囲が上方に拡大するという点である。このように、この2つの「あがる」は、ある物がより高い位置を占めるようになるという点は共通であるが、元の位置から消えてしまうか、元の位置にも存続するかという点で異なる。

■ 個別の誤用情報：

この「あがる」が、「水の占める範囲が元の位置より高い位置に至る」ことを表すと言っても、風呂に水を入れているという状況で、「だんだん風呂の水位があがってきた」とは言わない。つまり、ここでの意味の「あがる」使えるのは、「川、海、ダム」などの場合に限られることになる。

9. 気体の出現

語義：目で見える気体の類が、下の方（地面に近いところ）からかなり高いところに及ぶ範囲に、切れ目なく（連続的に）出現する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜目で見える気体の類＞があがる

■ 共起例：

＜目で見える気体の類＞：煙・白煙・黒煙・土煙（つけむり）・湯気・火の手・火柱・炎・狼煙（のろし）

＜副詞的要素＞：もうもう（と）（煙がもうもうとあがる）

■ 非共起例：「霧」「靄（もや）」などの自然現象の場合、「霧があがる」ではなく「霧が立ちこめる」などと言う。

■ 例文・作例：

1. 夕方、川向うで火の手があがった。
2. 風呂上がりの体から湯気があがっていた。

■ 例文・コーパス：

1. 地震の後、東京の市街のあちらこちらで火の手が上がった。（岡本哲志著 『銀座』, 2003, 5 技術・工学）
2. ライターの火が灯油に引火し、炎が上がったのだ。（小杉健治著 『父からの手紙』, 2003, 9 文学）
3. やがて、山林も消え、土煙が上がる未舗装の道となって六合目に着く。（川村匡由, 秋本敬子著 『ふるさと富士百名山』, 1996, 2 歴史）

■ 個別の解説：

「土煙があがる」「火の手があがる」などの場合は、すでに存在しているものが上方に移動するというよりも、これまでにはなかったものが、下の方（地面に近いところ）からかなり高いところに及ぶ範囲に「出現」するということである。この意味は、8.「(川や海の) 水の占める範囲が、元の位置より、高い位置に至る」と共通点が見いだせる。というのは、「水位があがる」において「あがった分の水が占めようになった領域」だけに注目すると、その領域には「水位があがる」前には「水」は存在していなかったわけである。つまり、この領域に限って言えば、「水が新たに出現した」と考えることができる。

■ 個別の誤用情報：

「土煙／砂塵（さじん）があがる」とは言えても、「土／砂があがる」とは言えない。つまり、ここでの「あがる」が使えるのは、「空中を占める気体の類（気体と見なせるもの）」に限られる。

10. 物理的な声の発生

語義：相当数の人が同時に発する、何らかの感情、意見、訴えなどを表す声が生じる。

表記：上がる、揚がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜声＞があがる

■ 共起例：

＜声＞：

①～の声：驚きの声、怒りの声、不満の声、抗議の声、批判の声、非難の声、感嘆の声、疑問の声、落胆の声、関（とき）の声

②～声／声～：声、歓声、喚声、産声、胴間声、叫び声、笑い声、掛け声、悲痛な声、声援

③その他：悲鳴、絶叫、どよめき

＜副詞的要素＞：一斉に（一斉に不満の声があがる）、どっと（どっと喚声があがる）

■ 非共起例：人間の声以外の「爆発音」などには用いられない。

■ 例文・作例：

1. 日本チームが先制ゴールを決めると、スタンドから歓声があがった。
2. 彼が自分の考えを述べると、参加者から次々と疑問の声があがった。
3. 突然の落雷に、四方八方から悲鳴があがった。

■ 例文・コーパス：

1. 「何だあいつ、手前のことばかり宣伝して、とんでもない」と会場内で批判の声が上がった。(佐佐木吉之助著 『蒲田戦記』, 2003, 6 産業)
2. 悲鳴がそこかしこで上がる。(柘植久慶著 『サヴァイヴァル・ツアー』, 2003, 9 文学)
3. 外で叫び声上がり、勢いよくドアが開いて、あわただしい足音が店内に入ってきた。(デューン・R.クーンツ著;宮脇孝雄訳 『ストレンジャーズ』, 1991, 9 文学)
4. すでに十分に暖まっている客席からは、周囲への気兼ねの抜けた笑い声が上がっていた。(秋山瑞人著 『イリヤの空、UFOの夏』, 2001, 9 文学)

■ 個別の解説：

この「声が生じる」という意味は、9「気体が出現する」という意味からの拡張と考えられる。というのは、この2つの意味は、「無から有」、つまりこれまでなかったものが出現・発生するという共通点が見られるからである。なお、両者の相違点は、「気体の出現」は視覚で捉えられることであるのに対して、「音声の発生」は聴覚の対象である。したがって、「視覚→聴覚」という拡張である。

■ 個別の誤用情報：

ここでの「あがる」が使えるのは、「何らかの感情、意見、訴えなどを表す声」である。従って、「大きな声があがった」などとは言いにくい。「その光景を見ていた人々の間から、大きな驚きの声があがった」であれば問題ない。

11. 意見・訴えの発生

語義：相当数の人による、何かを訴える意見が生じる。

表記：上がる、揚がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<意見>があがる

■ 共起例：

<意見>：(修飾要素+) 声、怒りの声、不満の声、抗議の声、批判の声、非難の声、疑問の声

■ 非共起例：

「怒りの声」のように「修飾要素+声」の形で用いられ、「怒りがあがる」とは言わない。

■ 例文・作例：

1. 多くの国民から雇用拡大を求める声があがっている。
2. 日本の外交政策に対して、アジア諸国から非難の声があがっている。

■ 例文・コーパス：

1. 全国から、近辻さんをやめさせろという声が上がった。(NHK「プロジェクト X」制作班編 『厳しい自然との壮絶なたたかいに挑む!』, 2004, 2 歴史)
2. また、税源移譲が仮に実現しても、今度は自治体間格差がいま以上に拡大する可能性がある。格差是正措置を求める声がすぐに上がるだろう。(松原聡著 『官公庁のしくみと公務員の仕事がわかる事典』, 2001, 3 社会科学)
3. 財界の抵抗、女性労働者に対する保護規定の緩和についての労組側の反対、均等法ができるまでに厳しい対立があった。そして、内容には女性団体からは批判と失望の声が上がった。(読売新聞 20 世紀取材班編 『20 世紀大衆社会』, 2002, 2 歴史)

■ 個別の解説：

10 の意味は、〈何らかの感情、意見、訴えなど〉という内容を表す〈音声／言葉〉が、実際に〈相当数の人の口から発せられる〉ということであるのに対して、11 の意味は、〈人の口から発せられる〉という条件はなく、〈何らかの意見、訴えなどが〉〈生じる〉ということに焦点が当たっている。つまり、11 の場合、何らかの意見が文書に記されたり、調査によって明らかになったりした場合を含む。

■ 個別の誤用情報：

ここでの「あがる」は、何かを訴える意見を表すことから、「その政策に対して、多くの国民から満足の声があがった」などのようには言いにくい。この場合、「多くの国民から満足の声が聞かれた」と表現することができる。

12. 数量の増加

語義：数量（として捉えられるもの）が、何らかの基準（となる時点）と比べて、増加する

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：〈数量〉があがる

■ 共起例：

〈数量〉：

- ① 価格：値段、値（ね）、価格、料金、地価、単価、物価、株価、株、相場（があがる）
- ② 賃金：賃金、給料、時給（があがる）

- ③ 温度：温度、気温、体温、水温、熱（があがる）
- ④ 速さ：スピード、速度、ピッチ（があがる）
- ⑤ 比率：確率、出生率、失業率、生存率、心拍数、金利、税、税金、コスト、ボルテージ（があがる）
- ⑥ 度合（～度）：濃度、精度、好感度、知名度、血圧、テンション（があがる）
- ⑦ 年齢：年齢、学年

<副詞的要素>：どんどん、さらに、ぐんと（スピードがぐんとあがる）、ぐっと（ぐっと好感度があがる）、ぐんぐん（ぐんぐん気温があがる）、益々（益々精度があがる）、一気に（熱が一気にあがる）、徐々に（徐々に物価があがる）、じわじわ（じわじわ物価があがる）、だんだん（だんだん失業率があがる）、次第に（次第に速度があがる）、ますます、一段と、ある程度、ぼんと（給料がぼんとあがる）、一向に（～ない）（一向にピッチがあがらない）、

■ 非共起例：「好感度があがる」とは言えるが、「好感があがる」とは言えない。

■ 例文・作例：

1. また、ガソリンの価格があがった。
2. 午後になると一段と気温があがった。
3. 夜も更けてくると、みんなのテンションが異常にあがった。

■ 例文・コーパス：

1. 一時期、東京の土地の値段がものすごく上がった。（久野万太郎著 『リニア新幹線物語』, 1992, 6 産業）
2. 理由もなく株が上がるのではなく、いまは業績の回復という理由があるからこそ上がっているのです。（北浜流一郎著 『得意株つくって楽に儲けよう』, 2004, 3 社会科学）
3. 末子年齢が上がるにつれて、女性の就業率は上昇する。（伊藤美登里著 『共同の時間と自分の時間』, 2003, 3 社会科学）
4. 酒の量が上がるにしたがって、仕事の量が上がった。（鷺田小彌太著 『定年と読書』, 2002, 0 総記）

■ 個別の解説：

「数量が増加する」ことは、1、2、7の「人間、物が高いところに移動する」とことと相関関係がある。例えば、より多くの積み木を積んでいくにしたがって、積まれた積み木はより高い位置に達する。つまりは、私たちが有するこのような経験を基盤として、本来は「事物の上方への移動」を表す「あがる」という語を、「数量の増加」にも拡張して用いていると考えられる。

■ 個別の誤用情報：

「(彼女に対する) 好感度があがる」とは言えても、「嫌悪感があがる」とは言えない。「嫌悪感」も＜数量として捉えられるもの＞と言ってよいであろうが、なぜだろうか。ここでの「あがる」は、明らかにマイナス方向の感情には使えないからだと考えられる。「嫌悪感」の場合には、「嫌悪感が増す」と言うのが適切である。「不安感」も「あがる」ではなく、「増す」である。

13. レベルの向上

語義：ある物事のレベル・水準が、よりよくなる。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜レベル・水準＞があがる

■ 共起例：

＜レベル・水準＞：レベル、水準、評価、価値、調子、腕、腕前、効率、能率、地位、成績、業績、人気、士気、順位、番付、ランキング、点数、恋愛運、仕事運、金運

＜副詞的要素＞：どんどん（効率がどんどんあがる）、ぐんと（腕前がぐんとあがる）、ぐっと（ぐっと評価があがる）、ぐんぐん（ぐんぐん成績があがる）、益々（益々能率があがる）、一気に（評価が一気にあがる）、一段と（一段と能率があがる）、ぼんと（ぼんとランキングがあがる）、徐々に（徐々に順位があがる）、だんだん（だんだん人気があがる）、次第に（次第に調子があがる）、じわじわ（じわじわ腕前があがる）、一向に[～ない]（一向に調子があがらない）

■ 非共起例：

「順位があがる」に対して「順序・順番があがる」とは言わない。

■ 例文・作例：

1. Aさんは、今回の企画の成功で、一段と評価があがった。
2. A選手は夏場に入って、徐々に調子があがってきた。
3. 力士は、勝ち越せば番付があがるという仕組みになっている。

■ 例文・コーパス：

1. 一瞬、ハットはジョージ・ヘディングリーのことを話してしまおうかと思ったが、肩の重荷を下ろすのはいささか格好悪い気がしたし、自分の評価が上がらないのは確かだった。
(レジナルド・ヒル著;秋津知子訳 『死者との対話』, 2003, 9 文学)
2. 成績が上がって、みんなの見る目がちがってきたでしょ?(芝田勝茂作;小松良佳画 『マジ

カル・ミステリー・シャドー』, 2003, 9 文学)

3. 七草過ぎたら西方位の公園近くや並木道にある店でピザとパスタやご飯物を食べましょう。家庭運、金運が上がります。(小林祥晃著 『誕生月でわかる Dr.コパの風水大開運』, 2005, 分類なし)

■ 個別の解説 :

「点数があがる」などは、12「数量の増加」とここでの「レベルの向上」の両方の特徴を含んでいると考えられる。というのは、「テストの点数が 70 点から 90 点にあがった」という場合、「数量の増加」であると同時に「レベルの向上」でもあるからである。このような用例を橋渡しとして、「レベルの向上」のみを焦点化したのがここでの意味である。

■ 個別の誤用情報 :

非共起例で示したように、「順序・順番があがる」とは言わないのはなぜであろうか。「順位」は、マラソン競技であれ、テスト結果であれ、そのことに関しての良さを反映したものであるが、「順序・順番」にはそのような意味がないからであると考えられる。

14. 成果の出現

語義 : あるプロセスを経て、望ましい結果が得られるに至る。

表記 : 上がる、挙がる 自他の区別 : 自動詞

構文フレーム : <望ましい結果>があがる

■ 共起例 :

<望ましい結果> : 効果、成果、実効、実績、収益、利益、売上

<副詞的要素> : はっきり(と) (はっきりと成果があがった)、一段と (一段と効果があがる)、一向に[~ない] (一向に利益があがらない)

■ 非共起例 :

「成果があがる」に対して、「結果があがる」とは言わない。

■ 例文・作例 :

1. 自分なりに努力しているつもりだが、なかなか成果があがらない。
2. 上半期は、わずかながら利益があがり、一安心だ。

■ 例文・コーパス :

1. しかし、妥協せず注意も根気よく続けることで、効果が上がってきた。(久田邦明編著 『子

どもと若者の居場所』, 2000, 3 社会科学)

2. ただ行政をいじったのみで果たして実効が上がるものかどうか、大変疑わしい面があるの
であります。(国会会議録, 1978, 参議院)
3. ある時期になれば利益が出ることを期待して資金を注ぎ込んだ。ところが、思ったほど収
益が上がらない。(下村治著 『日本は悪くない』, 1987, 3 社会科学)

■ 個別の解説 :

ここでの「成果の出現」という意味は、まず、9「気体の出現」および10「声の発生」からの
拡張と考えられる。というのは、この3つの意味には、「無から有」、つまりこれまでなかった
ものが出現・発生するという共通点が見られるからである。ただし、「気体の出現」「声の発生」
はそれぞれ視覚・聴覚で把握できるものであるが、「効果があがる」などの「成果の出現」は、
五感だけでは捉えられず、より知的な営みを必要とするものである。より抽象的な意味とも言
える。また、「成果の出現」は、13「レベルの向上」との間にも、「望ましいこと」であるとい
う共通点が見いだせる。さらに注目すべきことは、12「数量の増加」に属する用例の中には、
「給料があがる」などのように、望ましいことであり、「成果の出現」であるとも捉えられる
ものもある(もちろん「物価があがる」などは望ましいことではない)。つまりは、「給料があ
がる」などは、「数量の増加」と「成果の出現」の両方の特徴を有する中間的なものである。
このように、同時に生じる場合がある「数量の増加」と「成果の出現」という2つの特徴のう
ちの後者の特徴に焦点を当てたのがここで意味である。

■ 個別の誤用情報 :

非共起例で示したように、「結果があがる」とは言わない。「成果」にはプラスの意味が含まれ
ているのに対して、「結果」の基本的な意味は中立的だからである。「結果」が中立的であると
は、「よい結果」とも「悪い結果」とも言えることからわかる。

15. (より上級の) 教育機関に新たに所属

語義：人間が、(より上級の) 教育機関に、新たに所属するようになる。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>が<(より上級の) 教育機関>にあがる

■ 共起例 :

<(より上級の) 教育機関>：学校、幼稚園、小学校、中学、中学校、高校、高等学校

■ 非共起例：<(より上級の) 教育機関>：×大学、大学院

■ 例文・作例：

1. この四月から末っ子が小学校にあがる。

■ 例文・コーパス：

1. 栄養上の問題はさておいて、学校に上がるようになれば、子どもたちは薄いパンにピーナツバターとジャムをぬってはさむ。(森永康子, 神戸女学院大学ジェンダー研究会編 『はじめてのジェンダー・スタディーズ』, 2003, 3 社会科学)
2. その子が中学に上がるまでには、引き取って一緒に暮らせるようにしたいから—それまでは、心細いんでしょう。(乃南アサ著 『パラダイス・サーティー』, 2003, 9 文学)
3. 一番下が、幼稚園に上がったばかりの男の子だった。(森詠著 『北のレクイエム』, 1986, 9 文学)

■ 個別の解説：

「教育機関」に限定されたこの意味は、13「レベルの向上」からの拡張と考えられる。というのは、ある人が「教育機関に属していない状態から属するようになる」こと、あるいは、「より上級の教育機関に属するようになる」ことは、ある観点から見た、その人の「レベルの向上」と考えられるからである。

■ 個別の誤用情報：

「(三月まで小学校5年生だった子どもが)4月から6年生にあがる」とは言いにくい。この場合は、「6年生になる」である。「中学校にあがる」とは言えても、「6年生にあがる」とは言いにくいことから、ここでの「あがる」は、所属する教育機関(小学校や中学校)が変わる場合にのみ使えることになる。なお、「学年があがる(と、だんだん勉強が難しくなる)」の「あがる」は、12「数量の増加」のケースである。

16. 緊張する

語義：人間が、特別な状況に身を置いて、平静を保てなくなる。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>があがる

■ 共起例：

<人間>：一定の年齢以上の「人間」であれば特に限定はない

■ 非共起例：

<人間>：×赤ちゃん、乳児

■ 例文・作例：

- ・人前で話すとあがってしまう。
- ・試合であがるような選手はだめだ。

■ 例文・コーパス：

1. 気になる女性の前に行くとうがってしまって、思うように会話が出来ません。(Yahoo!知恵袋, 2005, 健康、美容とファッション)

■ 個別の解説：

「あがる」という動詞で、なぜ<平静を保てなくなる>、<緊張する>という意味を表せるのだろうか。まず、日本語で、人間の「心」「精神」が存在する(宿る)と考えられている身体部位には、「腹」「胸」「頭」などがある。例えば、「腹が据わ(っ)る/腹を括る」「胸が一杯になる/胸を躍らせる」「頭に来る/頭に血がのぼる」といった表現がある。ここで、「安定した好ましい心の状態」は、身体部位の中でも下の方にある「腹」という部位に宿ると考えられる。このことは、「腹が据わ(っ)る」という表現で<心の状態が物事に動じない>という意味を表せることからわかる。さらに言えば、「落ち着く」などの語からもわかるように、「(心が)下方に移動する/位置する」ことは、<(心が)安定した状態になる/状態である>ことを表す。一方、「(心が)上方に移動する/位置する」ことを表す「浮つく(浮ついた)」「頭に来る」などは<(心が)不安定な好ましくない状態になる/状態である>ことを表す。このように見てくると、本来「上方への移動」を表す「あがる」が、<(心が)不安定な好ましくない状態になる>ことの一種である<緊張する>という意味を表せることも納得が行くであろう。

■ 個別の誤用情報：

「あがる」が<平静を保てなくなる>ことを表すといっても、「上司から思いも寄らない仕事を命じられて、あがってしまった」とは言えない。「あがる」は、語義に示したように、<特別な状況に身を置いて>という特徴も満たさなければならないからである。大勢の人の前で話す、たくさんの聴衆の前でピアノ弾くといった<特別な状況で>、<平静を保てなくなる>ことを表すのに「あがる」を使うのは適切であるが、「上司から思いも寄らない仕事を命じられる」というのは、事柄が特別であるとは言えても、上記のような意味で<特別な状況に身を置く>とは言えない。上司から思いも寄らない仕事を命じられた場合は、「あわてる」「動揺する」などを使うのが適切である。

17. 注目される状況になる

語義：人・物事が、注目される状況・状態に置かれる。

表記：あがる、挙がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜人・物事＞が＜注目される状況・状態＞にあがる

■ 共起例：

＜人・物事＞：名前、名

＜注目される状況・状態＞：候補、リスト（のトップ）、名簿、ラインナップ、ランク、上位、筆頭、ノミネート、話題、議題、課題、俎上

＜副詞的要素＞：続々（と）（続々と名前があがる）

■ 非共起例：

＜人・物事＞：×姓名、姓

■ 例文・作例：

1. 名前が首相候補にあがる／首相候補に名前があがる。
2. A氏のことが話題にあがった。

■ 例文・コーパス：

1. 野球、ソフトボールがロンドン五輪から外れる代わりにI O Cで新競技候補に上がっていたのは、ゴルフ・空手・7人制ラグビー・ローラースケート・スカッシュでした。(Yahoo! ブログ, 2008, 趣味とスポーツ)
2. 現在でもG Eで仕事をしているのは最初のリストに上がった二三人のうちわずか九人にすぎない。(ジャック・ウェルチ, ジョン・A.バーン著;宮本喜一訳 『ジャック・ウェルチわが経営』, 2001, 5 技術・工学)

■ 個別の解説：

「演奏家が舞台にあがる」「(上空に) アドバルーンがあがる」などの例からもわかるように、「人間であれ物体であれ、高いところに移動する」(1、2、7) ことによって、人々の「目につく、あるいは注目される」状態になる。このことから、「あがる」が「人・物事が、注目される状況・状態に置かれる」という意味に拡張するのも納得が行くことである。

18. 見つかる

語義：求めていた人間・物事が、(数多くの候補の中から) 見つかる。

表記：あがる、挙がる、揚がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜求めていた人間・物事＞があがる

■ 共起例：

＜求めていた人間・物事＞：犯人、死体、証拠

＜副詞的要素＞：次々（と）（次々証拠があがる）

■ 非共起例：＜求めていた人間・物事＞：×結婚相手

■ 例文・作例：

1. 大捜査によって、ようやく犯人があがった。

■ 例文・コーパス：

1. そうしたら、たまたま、島に死体が揚った。(西村京太郎著 『熱海・湯河原殺人事件』, 2003, 9 文学)

■ 個別の解説：

この意味も、17 の場合と同様に、「人間であれ物体であれ、高いところに移動する」(1、2、7) ことによって、人々の「目につきやすい」状態になる（したがって、「見つかりやすい」）ことに基づくと考えられる。

■ 個別の誤用情報：

ここでの「あがる」は「見つかる」に近い意味であるが、人間の場合、「犯人」などに限られる。したがって、「迷子になってしまった子どもがやっとあがった」などとは言えない。この場合は「見つかる」を使うのが適切である。

19. 終了・完成

19A.仕事の完了

語義：仕事などが（ある期間取り組んだのち）完了する。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜仕事など＞があがる

■ 共起例：

＜仕事など＞：仕事、原稿

■ 非共起例：「原稿があがる」とは言えても、「執筆があがる」とは言いにくい。

■ 例文・作例：

1. 原稿があがってきたら、すぐに印刷に回す。

■ 例文・コーパス：

1. 現場からどんな原稿が上がってくるかもわからないうちに、明日の朝刊の紙面建てが決まってしまったというのか。(横山秀夫著 『動機』, 2002, 9 文学)
2. 従業員の忘年会は二日前にすんでいるし、仕事が上がった者から帰宅することになる。(笹沢左保著 『紫陽花いろの朝に死す』, 2001, 9 文学)

■ 個別の解説：「個別の解説：19 全体」を参照。

■ 個別の誤用情報：

「原稿があがる」に対して、「絵があがる」「書があがる」とは言いにくい。この場合、「絵が描きあがる／できあがる」、「書が書きあがる／できあがる」と言う方が適切である。

19B. ゲームでの終了

語義：人間が、(双六・麻雀などの) ゲームで終了に至る。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>が<ゲーム>であがる

■ 共起例：

<人間>：「人間」であれば特に限定はない

<ゲーム>：双六、麻雀

■ 非共起例：

<ゲーム>：×パチンコ

■ 例文・作例：

1. 双六をやると、いつも花子が一番にあがる。

■ 例文・コーパス：

1. オーラスでアガればトップという時などがそうだ。(飯田正人著 『麻雀・必勝の戦術』, 2000, 7 芸術・美術)

■ 個別の解説：「個別の解説：19 全体」を参照。

■ 個別の誤用情報：

ここでの「あがる」は、双六・麻雀などのように先に終了に至った者が勝ちとなるゲームに使える。したがって、将棋や囲碁で勝つことを「あがる」とは言わない。

19C.費用がある範囲ですむ

語義：催しなどの費用が、ある範囲におさまる。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜費用＞が＜ある範囲＞であがる（「＜ある範囲＞で」に相当する部分は形容詞連用形の場合もある）

■ 共起例：

＜費用＞：費用、経費、パーティー（の費用）、旅行（の費用）

＜ある範囲＞：〇円、格安

形容詞連用形：安く

■ 非共起例：

＜ある範囲＞：×ただ

■ 例文・作例：

1. 今回の旅行は3万円であがった。
2. 二次会は（思ったより）安くあがった。

■ 例文・コーパス：

1. だからいつもスタジオ代が少しでも安く上がるように気を配ってくれた。(友部正人著『ニューヨークの半熟卵』, 2003, 2 歴史)

■ 個別の解説：「個別の解説：19 全体」を参照。

■ 個別の誤用情報：

ここでの「あがる」は「催しなどの費用」に使われるのが普通であり、（衣服などの）商品について、予算より安く買うことができた場合には、「このコートは1万円であがった」とは言えない。その場合、「1万円だった」「1万で買えた」などと言う。

19D.雨が降りやむ

語義：雨が降りやむ

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜雨＞があがる

■ 共起例：

<雨>：雨、梅雨

<副詞的要素>：一向に[～ない]（一向に雨のあがる気配がない）、いつの間にか（いつの間にか雨があがっていた）

■ 非共起例：「雪があがる」とは言いにくい。普通は「雪がやむ」と言う。

■ 例文・作例：

1. お昼ごろには雨もあがり、晴れ間が広がる見込みです。

■ 例文・コーパス：

1. ビーチには雨が上がると同時に大勢の人が出てきて、海で泳いだり、砂の上で寝ころんだりしていた。(海老沢泰久著 『男ともだち』, 1998, 9 文学)
2. そこで、梅雨が上がった後、秋口までは戸外に出し、五〇%遮光をして育てるのがよい。(江尻光一著 『洋ラン栽培コツとタブー』, 1991, 6 産業)

■ 個別の解説：

雨がよくふる季節である「梅雨」が終わるという意味を表すのに、「梅雨があがる」とも言える。（「個別の解説：19 全体」も参照。）

■ 個別の誤用情報：

ここでの「あがる」は、雨が完全にやみ、その後、雨が降らない時間が（しばらく）続く場合に用いられる。したがって、「今日は一日中、雨が降ったりやんだりだった」とは言えても、「今日は一日中、雨が降ったりあがったりだった」とは言えない。

19E.バッテリー

語義：バッテリー（主に自動車用の蓄電池）が機能しなくなる。

表記：あがる、上がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<バッテリー>があがる

■ 共起例：

<バッテリー>：バッテリー

■ 非共起例：

<バッテリー>：×電池

■ 例文・作例：

1. 車の室内灯を消し忘れて、バッテリーがあがってしまった。

■ 例文・コーパス：

・その日、僕が仕事に出かけようとしたら、一トントラックのバッテリーが上がってしまっていた。(アンジェラ・グード編;伊藤延司, マーガレット・プライス訳 『犬たちをめぐる小さな物語』, 1994, 6 産業)

■ 個別の解説：「個別の解説：19 全体」を参照。

■ 個別の誤用情報：

この意味の「あがる」は、「バッテリー」という語に限定されるので、「電池／蓄電池があがる」とは言えない。

19F.揚げ物の完成

語義：加熱した油の中に入れた食材に熱が通り、食べられる状態になる。(『講談社類語辞典』)

表記：あがる、揚がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<食材 (を用いた完成品)>があがる

■ 共起例：

<食材 (を用いた完成品)>：天ぷら、フライ、カツ、エビ

<副詞的要素>：からっと (天ぷらがからっとあがった)

■ 非共起例：

<副詞的要素>：×こんがり (と)

■ 例文・作例：

1. 海の幸を使ったフライがおいしくあがった。

■ 例文・コーパス：

1. フライパンで「焼き揚げる」方法なら、少量の油でもカラッとおいしく揚がる。(平成暮らしの研究会編 『料理のメニューがどんどんふえる知恵本』, 2005, 5 技術・工学)
2. おいしいトンカツが、もうすぐ揚がりそうよ (★コーパスに句点なし) (末廣圭著 『妖花』, 2003, 9 文学)

■ 個別の解説：「個別の解説：19 全体」を参照。

■ 個別の誤用情報：

ある調理法を表す動詞と副詞的要素（擬態語）の組み合わせがほぼ決まっている場合がある。「からっと揚がる／揚げる」の他に「こんがりと焼ける／焼く」、「ほかほか蒸す」「とろとろに煮る」などがある。

■ 個別の解説：19 全体

以上、19 では、おおよそ「終了・完成」という共通点を持つと考えられる「あがる」について、6つの意味を区別した。6つのそれぞれは、共起要素が限られている。さて、「終了・完成」という意味は、13「レベルの向上」、14「成果の出現」からの拡張と考えられる。というのは、「レベル／腕前があがる」などは、望まれる最終あるいは最高の水準に向かうことであり、「成果／利益があがる」なども同様の意味を有すると考えられるからである。

IV. 全体の用法解説

1～19の「個別の解説」を参照。

V-1. 文法情報 1

1) 「～ている」の可否／意味

1. (通常) 「～ている」の形では使いにくい
5. 学生が先生のところに相談にあがっている。
10. スタンドから歓声があがっている。
15. 末っ子が小学校にあがっている。
- 19B. (双六で) 花子が一番にあがっている。
- 19C. 今回の旅行は3万円であがっている。

2) 「～ている」で継続を表す

2. 大勢の人が参道の石段をあがっている。
8. 水位がどんどんあがっている。
12. ガソリンの価格が日に日にあがっている。
13. A選手は夏場に入って、どんどん調子があがっている。

3) 「～ている」で結果表す

1. 両選手がリングにあがっている。
3. 子供たちはプールからあがっている。

4. 客はすでに座敷にあがっている。
6. 数人の手があがっている。
7. 上空にアドバルーンがあがっている。
8. 1時間ほどで水位が 50 センチもあがっている。
9. 川向こうで火の手があがっている。
11. 多くの国民から雇用拡大を求める声があがっている。
14. やり方を変えてから、目覚しい成果があがっている。
16. 多くの人を前にして、花子はすっかりあがっているようだ。
17. 例の三人が首相候補にあがっている。
18. すでに証拠があがっている。
- 19A. すでに原稿があがっている。
- 19D. 雨があがっている。
- 19E. バッテリーがあがっている (のに気づいた)。
- 19F. このてんぷらはからっとあがっている。

V-2. 文法情報 2

「あがっていく／くる」の形でよく使われる意味。

1. 子どもが二階にあがってきた。
2. 大勢の人が参道の石段をあがっていく／くる。
3. 子どもたちがプールからあがってきた。
7. 上空にアドバルーンがあがっていった。
8. 水位が急にあがってきた。
12. ガソリンの価格が日に日にあがってきた。
13. A選手は夏場に入って、どんどん調子があがってきた。
- 19A. すでに原稿があがってきている。

VI. 複合語

V+あがる

のしあがる、まくれあがる、出来あがる、縮みあがる、すくみあがる、舞いあがる、這いあがる (NINJAL の頻度 2 以上のなかで普通に使われるもの)

あがり+V

あがり切る、あがり損なう (NINJAL の「～+自立動詞」の頻度 1 以上のなかで普通に使われるもの)

その他

- ・ V+あがる：飛びあがる、跳ねあがる、打ちあがる、駆けあがる、燃えあがる、成りあがる、捲れあがる、染めあがる、焼きあがる、炊きあがる、湧きあがる、繰りあがる

- ・あがり＋V：あがりこむ、あがり続ける、

VII. 慣用句・連語・ことわざ

慣用句

- ・梶（うだつ）があがらない

意味：出世したり、良い境遇になることができない。

例・作例：

Aさんは、梶があがらない亭主のことでいつも愚痴をこぼしている。

例・コーパス

えっ、前の彼はどうしたかって？別れたわよ、うだつが上がらないんだもんこんな“恋愛観”が横行している。(宮崎学著 『ハンパな人生論より極道に学べ』, 2002, 1 哲学)

- ・頭があがらない

意味：相手に対して負い目を感じ、自分を下の立場におく。

例・作例

私のミスをたびたび救ってくれた部長には、頭があがらない。

指導教員は就職の世話までしてくれたので、一生頭があがらない。

例・コーパス

もともと、この頃は研究が面白かったので、大学に1日15時間はいたと思う。だから、帰ってきたら、ご飯も食べずに模型工作である。奥様は当時、子育てに大変だったのだ。一生頭が上がらない所以である。(森博嗣著 『森博嗣のミステリィ工作室』, 2001, 9 文学)

- ・軍配があがる 6の「個別の解説」を参照

ことわざ

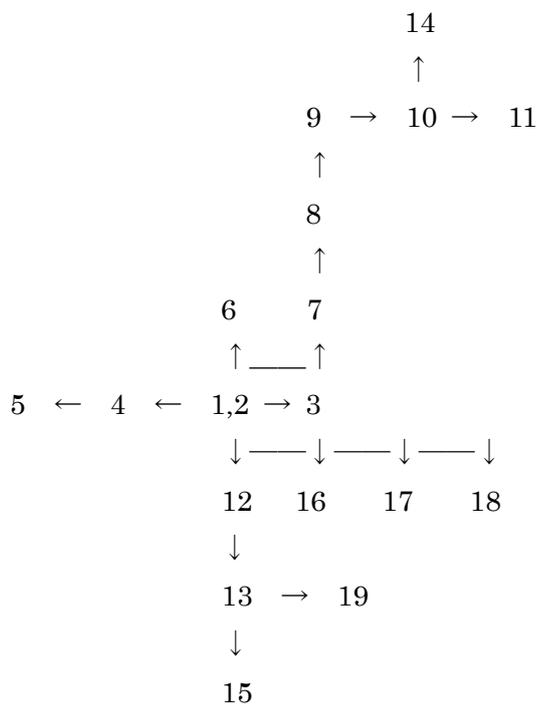
- ・陸（おか）に／へあがった河童

河童は、水の中は得意であるが、陸にあがるとうまく活動できないことから、人間が、不得手な、あるいは未経験の状況におかれて、どうにもならないこと。⇔水を得た魚

連語

- ・士気があがる、意気があがる

VIII. 多義ネットワーク



IX. 関連語 (ワードファミリー)

1、2：

類義語：のぼる／反義語：くだる、さがる、おりる

3：

類義語：でる／反義語：はいる

4：

類義語：はいる／反義語：でる

5：

類義語：参る、参上する

8：

類義語：増す（水位が増す）／反義語：さがる

9：

類義語：出る（体から湯気が出ている）／反義語：収まる（火の手が収まる）

10：

類義語：出る、聞かれる（不満の声が出る／聞かれる）／反義語：収まる（不満の声が収まる）

11：

類義語：出る（雇用拡大を求める声が出る）／反義語：収まる（雇用拡大を求める声が出る）

12：

類義語：上昇する（物価が上昇する）／反義語：さがる（物価がさがる）

13 :

類義語：上昇する（評価が上昇する）／反義語：さがる（評価がさがる）

14 :

類義語：出る（成果が出る）

15 :

類義語：入る（中学校に入る）／反義語：出る（高校を出る）

16 :

類義語：緊張する（聴衆を前にして緊張する）／反義語：落ち着く（落ち着いて話す）

17 :

類義語：なる（話題になる）

18 :

類義語：見つかる（犯人・証拠が見つかる）

19A

類義語：終わる（仕事が終わる）

19C

類義語：済む（安く済む）

19D

類義語：止む（雨が止む）

19E

類義語：切れる（バッテリーが切れる）

19F

類義語：できる（天ぷらできる）

6.2【あげる】(移動)

語義一覧

- 01 人間等が対象を下から上に移動
- 02 人間等が物全体を高いところに移動
- 03 身体・物の一部を上方に移動させる
- 04 人間等が対象を水の中から外に移動
- 05 人間が人間・動物を家の外部から内部に移動 (許可)
- 06 下に敷かれたものを取り外して片づける
- 07 人間が食べたものを吐く
- 08 物が煙や炎を発生・上昇させる
- 09 水の範囲が高い位置に至る
- 10 人間等が対象の数量を増加させる
- 11 レベルを向上させる
- 12 (より上級の) 教育機関に新たに所属させる
- 13 地位を向上させる
- 14 人間が声を発する：物理的な音声
- 15 意見・訴えを発する
- 16 成果を出す
- 17 対象を提示する
- 18 犯人や証拠を見つける
- 19 神仏に供える
- 20 式を行う
- 21 力を結集して物事を行う
- 22 終了・完成
 - 22A 仕事の完了
 - 22B 費用をある範囲ですませる
 - 22C 揚げ物の完成
 - 22D バッテリー

01. (人などが) {対象を下から上に移動する}.

[あげる、上げる、揚げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<対象>を<起点>から {<着点>に・<方向>へ/に} {<道具>で} あげる

■ 共起例

<主体>

※人、機械 (基本的に自分の意志、もしくは操作者の意志で対象を移動できるもの)

<対象>

子ども、役者、荷物、りんご、本、ボール、幕、遮断機、簾、ジッパー、水位、帯、油面

<起点>

梯子、舞台袖

<着点>

棚、机、舞台、ステージ、壇上、リング、屋根、屋上、頭上

～の上：舞台の上、屋根の上、棚の上

<方向>

上、後ろ、上面

～の方へ (に)：上の方へ、上方へ、隅の方へ、後ろの方へ

<道具>

クレーン、エレベーター、梯子

<副詞的要素>

いっせいに、きちんと、ひたすら、恐る恐る、ゆっくりと

■ 非共起例

<対象>

(誤) 研究室

■ 例文 (作例)

1. エレベーターで家具を二階にあげた。
2. その男は本を棚の上にあげはじめた。
3. 簾を屋根裏の隅の方へあげておいてください。
4. 「頼まれた荷物は、うえにあげておいたよ。」「どうもありがとう。」
5. 監督はぐずる子役を舞台にあげた。
6. ズボンをはいて、ジッパーを上まであげた。

■ 例文 (コーパス)

1. ミッションオイル注入口よりも上面へ油面をあげたら潤滑性など何かメリットは出るのでしょうか？
(Yahoo!知恵袋, 2005, スポーツ、アウトドア、車)
2. 自転車を起こして歩道へ上げ、ガードレールに立て掛けた。
(風間一輝著 『男たちは北へ』, 1989, 9 文学)
3. この絵を、夜の九時頃のアールの上空の星座を天文台が再現したものと比べてみれば、ゴッホは少し星座を画面の上方に上げたことがわかる。
(佃堅輔著 『スーチンの雉』, 2005, 7 芸術・美術)
4. 権六は、吉三郎を裏梯子から二階へあげた。
(加堂秀三著 『平打の簪』, 2001, 9 文学)

■ 個別の解説

1

1の意味が最も基本的な「あげる」の意味だと考えられる。「彼は積んであった本を床から棚の{上に/上の方に}あげた」のように起点と到着点、起点と方向を同時に表すことも可能である。

■ 個別の誤用解説

1

対象物は実際の移動を伴わなければいけない。移動させることができない部屋などが対象の場合、例えば上階に移ったとしても、「あげる」と言うことはできない。(誤) 田中先生は今年から研究室を10階にあげることになった。ただし、対象物の移動自体は主語によるものでなくともよく、対象物自体の意志で移動が行われてもよい。(例) 監督の指示で、舞台袖から役者をいっせいにあげた。

02. (人などが) {物全体を高いところに移動する}.

[あげる、上げる、(旗を) 揚げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<対象物 (の全体)>をあげる

■ 共起例

<主体>

基本的に人間

<対象>

凧、アドバルーン、旗、国旗、ボール、フライ、打球、花火、衛星、狼煙

<副詞的要素>

盛大に（花火をあげる）、早々と（フライをあげた）

■ 非共起例

<対象物>

（誤）石、飛行機、紙飛行機

■ 例文（作例）

1. マストに旗をあげた。
2. 子どもが凧をあげている。
3. 見張りが狼煙をあげている。
4. 田中がゴール前にクロスボールをあげたが、キーパーが飛び出してキャッチした。
5. センターに犠牲フライをあげられ、同点に追いつかれた。
6. 国旗を掲げるときはすばやく、降ろす時はゆっくり行ってください。

■ 例文（コーパス）

二せき目の船が近づいてくると、旗をあげた船に音をたててぶつかった。

（R.A.サルバトーレ著;風見潤訳 『アイスウィンド・サーガ』, 2004, 9 文学）

■ 個別の解説

1

ここでの「あげる」は、主に空中高く対象を移動させる場合である。ただし、野球で「フライをあげる」と言う場合、「フライ」は「ボール」などの物そのものではなく、「ボールが放物線を描いて飛ぶ状態」を表す。

■ 個別の誤用解説

1

凧、花火のように空中の高いところにとどまる時間が一定時間存在する場合に使われる。そのため、常に移動する飛行機や石などを対象として取ることは難しい。（誤）子どもが石をあげている。（誤）嵐の中、飛行機をあげた。

03. （人・物が）{それ自身の一部を上方に移動する}.

[あげる、上げる、(手を) 挙げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<その一部>をあげる

■ 共起例

<主体>

※人、機械（基本的に自分の意志、もしくは操作者の意志でその一部を移動できるもの）

<主体の一部>

顔、手、肩、足、眉、前髪、アーム

<上記以外>

視線

<副詞的要素>

ふと（顔をあげる）、静かに、やっと、ゆっくりと、軽く（手をあげた）、呑気に、優雅に、軽く（手をあげる）、そろそろ（腰をあげる）

■ 非共起例

その一部

（誤）指、耳

■ 例文（作例）

1. 彼は右手を挙げて合図した。
2. 質問のある人は、手をあげてください。
3. 男がゆっくりと顔をあげた。
4. 突然の知らせに母は驚いて眉を上げた。
5. 花子は視線を上げた。
6. クレーンがアームをあげている。（メタファー）

■ 例文（コーパス）

1. ぼくははっとして顔を上げた。
（原田宗典著 『どこにもない短編集』, 1993, 9 文学）
2. 明るいうちに仕事が片づく腰を上げて湯河原の温泉場に出かける。
（種村季弘著 『晴浴雨浴日記』, 1989, 9 文学）

■ 個別の解説

1

「あげる」の表す意味の中で、頻度としてはこれらの身体部位（特に顔、腰、目）との共起が非常に多い。また、「(身体部位)をあげる」には、その動作に関連する意味を表す慣用句が多数存在することも大きな特徴である。（例）腕をあげる（能力を進歩させる）、手をあげる（乱暴をはたらく、降参する）、腰をあげる（立ち上がる、行動するための態勢を取る）、などまた、「この箱は底をあげてある」などの場合、普通の箱と比べて、「底」の位置が高くなるよう

に作られているという意味であり、「物の一部を上方に移動させる」ということに加えて、物の全体をそのように「作る」という意味も含む。「家」について「棟をあげる」という場合も、「作る」という意味が含まれる。なお、ここでの意味は、1「人間等が対象を下から上に移動」における対象を、「主体の一部」に限定したものである。

■ 個別の誤用解説

1

身体の一部であっても、すべてが許容されるわけではない。（誤）彼女は指／耳をあげた。

04. (人などが) {対象を水の中から外に移動する}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<対象>を<水中>から<水のないところ>に {<道具>で} あげる

■ 共起例

<主体>

※人、機械、組織（基本的に自分の意志、もしくは操作者の意志で対象を移動できるもの）

<対象>

全体：魚、網、子ども、船、沈んだ車、もやし、ニラ、米

一部：顔、足、スクリュー

<起点>

プール、海、水、水中、水面、風呂、(お)湯、湯船、浴槽 ※水、水中、水面など、どれも可能

<着点>

ざる、陸(おか)、岸、港、水、甲板

<道具>

網、ざる、箸、バケツ

■ 非共起例

<着点>

(誤) 机、家

■ 例文(作例)

1. パスタをざるにあげた。
2. 船長がスクリューを水中からあげた。

3. 太郎が麺をざるにあげようとしたが、お湯がはねて火傷した。
4. 沈没した船を陸にあげた。
5. ゆでた青菜をザルに上げて、水を切る。

■ 例文（コーパス）

1. 爪楊枝でホワイトアスパラを刺し、スッと刺さったらお湯から上げ、冷水でよくすすぎます。

（Yahoo!ブログ, 2008, 生活と文化）

2. 米は洗ってざるに上げておく。

（『メチャメチャ明るい節約おかず 200』, 2005, 5 技術・工学）

■ 個別の解説

1

「ライフセーバーは溺れた子どもを海から岸にあげた」というように、起点と着点を共に明示してもよい。自動詞の「あげる」と異なる性質として、他動詞「あげる」は、料理でゆでた野菜などを熱湯などから取り出すことも表わせる点があげられる。一方、自動詞の「あがる」を述語にし、「ゆでた青菜があがる」と言うことはできない。これは「お湯でゆでる」という行為が、人が意図的に行う行為であり、自然には起こりえないためだと考えられる。なお、ここでの意味は、1「人間等が対象を下から上に移動」における起点を、「水中」に限定したものである。

■ 個別の誤用解説

1

<着点>は、<起点>である水中と隣接しているものが望ましく、離れたもの場合は不自然となる。（誤）ゆでたアスパラを机にあげる。（誤）山田は今日釣ってきた魚を家にあげた。

05. (人が) {人・動物を家の内部に入ることを許可する}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<人間・動物>を<家の内部>にあげる

■ 共起例

<主体>

※基本的にその家の住人または管理者

<人・動物>

客、友人、親戚（住人以外の人）、猫、犬

<家の内部>

家、座敷、部屋

<副詞的要素>

快く（家にあげる）、すんなり（部屋にあげた）

■ 非共起例

<家の内部>

学校、スーパー

■ 例文（作例）

1. 先生は快く部屋にあげてくれた。
2. 太郎は渋々山下さんを部屋にあげた。
3. 準備ができたので、客を座敷にあげた
4. 花子が怒って、さっきから部屋にあげてくれない。
5. 散歩の後、犬の足をふいてから家にあげた。
6. 田中さんが雨でずぶぬれだったので、あわてて部屋にあげてタオルを渡した。

■ 例文（コーパス）

1. 正憲は嘉門をダンボールの積み上げられた六畳の部屋に上げた。
（能島龍三著 『風の地平』, 2003, 9 文学）

■ 個別の解説

1

この意味では、1、2 と異なり、実際に動作主（<人間>が）自身の力で対象（<人間・動物>を）の移動を引き起こすというよりは、「自分の意志で移動可能な<人間・動物>」に移動の許可を与える意味となる。（「芸者をあげる」＝芸者などを呼び寄せて遊ぶ） また、家の内部へ移動させる場合にも「あげる」を用いることができるのは、もともと、家の内部は外部より高くなっていたことから、「上への移動」と「内部への移動」が同時に生じていたからである。なお、現在では、「あげる」は、高低差のない「(家の) 内部への移動」にも使われる。

■ 個別の誤用解説

1

基本的に個人の住宅が対象となり、「学校」や「スーパー」などの施設の場合、管理者を主語にとっても、許容されない表現となる。（誤）社長はスーパーに客をあげた。（誤）校長先生がカメラマンを学校にあげた。

06. (人が) {下に敷かれたものを取り外して片づける}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<敷かれてあった物>をあげる

■ 共起例

<敷かれてあった物>

畳、布団、床 (主に寝具)

<副詞的要素>

すばやく、きれいに

■ 非共起例

<敷かれてあった物>

(誤) 絨毯、クッション

■ 例文 (作例)

2. 小学1年生の太郎は、まだ自分で布団を上げられない。
3. 祖母のかわりに布団を上げた。
4. 畳屋のおにいさんはすばやく畳を上げていった。
5. 畳を上げたらカビだらけだったのでびっくりした。
6. 「朝食を召し上がっている間に布団を上げておきますね。」「すみません、ありがとうございます。」
7. 畳を上げるのは、張替えの時ぐらいだ。

■ 例文 (コーパス)

1. 「あなたに座蒲団をあげろと言ってるんですよ」
(中村秀十郎述;千谷道雄著 『秀十郎夜話』, 1994, 7 芸術、美術)
2. ふとんを押し入れに上げ、窓を開け、部屋のなかを整理した。
(富島健夫著 『はだかの少女』, 2003, 9 文学)
3. 布団を上げて、水漏れを修理したばかりの洗面所で顔を洗うと、ゆっくりと庭へ降り
ました。
(村上政彦著 『ニュースキャスターはこのように語った』, 1997, 9 文学)

■ 個別の解説

1

基本的に床に敷かれている寝具などを持ち上げ、別のところに移動することを意味する。寝具

の場合は、さらにそれらを押し入れなどに片づけることを表すことが多い。つまり、ここでの「あげる」は、寝具などについて、片付けの開始から終了までの全過程を表せるわけであるが、その過程のある段階において、「下から上への移動」を含むからこそ、「あげる」がこの意味でも用いられると考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

基本的には、寝具や畳が対象となる。たとえ床に敷いてあっても、絨毯やタイルなどは許容されない。つまり、「あげる」対象は、「布団」や「畳」などの日本の伝統的なものに限られると思われる。（誤）暖かくなったので、絨毯をあげた。（誤）クッションをあげて、部屋を片付けた。

07. (人が) {食べたものを吐く}. ※無意志性

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間等>が (<飲み食いした物>を) あげる

■ 共起例

<飲み食いした物>

ミルク、さっき食べたもの

■ 非共起例

(誤) 胃液をあげる。

■ 例文 (作例)

1. 赤ちゃんがミルクをあげた。
2. 母が船酔いであげてしまった。
3. 車に酔って、あげそうだ。
4. 「田中さん、具合が悪くてあげちゃったんだって。」「え、大変だね。」
5. 吐き気を我慢できずにあげてしまった。

■ 個別の解説

1

胃から食べ物が上昇して吐くことからの拡張と考えられる。さらに、ここでの「あげる」対象である「一度食べたもの」は、4の対象の1つである「身体の一部」と関連がある。つまり、「一度食べたもの」は「身体の一部」に準じるものと見なせるからである。

■ 個別の誤用解説

1

「吐く」との違いの1つは、その無意志性であり、「無理やり吐く」とは言えても、「無理やりあげる」とは言いにくい。もう1つの違いは「あげる」は目的語を取らないことが多い（取ると不自然になる場合がある「?胃液をあげた」）のに対し、「吐く」の方は「胃液を吐いた」のように特に目的語を取ることに問題はないことである。また、「あげる」は、人間以外の動物の吐瀉行動を表すことは難しく、「犬があげた」などは不自然である。この点に関しては、「あげる」の婉曲性が関与する可能性がある。

08. (物・自然現象が) {煙や炎を発生・上昇させる}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<物>が<煙や炎>をあげる

■ 共起例

<物・自然現象>

火山、たき火、波

<煙・炎>

煙、白煙、黒煙、土煙（つちけむり）、火柱、炎、水しぶき

■ 副詞的要素

もうもうと（煙をもうもうとあげる）

■ 非共起例

<煙や炎>

（誤）閃光、爆風

■ 例文（作例）

1. 火山が突然噴煙を上げた。
2. 荒波がしぶきを上げていた。
3. ストープの上でやかんが湯気をあげている。
4. ボートが水しぶきをあげて水上を走っている。
5. 森林が炎を上げて燃えている。
6. SLがもくもくと煙をあげながら走っている。

■ 例文（コーパス）

1. 木馬は土煙を上げて加速し、下へ下へと突進していく。
(沢田黒蔵著 『真田の狼忍』, 2005, 9 文学)
2. あの何本かの木は煙をあげて、まるで燃えちまったようだ…みんなが市からだれかが来たといってるけど、なにしに来たんだろう？
(残雪著;近藤直子訳 『黄泥街』, 1992, 9 文学)

■ 個別の解説

1

1～7 までと異なり、(無意志の) 自然現象を表す意味である。煙や炎は発生すると通常上昇することからの拡張と考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

通常対象が、何かを発生させ、それが上昇するような現象を表すため、発生した物が上昇しない場合は許されない。(誤) 落とされた爆弾が閃光／爆風をあげた。

09. (潮が) {満ちて海面が上昇する}.

[あげる、上げる] (自動詞)

構文フレーム：<潮>があげる

■ 共起例

<潮>

潮

■ 非共起例（

誤）川の水位があげてくる。

■ 例文（作例）

1. 潮があげてきた。サーフィンにはちょうど良い。
2. 潮があげてきたらすぐに波に乗ろう。
3. 今日の潮のあげ加減はとても良い。
4. 潮があげてくるやいなや、波に飛び乗った。
5. 波に乗ろうかと思って海を見たら、ちょうど潮があげてきた。

■ 例文 (コーパス)

1. やはり、潮が上げきればバックウォッシュがきつい第2。そこをなんとかクリアしてのライディング。(Yahoo!ブログ, 2008) 『少納言』より)

■ 個別の解説

1

「あげる」の用法の中では特殊な用法であり、潮の満ち引きにしか使われない。「あげる」という他動詞の形ではあるが、潮が自らあげてくることから自動詞化した用法と考えられる。つまり「潮が自らをあげる」という言い方から、「自らを」を省略することによって成立したものであると考えられる。同様の例として、「波が寄せては返す」の「寄せる」「返す」、「タクシーが流している」の「流す」などがある。

■ 個別の誤用解説

1

「潮があげる」に対して、「潮があがる」とは言わない。

10. (人などが) {対象の数量を増加させる}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間・物事>が<数量>を {<道具>} で あげる

■ 共起例

<主体>

※人、組織、乗り物、機械、自然現象など様々なものがある

<数量>

価格：値段、値(ね)、価格、料金、地価、単価、物価、株価、株、相場

賃金：賃金、給料、時給

温度：温度、気温、体温、水温、熱

速さ：スピード、速度、ピッチ、回転数、ペース

高さ：高度、語尾

音量：音量、ボリューム

比率：確率、出生率、失業率、生存率、心拍数、金利、税、税金、コスト、ボルテージ

度合(～度)：濃度、精度、好感度、知名度、血圧、テンション

<道具>

機械、ヒーター、薬、法律

<副詞的要素>

どンドン、さらに、ぐんと、ぐっと、ぐんぐん（スピードをあげる）、一挙に（スピードをあげる）、益々、一気に、徐々に（温度をあげる）、じわじわ、だんだん、次第に（高度をあげる）、ますます（テンションをあげる）、一段と、ある程度、ぼんと、急速に（温度をあげる）、ゆっくりと（高度を上げる）、はっきり（語尾をあげる）

■ 非共起例

<数量>

（誤）痛み、情熱

■ 例文（作例）

1. スピーカーのボリュームをあげた。
2. 日本政府は税金をあげるつもりだ。
3. 太郎が部屋の温度を必要以上にあげている。電気代がもったいない。
4. 前を走っていた車はぐんぐんスピードをあげ、すぐに見えなくなった。
5. 出生率をあげるためには、社会の構造そのものを変える必要がある。
6. 一生懸命働いても、会社が給料をあげてくれない。

■ 例文（コーパス）

1. 時給を上げることにより、社保、年金、雇用保険の負担も増えます。
（Yahoo!知恵袋, 2005, 職業とキャリア）

■ 個別の解説

1

<人間・物事>（X）と<数量>（Y）の関係には様々なものがある。①XのYがあがる：株価が値をあげる、車がスピードをあげる ②X（動作主）がYをあげる：会社が給料をあげる、彼は音楽のボリュームをあげた ③（擬人的・やや特殊）Xが原因でYがあがる：温暖化が世界の気温をあげる、新聞報道が彼の知名度をあげた また、「数量を増加させる」ことは、1、2、3の「対象を高いところに移動させる」ことと相関関係がある。例えば、より多くの積み木を積んでいくにしたがって、積まれた積み木はより高い位置に達する。つまりは、私たちが有するこのような経験を基盤として、本来は「事物の上方への移動」を表す「あげる」という語を、「数量の増加」にも拡張して用いていると考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

物理的に数量（度合い）を捉えられることが必要であるため、感情や感覚など物理的には度合

いを計測できないものは許容度が下がる。（誤）薬の量は減らせたが、痛みをあげてしまった。（誤）彼は最近数学へ情熱をあげている。

11. (人などが) {レベルを向上させる}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間等>が<レベル・水準>をあげる

■ 共起例

<主体>

※人間、組織、物、行動など

<数量>

レベル、水準、評価、価値、調子、腕、腕前、効率、能率、地位、成績、業績、人気、学力、士気、運気、順位、番付、ランキング、点数、恋愛運、仕事運、金運

<副詞的要素>

どんどん（効率をどんどんあげる）、ぐんと（ぐんと腕前をあげる）、ぐっと（ぐっと評価をあげる）、ぐんぐん（ぐんぐん成績をあげる）、益々（益々能率をあげる）、一気に（評価を一気にあげる）、一段と（一段と能率をあげる）、徐々に（徐々に順位をあげる）、じわじわ（じわじわ腕前をあげる）

■ 非共起例

<数量>

（誤）愛情、関心

■ 例文（作例）

1. 彼は今シーズン成績をあげた。
2. このお守りは運気をあげるらしい。
3. 「すごくピアノがうまくなったね。腕あげたわね！」
4. ひとりだけではなく、全員のレベルをあげたい。
5. 彼はここしばらくスランプだったが、なんとか順位をあげてきた。
6. 職場での士気をあげるために、しばしば社員旅行に出かける。

■ 例文（コーパス）

1. 学校の順位を上げるためには、あなたの学校全体の平均点を上げるしかありません。
（Yahoo!知恵袋, 2005, 子育てと学校（『少納言』より））
2. 新バージョンには効率を上げる機能が追加され、より快適に作業が行えます。

(朝日ビジネスP A S O編集部/ 堀 憲二, 『エクセル仕事金のお手本』 2004 (『少納言』より))

3. すべての褒美をもらうには最低いくつまでレベルを上げた方が良いですか？

(Yahoo!知恵袋, 2008, 趣味とスポーツ) 『少納言』より

■ 個別の解説

1

「(液体の) 濃度をあげる」などは、11「数量の増加」とここでの「レベルの向上」の両方の特徴を含んでいると考えられる。というのは、「濃度を10%から20%にあげた」という場合、「数量の増加」であると同時に「レベルの向上」でもあるからである。このような用例を橋渡しとして、「レベルの向上」のみを焦点化したのがここでの意味である。

■ 個別の誤用解説

1

意図的にレベルの向上に取り組めるものであることが重要である。そのため、意図的に向上させることができない対象の場合、「あげる」では表すことができない。(誤) 彼は妻に対する愛情をあげた。(誤) 広告でその映画に対する人々の関心をあげている。

12. (人が) {子どもを(より上級の) 教育機関に入れる}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム:

<人間>が<別の人間>を<(より上級の) 教育機関>にあげる

■ 共起例

<主体>

※保護者となる人など

<子ども>

息子、娘、子ども

<教育機関>

学校、幼稚園、小学校、中学、中学校、高校、高等学校

■ 非共起例

<教育機関>

(誤) 塾、(誤) 英会話教室

■ 例文（作例）

1. 山田さんは息子を大学にあげた。
2. 松見高校は毎年多くの生徒を一流大学にあげている。
3. 長男だけは良い大学にあげたい。
4. 今の時代、子どもを高校にあげるのは、親としての最低限の務めである。
5. 最近の親は、子どもを良い学校にあげようと必死である。
6. 子どもを小学校にあげたからといって、親の責任から解放されるわけではない。

■ 例文（コーパス）

1. …父は一家の長として、子どもを学校に上げるため、さらには子供の仕事のため、自分の一貫したやり方に反して、…
(毛毛著、鑑屋一/藤野彰訳『わが父・鄧小平』2002 (『少納言』より))

■ 個別の解説

1

「教育機関」に限定されたこの意味は、11「レベルを向上させる」からの拡張と考えられる。というのは、「ある人を、教育機関に属していない状態から属するようにさせる」こと、あるいは、「より上級の教育機関に属するようにさせる」ことは、ある観点から見た、その人の「レベルを向上させる」ことだと考えられるからである。

■ 個別の誤用解説

1

教育機関であっても、学校教育のみが対象となり、塾等とは共起しない。（誤）田中さんは息子を英会話学校／塾にあげた。また、自分の意志で選択する要素の強い教育機関ほど許容度は下がるようである。?田中さんは息子を大学院に上げた。??田中さんは息子をアメリカの大学にあげた。

13. (人が) {他の人の地位を向上させる}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<別の人間>を {<(もとの) 地位>から} <(より上級の) 地位>にあげる

■ 共起例

<主体>

※昇任の決定が可能である上司や組織など

<人>

※人名、役職名など

<地位>

部長、主任、教頭、責任者

<副詞的要素>

とうとう、突然（主任にあげる）

■ 非共起例

<地位>

（誤）会計、班長

■ 例文（作例）

1. 社長は田中さんを部長にあげたいらしい。
2. 「校長、田中先生を教頭にあげるらしいよ。」「えっ、本当!？」
3. 頃合を見計らって、彼を主任にあげたいと思っている。
4. 彼を責任者にあげたのは失敗だった。

■ 例文（コーパス）

1. 自分は学生の頃に歴研の委員にあげられて、政治目的にそうて困った論文を書きました。
（鶴見俊輔編 『源流から未来へ』, 2005, 0 総記）
2. …この本質を、単に課長から部長に上げたということで本当に足りているのかという
と私は疑問ですが、…
（国会会議録／衆議院／常任委員会, 1998(『少納言』より))

■ 個別の解説

1

「(ある人の) 地位を向上させる」ことも、11「レベルを向上させる」ことの特殊な場合と考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

社会的な地位が伴うものであることが重要であり、部の会計や班長などあまり社会的な地位を伴わない役職では許容度が下がる。（誤）担任は山田を班長にあげた。（誤）鈴木は部員たちの推薦で、会計にあげられた。

14. (人が) { (物理的な) 声を発する}.

[あげる、上げる、揚げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<声>をあげる

■ 共起例

<声>

～の声：驚きの声、怒りの声、不満の声、抗議の声、批判の声、非難の声、感嘆の声、疑問の声、落胆の声、関（とき）の声

～声／声～：声、大声、歓声、喚声、産声、胴間声、叫び声、笑い声、掛け声、悲痛な声、声援

悲鳴、絶叫、名乗り

<副詞的要素>

いきなり（大声をあげる）、いっせいに（歓声をあげる）

■ 非共起例

<声>

（誤）文句

■ 例文（作例）

1. 彼女は恐怖のあまり悲鳴をあげた。
2. 誰かが大声をあげた。
3. 赤ん坊が笑い声をあげている。
4. 叫び声をあげようとしたが、犯人に口を押さえられた。
5. 試合が逆転し、観客はいっせいに歓声をあげた。
6. 彼はいきなりうめき声をあげて、その場にうずくまった。

■ 例文（コーパス）

1. 幸太郎は悲鳴にも似た声を上げた。
（遊直著 『オルガナー』, 2005, 9 文学）
2. 「もういい！」ワーナーが大声をあげた。
（ロバート・R・マキャモン 『スワン・ソング』 1994(『少納言』より)）
3. 将兵たちが絶叫をあげて転倒する。
（谷恒生 『革命児・信長』, 1998(『少納言』より)）
4. みな押し黙り、名乗りをあげる者はいなかった。
（西村賀子著 『ギリシア神話』, 2005, 1 哲学）

■ 個別の解説

1

「声を発する」という意味は、8「物が煙や炎を発生・上昇させる」という意味からの拡張と考えられる。2つの意味は、「(これまでなかったものを)発生させる」という点で共通しているからである。ただし、「煙」などは視覚で捉えられるものであるのに対して、「声」は聴覚の対象である。つまり、「視覚→聴覚」という拡張が生じていることになる。

■ 個別の誤用解説

1

声を発すること自体が重要であり、その内容を指す語の場合は許容度が下がる。(誤)人々は文句をあげた。

15. (人が) {意見・訴えを発する}.

[あげる、上げる、揚げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<意見>をあげる

■ 共起例

<声>

怒りの声、不満の声、抗議の声、批判の声、非難の声、疑問の声、同情の声

<副詞的要素>

いっせいに(不満の声をあげる)、異口同音に(抗議の声をあげる)

■ 非共起例

<声>

(誤) 怒り、つぶやき

■ 例文 (作例)

1. 国民の多くが原発反対の声をあげている。
2. 政府の対応に多くの人が怒りの声をあげた。
3. 電気代の不当な値上げに国民が一斉に非難の声を上げた。
4. 突然の雨で花火大会が中止になると、楽しみにしていた子供達が不満の声を上げた。
5. 差別をなくすには、当事者も抗議の声をあげる必要がある。
6. チームの連敗が続き、サポーターが非難の声をあげたが、監督の方針は変わらなかった。

■ 例文 (コーパス)

1. 女たちが驚きの声をあげた。
(伴野朗『始皇帝』1997(『少納言』より))
2. 人々は、展示品に視線を据え、説明に耳をかたむけ感嘆の声をあげる。
(吉村昭『大黒屋光太夫』2005(『少納言』より))

■ 個別の解説

1

14 の意味は、<何らかの感情、意見、訴えなど>という内容を表す<音声／言葉>を、実際に<人間が発する>ということであるのに対して、ここでの意味は、実際の音声を伴うという条件はなく、<何らかの意見、訴えなどを発する(生じさせる)>ということに焦点が当たっている。つまり、15 の場合、何らかの意見を文書に記したり、調査によって明らかになったりした場合を含む。

■ 個別の誤用解説

1

「～の声」という表現に限定される。(誤) 人々は怒り／同情をあげた。

16. (人などが) {望ましい結果を出す}.

[あげる、上げる、挙げる] (他動詞)

■ 構文フレーム

<人間等>が<望ましい結果>をあげる

■ 共起例

<主体>

※人、組織、物、行動など

<望ましい結果>

①効果、成果、実績、収益、利益、売上

②高得点、好成績、勝ち星、白星、新記録、勝利

<副詞的要素>

はっきり(と)(はっきりと成果をあげた)、一段と(一段と効果をあげる)、一向に(～ない)(一向に利益をあげられない)

■ 非共起例

<望ましい結果>

(誤) 結果

■ 例文 (作例)

1. あの会社は年に一兆円の利益をあげている。
2. 新人投手が初勝利をあげた。
3. 山田は政治家としてそれなりの実績を上げているそうだ。
4. 田中さんが関わるプロジェクトは、毎回見事な成果を上げている。
5. その治療は期待していたほどの効果をあげなかった。
6. 彼は次々に優れた研究業績をあげ、高い評価を得ている。

■ 例文 (コーパス)

1. 治癒率は高くないが、ある程度の効果を上げることができる。
(古瀬信ほか著 『臨床放射線医学』, 2002, 4 自然科学)
2. 蓮岡の努力は確実な成果を上げ、「どこを掘っても出せる」という確信があった。
(中村哲著 『医者井戸を掘る』, 2001, 5 技術・工学)
3. 通算勝利数四八勝という六大学記録をつくった男だが、これだけの勝ち星をあげるには、大学一年からマウンドに立たなければならない。
(江本孟紀『「プロ野球」仁義なき大戦争』, 1983(『少納言』より))

■ 個別の解説

1

「成績をあげる」であれば、11の「レベルを向上させる」の意味と考えられるが、「好成績をあげる」の場合は、「好成績をおさめる」と類義となり、16の「人間等が成果を出す」の意味となる。両者の違いはもともと存在しているもののレベルを向上させるのか(11)、成果を出現させるのか(16)の違いである。したがって、ここでの「あげる」は、8「物が煙や炎を発生・上昇させる」および14「人間が声を発する」からの拡張と考えられる。というのは、この3つの意味には、「無から有」、つまりこれまでなかったものを出現・発生させるという共通点が見られるからである。ただし、「効果をあげる」などの場合は、五感だけでは捉えられず、より知的な営みを必要とするものである。より抽象的な意味とも言える。

■ 個別の誤用解説

1

非共起例で示したように、「結果をあげる」とは言わない。「成果」「効果」などにはプラスの意味が含まれているのに対して、「結果」の基本的な意味は中立的だからである。「結果」が中立的であるということは、「よい結果」とも「悪い結果」とも言えることからわかる。

17. (人が) {対象や注目すべきものを具体的に示す}.

[あげる、挙げる、上げる、揚げる] (他動詞)

構文フレーム：

<人間>が<注目すべきもの> {として・に} <対象>をあげる。

■ 共起例

<主体>

※人・組織など

<注目すべきもの>

①候補、リスト (のトップ)、名簿、ラインナップ、ランク、上位、筆頭、ノミネート、
話題、議題、課題、俎上、容疑者

②証拠、根拠、例、噂

<対象>

名前、名、組織 (を あげる)

証拠、例、表、文献、問題点

<副詞的要素>

次々 (と) (次々と具体例をあげる)

■ 非共起例

<対象>

(誤) 姓名、(誤) 姓

■ 例文 (作例)

1. 選考委員会は、今年を受賞者候補として田中の名前をあげた。
2. 好きな映画について、いくつか作品名を挙げてもらった。
3. 温暖化現象について、いくつか実例をあげてみよう。
4. 「なにか例を挙げて説明していただけませんか。」
5. 個人名をあげて非難するのはよくない。
6. 彼は論文で、その事実を証明する多くの証拠をあげている。

■ 例文 (コーパス)

1. 霊柩車につき添うべき人間として、或いは記念像制作の委員会の長として、みんなが
真っ先に名前を上げたのも彼だった。
(平野啓一郎著 『葬送』, 2002, 9 文学)
2. バリ島にまつわるミステリアスな噂をあげると枚挙にいとまがない。
(旗家風生著 『バリ』, 1996, 3 社会科学)

■ 個別の解説

1

「役者を舞台にあげる」「(上空に) アドバルーンをあげる」などの例からもわかるように、「人間であれ物体であれ、高いところに移動させる」(1、2、3) ことによって、その対象は、人々の「目につく、あるいは注目される」状態になる。このことから、「あげる」が「人間が、注目すべきものとして対象を提示する」という意味に拡張したと考えられる。

18. (警察などが) {犯人や証拠を見つける}.

[あげる、挙げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<犯人や証拠>をあげる

■ 共起例

<犯人や証拠>

犯人、死体、証拠

<副詞的要素>

次々 (と) (次々証拠をあげる)、とうとう (犯人をあげた)

■ 非共起例

<犯人や証拠>

(誤) 殺人鬼、(誤) 遺留品

■ 例文 (作例)

1. 警察は証拠をあげられなかった。
2. 田中探偵はいつも直感とひらめきでホシをあげる。
3. 警察はとうとう犯人をあげた。
4. このファックスは、「犯人をあげられるものならあげてみろ」という挑戦状だ。
5. 「犯人をあげるまでが勝負だ。気を抜くな」
6. 今回あげられた証拠を前に、容疑者は黙ってしまった。

■ 例文 (コーパス)

1. このファックスは、犯人をあげられるならあげてみろという挑戦状だ
(宗田理著 『ぼくらの「第九」殺人事件』, 1993, 9 文学)

■ 個別の解説

1

「証拠をあげる」は、17 と 18 の2つの意味に解釈できる。「主張の妥当性を示す証拠をあげる」という場合は、「提示する」という意味であるのに対して、「(大捜査の結果) ようやく証拠をあげた」という場合は、「見つける」という意味である。また、18の意味も、17の場合と同様に、「人間であれ物体であれ、高いところに移動させる」(1、2、3) ことによって、その対象は、人々の「目につきやすい」状態になる(したがって、「見つかりやすい」) ことに基づくと考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

かなり慣用化された表現であり、意味的に類似した表現でも許容されないものが多い。(誤) 警察はとうとう殺人鬼をあげた。(誤) 警察は犯人の遺留品をあげた。

19. (人が) {神仏に祈りを捧げたり物を供えたりする}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<供物や経>を (<神仏>に) あげる。

■ 共起例

<お経・供え物など>

お供え、線香、お経、お賽銭

■ 非共起例

<供物や経>

(お供え物であっても) (誤) ミカン、(誤) おはぎ

■ 例文 (作例)

1. お坊さんがお経をあげている。
2. 太郎はお墓に線香をあげた。
3. 先ほどから祝詞があげられている。
4. 太郎があげたお供え物が、風で飛んでしまった。
5. あれ以来、2、3回線香をあげに来ている。
6. お経をあげながら、花子は泣いてしまった。

■ 例文（コーパス）

1. 神主さんは神様に祝詞を奉上するときに、「畏み、畏み申す」というし、その時は神様の前だから、カシコマッて祝詞を上げる。

（高田哲郎著 『あちや・むし・だんべえ物語』, 2004, 8 言語）

■ 個別の解説

1

神道で「神棚」は高いところにあることから、「供物をあげる」などは、「あげる」の「下から上へ移動させる」（1, 2, 3）という意味を含む。また、仏教の仏壇は高いところはないが、「神仏に供える」という点では共通しているので、「あげる」が使われるようになった。さらに、「祝詞」などは、物ではないが、「供物」などと同様に、神仏に対するものであることから、「あげる」が使われるようになったと考えられる。

20. （人が）{式を行う}.

[あげる、挙げる]（他動詞）

構文フレーム：<人間>が<式>をあげる。

■ 共起例

<式>

式（結婚式の意）、結婚式、祝言、婚儀、成人式、葬式

■ 非共起例

<式>

（誤）卒業式、（誤）除幕式

■ 例文（作例）

1. 子どものために立派な結婚式をあげてやった。
2. 小さなレストランで式をあげた。
3. 6月に結婚式をあげることになりました。
4. 成人式をあげていない子どもは大人とはみなされない。
5. ペットが死ぬとお葬式をあげる人が増えている。

■ 例文（コーパス）

1. この結婚式を挙げて来年がちょうど五十年に相当致します。

（高村光雲著 『幕末維新懐古談』, 1995, 7 芸術・美術）

2. ヤオ族の世界観によると、成人式をあげる以前の子どもは、まだ民族的アイデンティティの面では未帰属状態にあるとみなされて…
(竹村卓二『異文化での人間体験』, 1990 (『少納言』より))
3. ペットが死ぬとお葬式をあげる人も増えており、火葬し、墓を立て、供養してくれる「ペット霊園」が人気を集めている。
(渥美裕子／早坂暁『クローズアップ現代』, 2001 (『少納言』より))

■ 個別の解説

1

「式を行う」ということは、日常的でない特別なことであり、1, 2, 3, 17 と同様「注目される」ことであることから、「あげる」を使うことができると考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

結婚式のような個人的な式に限定され、「*卒業式／除幕式をあげる」とは表現できない。

21. (人が) {力を結集して物事を行う}.

[あげる、挙げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<組織・力>をあげる。

■ 共起例

<組織・力>

- ①団体：国、村、倒幕の兵、全社、全市、局
- ②力：全力、総力、全身全霊

■ 非共起例

(誤) 家、(誤) 家族

■ 例文 (作例)

1. 職員は全力をあげて問題の解決にあたった。
2. 「みんな、絶好のチャンスだ。試合時間残り 3 分、全力をあげてぶつかれ！」
3. A 研究所が総力をあげて大規模なコーパスを作った。
4. オリンピック代表選手に対して、国をあげて支援する。
5. 国をあげての対策が功を奏して、インフルエンザの猛威はおさまった。
6. 先の大失態に対して、今後全社をあげて名誉挽回に励むつもりだ。

■ 例文（コーパス）

1. 従来の住吉祭り、川開き、開港記念祭と商工祭を一つにまとめたビッグイベントで、全市をあげて行う盛大な夏祭りである。
(高橋秀雄, 近藤忠造編 『祭礼行事』, 1993, 3 社会科学)
2. 技術陣は現在、総力を上げて本格的な乗用車の開発に取り組む意欲に燃えています。
(佐藤正明著 『ザ・ハウス・オブ・トヨタ』, 2005, 5 技術・工学)

■ 個別の解説

1

「国をあげて支援する」というように、「～をあげて（何かを行う）」という形で使う。また、この意味は、11「レベルを向上させる」からの拡張と考えられる。というのは、「国をあげて」「全力をあげて」などは、物事のやり方として、ある観点から見て、最も高いレベルだからである。そのため、形態素「全-」を含む語との共起することが多い。

■ 個別の誤用解説

1

「家族全員で（ピアニストを目指している）娘を応援する」という状況でも、「家／家族をあげて娘を応援する」とは言いにくい。

22. 終了・完成する

22A. 【終了・完成】{仕事を完了する}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<仕事等>をあげる。

■ 共起例

<仕事等>

仕事、原稿

■ 非共起例

<仕事等>

(誤) 工事、(誤) ファイル

■ 例文（作例）

1. 彼は徹夜で原稿をあげた。
2. この仕事は何としても期日までにあげなければならない。

3. 「まずい、締め切りだ。今日中に原稿をあげないと…」
4. 原稿をあげてきたら、すぐに印刷に回します。
5. 二三日徹夜しないと、この仕事を期日までにあげられそうにない。
6. 締め切り通りに原稿をあげる作家なんて、そうそういませんよ。

■ 個別の解説

1

この意味は、「書きあげる」、「仕上げる」などの複合語「-あげる」の完了の意と結び付いていると考えられる。

■ 個別の誤用解説

1

慣用化された表現であり、具体的な仕事内容を対象として取ることは難しい。（誤）明日までに工事をあげなければならない。（誤）やっと頼まれていたファイルをあげた。

22B. 【終了・完成】{費用をある範囲ですませる}.

[あげる, 上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<費用>を<ある範囲>であげる。

■ 共起例

<費用>

費用、経費、パーティー（の費用）、旅行（の費用）

<ある範囲>

〇円、格安、安く（形容詞連用形）

<副詞的要素>

どうにか（安くあげる）、必死に（1万円であげた）

■ 非共起例

<ある範囲>

（誤）ただ

■ 例文（作例）

1. 宴会の費用は、できれば一人三千円くらいであげたい。
2. 「旅費は青春18切符で安くあげよう！」「いいね！」
3. 「今回のパーティ、一人一万円くらいであげられない？」
4. 「夏の旅行、交通費を安くあげれば、もう一箇所まわれるかもしれないね」

5. 交渉したら、費用を格安であげることができた。
6. 「交通費を安くあげるなら、夜行バスがお勧めだよ！」「そうなんだ。じゃあそうしようかな。」

■ 例文（コーパス）

1. いくら莫大な財産があるからといって、安くあげられるところは安くあげるのが、わが明神学園の方針らしい。
（風見潤『黒幕をやっつけろ』2001（『少納言』より））

■ 個別の誤用解説

1

ここでの「あげる」は「催しなどの費用」に使われるのが普通であり、（衣服などの）商品について、予算より安く買うことができた場合には、「このコートは1万円であげた」とは言えない。その場合、「1万円だった」「1万で買えた」などと言う。

22C. 【終了・完成】{揚げ物を完成させる}.

[あげる、揚げる]（他動詞）

構文フレーム：<人間>が<食材>を {<道具>で} あげる。

■ 共起例

<食材>

天ぷら、フライ、カツ、エビ

<道具>

フライパン、油

<副詞的要素>

からっと（天ぷらをからっとあげる）、じっくり（あげる）

■ 非共起例

<副詞的要素>

（誤）こんがり（と）

■ 例文（作例）

1. フライをじっくりとあげた。
2. 「晩御飯はカツを揚げるね。」「わーい！」
3. 私はてんぷらをからっと揚げられない。
4. フライパンで揚げると、油の処理が楽だ。

5. 「エビは高温ですばやく揚げるとおいしいよ。」
6. 高温で揚げるときは、火傷をしないように気を付けないといけない。

■ 例文（コーパス）

1. ナスを四つ割りにし、サラダ油で揚げ、ショウユ洗いしておく。
（遠藤十士夫著 『先附』, 1994, 5 技術・工学）

22D. 【終了・完成】{バッテリーを放電させる}.

[あげる、上げる] (他動詞)

構文フレーム：<人間>が<バッテリー>をあげる。

■ 共起例，非共起例

<バッテリー>

（誤）車、（誤）電池

■ 例文（作例）

1. 車のバッテリーをあげてしまった。
2. 車のバッテリーをあげてしまい、あわてて交換した。
3. バッテリーをあげてしまっは仕事にならない。
4. バッテリーをあげてしまったので、JAFをよんだ。

■ 例文（コーパス）

1. あまりに車に乗らず、バッテリーをあげてばかりいるので、時々バッテリーチェッカーで、バッテリーの電圧を計ろうと…
（Yahoo!知恵袋／スポーツ、アウトドア、車, 2005（『少納言』より））

■ 個別の誤用解説

1

車のバッテリーをあげるわけであるが、車自体を目的語として取ることはできない。（誤）
彼は車をあげてしまった。

全体の用法解説
文法情報

	あげられる (受身)	あげられる (尊敬)	あげさせる (使役)	あげよう (意思)	あげている (継続)	あげている (結果・完了)
1	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	△
3	△	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○	○
7	△間接受身	×?	×	×	○	○
8	○	×	×	×	○	×
9 自	×	×	×	×	○	×
10	○	○	○	○	○	○
11	○	○	○	○	○	○
12	○	○	○	○	×	○
13	○	○	○	○	×	○
14	○	○	○	○	○	○
15	○	○	○	○	○	○
16	○	○	○	○	○	○
17	○	○	○	○	○	○
18	○	○	○	○	×	○
19	○	○	○	○	○	○
20	○	○	○	○	○	○
21	× (○兵)	○	○	○	○	○
22A	×	○	○	○	×	○
22B	○	○	○	○	×	○
22C	○	○	○	○	○	○
22D	×	○	○	○	×	○

複合語

・ーあげる

上への移動：引っ張りあげる・跳ね上げる・舞いあげる・持ち上げる・見上げる・打ち上げる、
投げ上げる、釣り上げる、巻き上げるレベルの向上？：盛り上げる発声：読みあげる・謳い上
げる完了：切り上げる・拭きあげる・しあげる・書きあげる・焼きあげる・作り上げる・炊き
あげる・染めあげる、敬意：差し上げる・申し上げる家への移動：招きあげるその他：取り上
げる、繰り上げる

・あげー

上への移動：あげ続ける・あげ過ぎる

慣用表現

1：棚にあげる

意味： 知らん顔をして問題にしない。不都合なことには触れずにおく『デジタル大辞泉』

例・コーパス： 自らの責任を{棚に上げて}、よくもこのような発言ができたものだ。（植村
信保著 『生保のビジネスモデルが変わる』, 2003, 3 社会科学）

3：腰をあげる

意味： 行動するための態勢を取る

例・コーパス： ふたたび、ジャン・ポール・ベルモンド似の支配人にお願いと、ようやく
重い{腰を上げる}感じで1本のロマコンがワゴンにのせられ運ばれてきた。（田島みるく著
『やさしくわかるワイン入門』, 2004, 5 技術・工学）

3：手をあげる

意味： 降参する。

意味： 乱暴をはたらく。

3：眉をあげる

意味： 眉を吊り上げて怒りを顔に出す。

3：頭をあげる

意味： 他の者を抑えて勢力を伸ばす。

3：尻をあげる

意味： 訪問先から帰ろうとする（デジタル大辞泉）

6：床をあげる

意味： 敷いていた布団などの寝具を片付ける。また特に病気が良くなって寝具を片付ける。

10：熱をあげる

意味： 夢中になる。気炎をあげる。

例・コーパス： ミスター・スミスの精悍な顔をひと目見たら、間違いなくその場で{熱を上げ
る}だろう。（アン・スチュアート著;村井愛訳 『水辺の幻惑』, 2004, 9 文学）

11：手をあげる

意味：腕前や技量が進歩する。

11：腕をあげる

意味：腕前、技術を進歩させる。

例・コーパス： 学歴を手に入れ、仕事を手に入れ、美しい身体や顔を手に入れ、料理の腕を上げ、教養を高め、ファッションセンスを磨く。（長坂道子著 『世界一ぜいたくな子育て』, 2005, 5 技術・工学）

意味：飲める酒の量が前より増える。

14：産声をあげる

意味：赤ん坊や事が新しく生まれること。

例・コーパス： 助産婦さんが必死に「泣いて！ 泣いて！」とほおを叩き、やっと産ぶ声を上げたときの安堵と感激を忘れることはできません。（森毅監修 『息子、娘に頼らず老後を楽しく生きる法』, 2000, 3 社会科学）

例・コーパス： 細野が生まれた59年は「週刊少年サンデー」、「週刊少年マガジン」（講談社）が創刊され、9歳の時に「週刊少年ジャンプ」（集英社）が産声を上げた。（桐山秀樹著 『マンガ道、波瀾万丈』, 2005, 7 芸術・美術）

15：音をあげる

意味：弱音をはく。降参する。

17：槍玉に挙げる

意味：非難・攻撃の目標にして責める。

17：名を揚げる

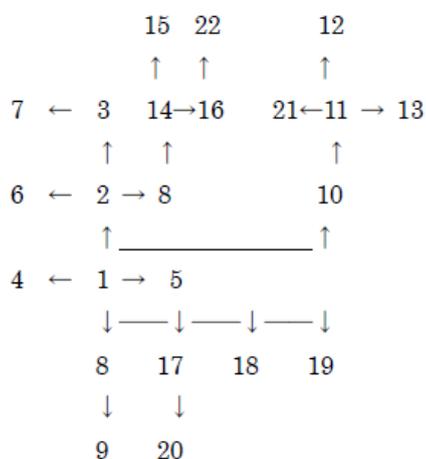
意味：名声をあらわす。有名になる。

例・コーパス： 一方で、これだけ人気が高いサッカーの分野で、それほど名を上げたブランドがないのは不思議です。（並木浩一著 『腕時計一生もの』, 2002, 5 技術・工学）

18：星を挙げる

意味：犯人または犯罪容疑者を検挙する。

多義ネットワーク



関連語

- 1 類義語：載せる（網棚に荷物を載せる）／対義語：下げる、下ろす
- 2 類義語：打ち上げる（花火/フライを打ち上げる）／対義語：下げる、下ろす
- 3 対義語：下げる、下ろす
- 4 類義語：出す（子どもをプールから出す）／対義語：入れる
- 5 類義語：入れる（客を家に入れる）／対義語：（追い）出す
- 6 類義語：片付ける（布団を片付ける）／対義語：敷く
- 7 類義語：吐く（酔って吐く）
- 9 類義語：満ちる（潮が満ちる）／対義語：引く
- 10 対義語：下げる
- 11 類義語：向上させる（成績を向上させる）／対義語：下げる
- 12 類義語：入れる（子どもを幼稚園に入れる）
- 13 類義語：する（Aさんを課長にする）／対義語：降ろす、落とす
- 14 類義語：出す（大声を出す）
- 15 類義語：発する（怒りの声を発する）
- 16 類義語：出す（成果を出す）
- 17 類義語：出す（～を話題に出す）
- 18 類義語：見つける（犯人/証拠を見つける）
- 19 類義語：供える（お団子を供える）
- 20 類義語：する、執り行う（結婚式をする/執り行う）
- 21 類義語：傾ける（全力を傾ける）
- 22A 類義語：終える（仕事を終える）
- 22B 類義語：済ませる（安く済ませる）
- 22C 類義語：作る（天ぷらを作る）

6.3 【さがる】

アクセント：LHL

活用情報：sagar-・子音語幹動詞（グループ I）

語義一覧

01. 身体・物が下方に移動
02. 人間・動物が基準点から離れる移動
03. 人間が重要なところから離れる移動
04. 南への移動（ある地域のみで）
05. 物が下に向かって空中のある範囲を占有
06. 物の一端が低い位置にある状態
07. 数量の減少
08. レベルの低下
09. 官庁などからの交付（支給）
10. 時代が後世になる

01. 身体・物が下方に移動

語義：身体の一部、物の全体・一部が、それまであった位置からより低いところに移動する。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜身体の一部、物の全体・一部＞がさがる

■ 共起例：

＜身体の一部＞：肩、手、頭、ひじ、目尻、視線、胃、血

＜物の全体・一部＞：地盤、靴下、ズボン、エレベーター、遮断機、幕、機首、水位、海面、潮

＜副詞的要素＞：ゆっくり、すこし、一気に、徐々に

「水位」などの場合：どンドン（水位がどンドンさがる）、ぐんと、ぐっと、ぐんぐん、一段と、だんだん、次第に

■ 非共起例：「川の水位がさがる」とは言えても、通常「川がさがる」とは言えない。

■ 例文・作例：

1. エレベーターが三階から一階へ下がる
2. 雪の重みで松の枝が下がった
3. あの投手は疲れてくると肘がさがるのが欠点だ。

4. ベルトがゆるくて、ズボンがさがってきたのには困った。
5. あの人は、うれしいと目尻がさがる。
6. 日照り続きで、ダムの水位がどんどんさがっていく。

■ 例文・コーパス：

1. 両手を広げたときに、肘が下がり、肩が上がらないように。(後藤早知子編『バレエ式ソフトストレッチダイエット』, 2004, 5 技術・工学)
2. しかし、シルダリア側の水位が急激に下がったため、クパンダリエ地域への水供給は難しくなった。(李愛俐娥著『中央アジア少数民族社会の変貌』2002, 3 社会科学)
3. 機首がゆっくりと下がり、前脚が滑走路面を捉えた。(鳴海章著『バディソウル』2005, 9 文学)
4. スーッと血が下がって、膝から急にガクッと力が抜けていく。(ひちわゆか著『ラブ・ミー・テンダー』2001, 9 文学)

■ 個別の解説：

1の意味が最も基本的な「さがる」の意味だと考えられる。「ダムの水位が5 mから1 mにさがった」のように、起点と到着点を表すこともある。また「ダムの水位が2 mさがった」のように移動位置の距離とも共起する。また、「さがる」が低いところへの移動を意味しているが、「下にさがる」のように低いところへの方向も同時に表すことも可能である。

意味の中心となるのは1だが、2以下の拡張の意味で用いられることのほうが多い。

■ 個別の誤用情報：

人間・動物の上から下への移動には、「下がる」よりも「下りる」「下る」などの表現が用いられることが多い。たとえば、「花子は二階から一階におりた」という言い方は問題ないが、「おりた」を「下がった」に言い換えることはできない。また、「花子は坂道をくだっていった」という文は適切であるが、「くだって」を「下がって」に言い換えることはできない。

02. 人間・動物が基準点から離れる移動

語義：人間・動物が、基準となるところから離れて、別のところへ移動する。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間・動物>が<基準点>から<別のところ> {へ・に・まで} さがる

■ 共起例：

<人間・動物>：(基本的に自分の意志で移動できるもの。人間、動物、機械など)

<基準点>：線、マーク、線路

<別のところ> :

～へ：後ろ、部屋の隅

～に：後ろ、後方

～まで：白線、壁際

<副詞的要素> : 少し、ちょっと、一歩、ゆっくり、すばやく

■ 非共起例 :

<別のところ> : ×前、右、左

■ 例文・作例 :

1. 黄色い線から下がってお待ちください。
2. 白線の内側までおさがりください。
3. 手が届かないところまで下がった。
4. 一歩下がる。

■ 例文・コーパス :

1. バリアフリーについても、私の主張が、ある程度の理解は得られて、実践に移されましたが、鉄道駅ホームにおける「視覚障害者」に対する「安全確保」の措置は、未だに「白線から下がってお待ち下さい」という、血の通っていない、通り一遍の健常者向けで済まされています。(古閑雅之著『明日を探して』, 2004, 2 歴史)
2. わざわざ壁際まで下がってから勢いをつけて、がんっ、といきなり扉を蹴りつけた。(真堂樹著『サディスティックアクア』, 1998, 9 文学)
3. すばやく立ち上がり、弥七は後ろへ一歩下がった。(城野隆著『妖怪の図』, 2001, 9 文学)

■ 個別の解説 :

①一般的に「前から後ろへの移動」と記されることが多いが、必ずしも顔の向きに関わる「後ろ」ではなく、ある基準点から離れる移動をさしていると考えられる。着点や方向を表す「後ろ(に・へ)」と共起することが多いため、前から後ろへの移動に注目した記述がなされると考えられる。「前から下がる」という表現は見当たらない。「扉の前から下がってお待ち下さい」という表現はあるが、これは「扉の前」という場所を表しているにすぎない。

②いわゆる「後ずさり」(顔は前を向いたまま後ろに下がる移動)は「後ろへ下がる」と表現されるが、これも基準点を、「顔の向きでとらえた「前」とし、そこから離れる移動となるので、「基準点から離れる移動」に含まれている。

③バスケットボールやサッカーなどの球技において、自らの陣地に戻ることも「さがる」という。これは進むべき相手ゴールを基準点とし、そこから離れるという意味で「さがる」が用いられると考えられる。つまり、「進むべき方向」と考えられる方向の逆へと移動する表現であ

るといえる。

④1. 「(身体・物が) 下方に移動」に対して、ここでの「下がる」は「水平移動」である。ただし、「下方移動」でも、「下がる」前の上方の位置が一種の基準点と考えられるので、上方に位置しなくとも、基準点と見なせるもの一般に、「さがる」を使うようになったと考えられる。

■ 個別の誤用情報：

<別のところ>への移動に用いられるが、「前へさがる」「右へさがる」「左へさがる」のように「後ろ」以外の方向とは共起しない。

03. 人間が重要なところから離れる移動

語義：人間が、上の立場の人がいるところや重要なところから離れて、別のところへ移動する。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>が<重要なところ> {を・から} <別のところ> {に・へ} さがる

■ 共起例：

<重要なところ>

～を：御前、校長室

～から：城中、屋敷

<別のところ>：控え室、楽屋、宿、(野球の) ベンチ

<副詞的要素>：

■ 非共起例：

<重要なところ>：×会議室、試験場

■ 例文・作例：

1. 役者が舞台から楽屋にさがった。
2. 控え室に下がって待つ。
3. 奉公人が宿に下がる。
4. 宿へ下がる。
5. 下がっておれ。
6. 下がって控えよ
- 7.

■ 例文・コーパス：

1. 瀬川主馬の前から下がって来た弦一郎は、本石町四丁目の駿河屋を訪ねた。
(森村誠一著『悪夢の使者』, 2001, 9 文学)

2. 看護婦のアイさんが珈琲を二つ運んできたのを機に、若い医師や看護婦たちは一礼して病室から下がる。(久世光彦著『へのへの夢二』, 2004, 9 文学)

■ 個別の解説 :

- ①「学校を下がって働きのでる」のように学校をやめるという意味や、「5時に会社を下がる」のように(うちに)帰るという意味で用いられることもある。しかしこれらは現代語においての使用はあまりない。
- ②身分や地位の高い人の前から退出したり、役所や奉公先などの公の場から退いたりする際に用いられる。「一般的に「退出」の謙譲語」としている辞書(『新明解国語辞典』)もある。現代では劇やコンサートなどの表の舞台から裏の控室などに移動する際に用いられる。また、野球などで「ベンチに下がる」と言う場合、「試合から退く」「他の選手と交代する」ことも表す。
- ③「下がる」の使役の形で用いられることが多く、「侍従を／女中を／兵士を／家人を下がらせる」や「家人をその場から下がらせた」などの表現がみられる。
- ④「上の立場の人(がいるところ)」や「(相対的に)重要な場所」は、2の「基準となるところ」の特殊な場合と考えられる。また、身分の高い人のところや公の場など、心理的・概念的に「上」の意味からの移動であるため用いられる用法だと考えられる。従って、3は2から拡張したと考えられる。

■ 個別の誤用情報 :

「舞台から楽屋にさがる」とは言えても、(野球などで)「グラウンドからベンチにさがる」とは言わない。このような状況では、単に「ベンチにさがる」と言う。

04. 南への移動(ある地域のみで)

語義：人間が自分の意志で、ある場所を通過して、ある場所まで、南へ移動する。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<人間>が<経路>を<着点>までさがる

■ 共起例 :

<経路> : ○○通り、道

<着点> : (場所の名前)、角、交差点

<副詞的要素> : まっすぐ、ちょっと、少し

■ 非共起例 : なし

■ 例文・作例 :

1. 河原町通りを四条までさがる。
2. 御堂筋を下がったところにその店はある。

■ 例文・コーパス：

1. 四条寺町を下がった大雲院の門前で、いつも高台子を置いている易者はんどす。(澤田ふじ子著『狐官女』, 2005, 9 文学)

■ 個別の解説：

この表現は主に京都(一部大阪)での移動で使用される。北に位置する御所から離れる方向(南)へ移動することからきている。「御所」が、ある時代の日本において「上の立場の人(がいるところ)」であり「重要な場所」であることから(3を参照)、ここでの意味が生じたと考えられる。

■ 個別の誤用情報

なし

05. 物が下に向かって空中のある範囲を占有

語義：上端を固定された物が、下に向かって、空中のある範囲を占める(占めている)。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<物>がさがる

■ 共起例：

<物>：つらら、洗濯物、のれん、シャンデリア、ライト、カーテン、風鈴、垂れ幕

<副詞的要素>：だらりと

■ 非共起例：

<物>：×ペンダント、ネックレス(「首からペンダントがさがっている」とは言わない)

■ 例文・作例：

1. 入り口にのれんがさがっている。
2. 縁側に風鈴がさがっていると、涼しげな感じがする。

■ 例文・コーパス：

1. 中に入ると高い天井からライトが下がり、農村の風景と農家の建物。(清水茂夫著『遙かなる北京の風』, 2004, 3 社会科学)
2. その舞台の両側には、天井から床までとどく、青いビロードのカーテンが下がっている。(森田裕子著『サーカス』1995, 7 芸術・美術)

■ 個別の解説：

下を向いている端は不安定な状態であることも意味している。なお、「のれんがさがっている」などの場合、実際には、単に、物が空中のある位置を占めているという状態にあるわけだが、その状態を（仮想的に）「上から下への移動」の結果として捉えていると考えられる。

■ 個別の誤用情報

通常、「(店の入り口に) のれんがさがる」とは言わず、「のれんがさがっている」と言う。つまり、この意味の「さがる」が文末で用いられる場合は、「～ている」の形で用いられ、(結果の) 状態を表す。

06. 物の一端が低い位置にある状態

語義：物の一端が他よりも低い位置にある。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<物(の一端)>がさがる

■ 共起例：

<物(の一端)>：眉、右、左、口角、まぶた

<副詞的要素>：少し、やや、さらに

■ 非共起例：

<物(の一端)>：×帽子

■ 例文・作例：

1. 右肩がやや下がっている。
2. (ポスターの右が) ちょっと下がっているから、もうちょっとあげて。

■ 例文・コーパス：

1. ミカリンは目がくっ付きすぎていて口がへの字口で下がっているよね！(Yahoo!知恵袋, 2005, エンターテインメントと趣味)
2. 肩や腕に力が入ると右肩が下がる。(仲沢伸一著『上達する！野球』,2004,7 芸術・美術)

■ 個別の解説：

「右肩が下がっている」のように、肩全体の中の一部が低い位置にあるものもあれば、「口角が下がっている」のように両端が低い位置にある表現もみられる。「下がっている」の形で、物の状態を表す。なお、「ポスターの右がちょっと下がっている」という場合、実際に「下が

った」わけではないが、5の場合と同様、仮想の移動（変化）を想定して、「下がった」結果として捉え、「下がっている」と表現している。

■ 個別の誤用情報

この意味の「さがる」は、「眉」などの水平方向に伸びているのが普通であるものに関して、一端が他よりも低い位置にある場合を表す。したがって、犬の耳などについては、「耳がさがっている」と言わず、「耳が垂れている」と言う。

07. 数量の減少

語義：数量（として捉えられるもの）が、何らかの基準（となる時点）と比べて減少する。

自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜数量＞がさがる

■ 共起例：

＜数量＞：

- ① 価格：値段、値（ね）、価格、料金、地価、単価、物価、株価、株、相場
- ② 賃金：賃金、給料、時給、年収
- ③ 温度：温度、気温、体温、水温、熱
- ④ 速さ：スピード、速度、ピッチ
- ⑤ 比率：確率、出生率、失業率、生存率、心拍数、金利、税、税金、コスト、ボルテージ
- ⑥ 度合（～度）：濃度、精度、好感度、知名度、容認度、血圧、テンション
- ⑦ 年齢：年齢、学年
- ⑧ テストの点数、成績

＜副詞的要素＞：どんどん、さらに、ぐんと（気温がぐんと下がる）、急激に、だんだん、じわじわ、大幅に、徐々に、一気に、なかなか（～ない）、やや

■ 非共起例：「好感度がさがる」とは言えるが、「好感がさがる」とは言えない。

■ 例文・作例：

1. 成績が一番から大きく下がった。
2. 夜になると一段と気温がさがった。

■ 例文・コーパス：

1. このところ商品価格が下がっています。(Yahoo!ブログ, 2008, ビジネスと経済)
2. ブドウ糖がグリコーゲンになってブドウ糖じゃなくなるから血糖値が下がるんでしょ。

(Yahoo!知恵袋, 2005, 教養と学問、サイエンス)

3. 大手なら最大の収入源は手数料だが、現在ではその比率が下がり、企画などへの対価（フィー）が増える傾向にある。(寺田信之介編著『よくわかる広告業界』2002,6 産業)

■ 個別の解説：

「数量の減少」は1「物が低いところに移動」(下方への移動)と相関関係がある。例えば、積みあがった積み木を取り除くに従って、積み木の位置はより低い位置になる。つまりは、私たちが有するこのような経験を基盤として、本来は「事物の下方への移動」を表す「さがる」という語を、「数量の減少」にも拡張して用いていると考えられる。

■ 個別の誤用情報：

「能率/効率」などの場合、「さがる」を使うよりも「作業を長時間続けると、能率が落ちる」というように、「落ちる」を使う方が自然である。

08. レベルの低下

語義：ある物事のレベル・水準が、より悪くなる。

表記：あがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：<レベル・水準>がさがる

■ 共起例：

<レベル・水準>：レベル、水準、評価、価値、調子、腕、腕前、効率、能率、地位、成績、業績、人気、士気、順位、番付、ランキング、点数、恋愛運、仕事運、金運、ランク、格、トーン

<副詞的要素>：どんどん(効率がどんどんさがる)、ぐんと(腕前がぐんとさがる)、ぐっと(ぐっと評価がさがる)、一気に(業績が一気にさがる)、だんだん(だんだん人気さがる)、じわじわ(じわじわ人気さがる)

■ 非共起例：

<レベル・水準>：×気持ち、気分

■ 例文・作例：

1. プロジェクトが失敗し、彼の評判はみるみる下がっていった。

■ 例文・コーパス：

1. 昨日、質問3コと回答4コしてBAも一つ貰ったのに全体順位が150ぐらい下がってます。(Yahoo!知恵袋, 2005, Yahoo! JAPAN)
2. こうして自己評価が段々下がってきて、自分の存在が無価値に思われ、更には周りの人に迷惑をかけているのではないかと自罰的になって、苦しむようになる。(吉松和哉著『医者と患者』2001,4 自然科学)
3. 日本では一般的には会社を移るたびに前より会社のレベルが下がることが多い。(青木雄二著『ゼニと成功法則』2000,3 社会科学)

■ 個別の解説：

「点数がさがる」などは、7「数量の減少」とここでの「レベルの低下」の両方の特徴を含んでいると考えられる。というのは、「テストの点数が90点から70点にさがった」という場合、「数量の減少」であると同時に「レベルの低下」でもあるからである。このような用例を橋渡しとして、「レベルの低下」のみを焦点化したのがここでの意味である。

■ 個別の誤用情報：

「士気がさがる」とは言うが、「やる気がさがる」とは言わない。この場合、「やる気が萎える／失せる」が普通である。

09. 官庁などからの交付（支給）

語義：官庁などの公的機関から、要求していたものが、要求していた人に与えられる。

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜要求していたもの＞がさがる

■ 共起例：

＜要求していたもの＞：恩給、旅券、パスポート、免状、許可

＜副詞的要素＞：すぐに、やっと、一向に・なかなか（～ない）

■ 非共起例：

＜要求していたもの＞：×保険金（「保険金がおりる」が普通）

■ 例文・作例：

1. 営業許可がやっとさがった。

■ 個別の解説：

「恩給がおりた」「営業許可がおりた」という表現が使われることが多い。

どちらにしても、公的機関を「上」に見立て、そこから得られたものを「おりる・さがる」で表現していると考えられる。えてして、「下がる」が用いられる場合は「レベルの低下」や「数量の減少」を見ても望ましくない結果で使用されることが多いが（物価が下がるなどは別）、この表現では望んでいたものが手に入るという意味に特化している。

なお、ここでの意味は、3「人間が、上の立場の人がいるところや重要なところから離れて、別のところへ移動する」からの拡張である。というのは、まず、ここでの＜官庁などの公的機関＞は＜上の立場の人がいるところや重要なところ＞の一種と考えられる。また、ここでの＜要求していたものが、要求していた人に与えられる＞ことは、「状況の変化」であるが、「意見が通る」「不況が押し寄せる」などからもわかるように、「変化」を「移動」として捉えることによって、本来、移動を表す「下がる」が状況の変化を表すのにも用いられているわけである。

■ 個別の誤用情報：

「許可がさがる」に対して「許しがさがる」とは言わない。「許し」の場合、「上司の許しを得て、企画を進める」というような使い方をする。

10. 時代が後世になる

語義：時代・時がその後のある時代・時に移行する

表記：さがる、下がる 自他の区別：自動詞

構文フレーム：＜時代・時＞ {が} ＜その後の時代・時＞にさがる

■ 共起例：

＜時代・時＞：時代、年代

＜その後の時代や時＞：時代、年代

＜副詞的要素＞：

■ 非共起例：(誤) 時間

■ 例文・作例：

1. 江戸時代に下がると
2. 時代が下がって明治となる。

■ 例文・コーパス：

1. こういう物は、時代が下がるにつれて面白味のない絵になります。(村田喜代子著『人が見たら蛙に化れ』, 2004, 9 文学)

■ 個別の解説：

時の流れを川に見立てると、過去は上流、時が流れるほど下流となる。その上下のイメージから時代を後世に下ってみることを「さがる」というのではないだろうか。

ここでの「さがる」は「時間」に関係する意味である。「さがる」は本来「空間」に関する意味を表すことから、「空間」から「時間」への意味の拡張が生じていることになる。

「さがる」は「現代に近づく」時の流れを表す。おおざっぱに言えば、「昔 → 今」という方向の時の流れである。この時間の意味は、2. 「人間・動物が基準点から離れる移動」からの拡張であると考えられる。というのは、「基準点から別のところへの移動」と「ある過去の時からより現在に近い時への移行」が対応し、「ある過去の時」は、時間の流れの中の基準点と解釈できるからである。

■ 個別の誤用情報：

ここでの「さがる」は、「時代が明治にさがった」というように、普通、文末の言い切りの形では使わず、「時代が下がって明治となる」「江戸時代に下がると……」というように、テ形や条件節で使う。

IV. 全体の用法解説

上下の移動には、「あがる／おりる」が使われることが多い。これは上下間での位置移動に注目し、「あがる／さがる」は上下間の段階的な移動に注目した表現といえる。例えば、「遮断機がおりる」は上から下という両極の位置の移動を示し、「遮断機が下がる」は段階的に少しずつ上から下に移行している状態を示している。

段階的な移動なので、「一段下がる」「下がりすぎる」などの言い方が用いられる。「あがったり、おりたりする」は上下両極間の上下運動で、「あがったり、さがったりする」は中間段階での部分的な上下移動といえる（『基礎日本語辞典』「あがる」の項目より）。

V. 文法情報

	さがられる (受身)	さがられる (尊敬)	さがらせる (使役)	さがろう (意思)	さがっている (継続)	さがっている (結果・完了)
1	×	×	×	×	○	○
			○ (さげる)			
2	△	×	○	○	○	○
3	×	○	○	○	△	○
4	×	○	○	○	△	△
5	×	×	×	×	○	○

			○ (さげる)			
6	×	×	×	×	○	○
			○ (さげる)			
7	×	×	×	×	○	○
			○ (さげる)			
8	×	×	○	×	○	×
10	×	×	×	×	×	×

VI. 複合語

下がっている様態を表す：垂れ下がる、つり下がる、

離れる移動：引き下がる

離れないでいる状態：食い下がる

レベルの低下を表す：盛り下がる、成り下がる、繰り下がる

さがり続ける、さがり始める

VII. 慣用句・連語・ことわざ

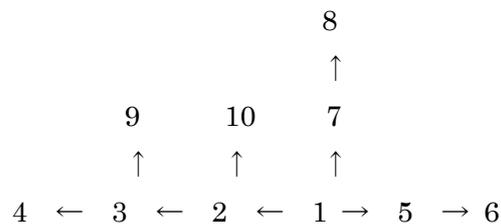
慣用句：頭が下がる（感心する・感服する）

：目尻が下がる（満足して自然と表情がゆるむ）

：溜飲が下がる（不平・不満・恨みなど、胸のつかえがなくなり、気が晴れる）

：腕が下がる（技術がおちる）

VIII. 多義ネットワーク



IX. 関連語（ワードファミリー）

1：

類義語：おりる、おちる

反義語：あがる

2,3：

類義語：後退する、はなれる

反義語：すすむ

4：

類義語：くだる

反義語：あがる

5：

類義語：かかる

反義語：あがる

6：

類義語：

反義語：あがる

7,8：

類義語：おちる

反義語：あがる

9：

類義語：おりる

10：

類義語：すすむ

反義語：さかのぼる

6.4 【さげる】

I.

アクセント：LHL

活用情報：sage-・母音語幹動詞

II. 語義一覧

1. 高い位置から低い位置へ移す
2. 一端を固定して垂直方向に設置
3. 身体の一部を支えとして垂直方向に維持
4. 後方に移動
5. 目立たないところに移動
6. 数量の減少
7. レベル・価値の低下：意志的
8. 評価の低下：非意図的
9. 効果・効率の低下

III.

1. 高い位置から低い位置へ移す

語義：人間・動物が、物あるいは身体の一部を、(ある位置から) より低い位置に移す。

表記：さげる、下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム：<人間、動物>が<物・身体の一部>を<より低い位置> {に・へ} さげる

■ 共起例：

<物・身体の一部>：(物の) 位置、水位、文字、頭、腕、目尻、視線、目線

<より低い位置>：下、下の方

<副詞的要素>

ぺこりと、恭しく、深々(と)、丁寧に(頭を下げる)

少しずつ(少しずつ羽を下げる)、徐々に(徐々に旗を下げる)、だらりと(だらりと首を下げる)、心持ち(心持ち視線を下げる)

■ 非共起例：

<物・身体の一部>：×荷物

■ 例文・作例：

1. 頭を下げる

2. 文字を下げる
3. 増水したので、ダムの水位を下げる
4. 手首を下に下げる
5. (舞台上で) 照明の位置を下げる
6. 壁の絵の位置を少し下げる。
7. 下に目線を下げる
8. 羽を下げる
9. ファスナーを下げる
10. 手を下げる
11. 首を下げる
12. 旗を下げる
13. ハードルを下げる

■ 例文・コーパス：

1. エルムが視線を下げると、海のこちらに、またも見なれたものがあった。(トールモー・ハウゲン著；木村由利子訳 『トルとぼらの城の寓話』,2002,文学)
2. 「左肩を下げる」という意識を持ったほうが、… (『月刊 TENNIS JOURNAL』,2005,10 雑誌)
3. 腕をだらりと下げて、力なく歩いている。(アレックス・シアラー著；金原瑞人訳 『青空のむこう』,2002,文学)
4. ありがとうございます、と頭を下げた。(大沢在昌著 『氷舞』,1997,文学)
5. アユで黒々した川を眺めながら目尻を下げ… (『高知新聞』,2004,4,16 新聞)

■ 個別の解説

「頭を下げる」は「お辞儀をする」や「謝る、詫びる」、「敬服する、感服する」の意味としても使われる。

(例)「ここに来ると、本当にのんびりしますよ。まいがお世話になっています」パパは頭を下げた。おばあちゃんはこねていたものをぬれ布巾でパッパッと包み、冷蔵庫に入れた。(梨木香歩著『西の魔女が死んだ』, 1996 小説)

「目尻を下げる」は「非常に満足そうな、または、好色そうな顔つきをする」の意味としても使われる。

(例)むしろ、二人の美女を前にデレッと目尻を下げている姿は、ただの好色男にしか見えなかった。(麻宮騎亜/ 大沼弘幸著『香津美斬魔剣』, 1993 文学)

■ 個別の誤用情報：

「網棚から荷物をさげる」とは言わず、「網棚から荷物をおろす」と言う。

2. 一端を固定して垂直方向に設置

語義：人間が、ある物を、一端を固定して、下の方に（垂直方向に）伸びるような様態で設置する。

表記： 下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム： <人間>が<物>を<あるところ> {から・に} さげる

■ 共起例：

<物>：旗、のれん、クレーン、提灯、風鈴

<あるところ>：天井、屋根、軒

<副詞的要素>：ぶらり（と）（ぶらりと風鈴を下げる）

■ 非共起例：

<物>：×服、カーテン、カレンダー

■ 例文・作例：

1. グローブを留めてバッグから下げる
2. 旗を下げる
3. 開店中はのれんを下げています
4. ばねに重りを下げる

■ 例文・コーパス：

1. その中心から下げられた低いシャンデリアのデザインは、…（今井和也著 『カタチの歴史』,2003,芸術・美術）
2. また各家の軒下には桜提灯やスタレが下げられ、…（高橋秀雄、近藤忠造著 『祭礼行事』,1993,社会科学）

■ 個別の解説

1「高い位置から低い位置へ移す」の場合は、「頭を下げる」などの例からもわかるように、「頭」は元の位置にはなくなり、新たな位置を占めることになる。一方、ここでは、たとえば「店の入り口にのれんを下げる」という場合、「のれん」全体の位置を変化させるというよりも、「下の方に（垂直方向に）伸びるような様態で設置する」ということである。つまり、この2つの用法は、「下の方に」という共通点はあるが、1が「物を移動させる」ことを焦点化しているのに対して、2は「(ある様態で) 設置する」ことを表している。

■ 個別の誤用情報：

状況としては似ているが、例えば以下については「掛ける」を用いる。

(誤) 服をハンガーに下げる。

(誤) 壁にカレンダーを下げる。

3. 身体の一部を支えとして垂直方向に維持

語義：人間が、ある物を、身体の一部を支えとして、下の方に（垂直方向に）伸びるような状態で維持する。

表記：さげる、下げる、提げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム： <人間>が<物>を<身体の一部> {から・に} さげる

■ 共起例：

<物>：ペンダント、タオル、バッグ、携帯電話、提灯

<身体の一部>：腰、首、肩

<副詞的要素> しっかり（と）（しっかりと腰に刀を下げる）、じゃらじゃら（と）（じゃらじゃらと鍵束を腰に下げる）

■ 非共起例：

<物>：×リュックサック、スーツケース、ウエストポーチ

■ 例文・作例：

1. 腰 {から・に} 手ぬぐいを下げる
2. ペンダントを首に下げる
3. バッグを肩に下げる
4. 鍵束を腰に下げる
5. 携帯電話を首に下げる
6. 袋を下げる
7. ベルトに斧を下げる
8. 首からタオルを下げる

■ 例文・コーパス：

1. 刀を下げる。(峰隆一郎 『富札を下げる』,2001,文学)
2. 言いながら君江は腰に弁当を下げると家をとび出していった。(良永勢伊子 『忘れられた人々』,1996,文学)
3. 首から下げていたお花のようなペンダントをドレスの中から取り出しました。(野田千世著 『黒猫のシムクロティエ』,2004,文学)

4. 携帯電話を首に下げたプジャ夫人は日に日に美しくなって愛嬌を振りまく。(林穰二著 『北欧に魅せられて』,2003,文学)
5. 提灯を下げている(連城三紀彦 『牡牛の柔らかな肉』,1996,文学)
6. 提灯を下げて馬丁がなかから出てき、うしろ手にくぐり戸を閉めた。(駒田信二著 『水滸伝』第3巻,1990,文学)

■ 個別の解説

「さげる」が主文の述語である場合、通常「太郎は腰から手拭いを下げている」というように、「～ている」の形で用い、結果の状態を表す。このことからわかるように、ここでの「さげる」は、(2のように「(物を)設置する」というよりも)「(物を、ある様態で)維持する」ことを表す。また、2「一端を固定して垂直方向に設置」では、物を固定する箇所として、いろいろなところがありうるが(したがって、構文フレームでは<あるところ>とした)、ここでは<身体の一部>に限定される。

■ 個別の誤用情報:

身に付けるバッグやアクセサリであっても、垂直方向に伸びるような形でなければ許容されにくい。

- (誤) リュックサックを提げて山登りをする。
- (誤) 青年はウエストポーチを提げている。
- (誤) スーツケースを提げて旅行に出かける。

4. 後方に移動

語義: 人間が、ある物・身体(の一部)を、後方に移動する。

表記: さげる、下げる 自他の区別: 他動詞

構文フレーム: <人間>が<物・身体の一部>を<あるところ>から<別のところ>{に・へ} さげる

■ 共起例:

- <物>: 机、イス、ベッド、(自動車の)座席
- <あるところ>: 前、前方
- <別のところ>: 後ろ、後方
- <副詞的要素>: さっと、さっさと

■ 非共起例:

<物>: ?こたつ、布団、おもちゃ

■ 例文・作例：

1. ベッドを下げる
2. 腰を後ろに下げる
3. 右足を下げる
4. 食事の準備を終え、台所に身を下げる
5. 供え物を下げる
6. 車の座席を下げる。

■ 例文・コーパス：

1. すぐにベッドを下げるつもりでいました」…(吉村達也著 『ベストセラー殺人事件』,1998,文学)
2. 那須野は操縦席を後ろに下げると狭いコックピットの中で立ち上がった。(鳴海章著 『ファイナル・ゼロ』,1995,文学)
3. 日の入りと共に供物を下げることを日課としてきた。(関沢まゆみ著 『隠居と定年』,2003,社会科学)

■ 個別の解説

「供え物を下げる」は仏教では仏壇から供え物を下げるので前から後ろへの移動、神道では神棚から供え物を下げるので上から下への移動となる。

物理的な移動から転じてやや抽象的な表現

- ・食事の場面で「片づける」という意味になる (例) 酒／食べ物／皿を下げる
- ・サッカーなどのスポーツで集団の先頭の列の位置を下げる、または戦い／戦争で集団を撤退させる (例) 攻撃ラインを下げる、部隊を下げる

1からは3は「下方(垂直方向)」への移動・設置などを表す用法であったが、ここでの用法は、「前から後ろへ」という「水平方向」の移動を表す。「高い位置から低い位置へ」という移動と、「前から後ろへ」という移動の共通点を考えると、高い位置は低い位置よりも、また、前は後よりも、目立つ位置(顕著性の高い位置)であることがあげられる。つまり、「さがる」が表す「低い位置への移動」と「後ろへの移動」は、ともに「より目立たない位置への移動」ということになる。

■ 個別の誤用情報：

そのもの自体が前後を持つ物体(例：机、イス)について使いやすく、そうでないものについては以下のように使いにくい。

(誤) こたつを下げる。

また、片付けるものであっても、食事や供え物といった給仕する物以外には用いにくい。

(誤) 毎朝、起きたらすぐに布団を下げる。

5. 目立たないところに移動

語義：人間が、ある物・人間を、より目立たないところに移動する。

表記： さげる、下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム：<人間>が<物・人間>を<より目立たないところ> {に・へ} さげる

■ 共起例：

<人間>：「人間」であれば特に制約はなし

<物・人間>：(空いた) 食器、皿、茶碗、選手、主力、主力選手

<より目立たないところ>：流し、洗い場、台所、ベンチ

■ 非共起例：

野球道具

<物・人間>：×道具、用具

■ 例文・作例：

1. 食べ終わった食器を下げる。
2. 監督は主力をベンチに下げた。

■ 個別の解説：

まず、ここでの用法も4「後方に移動」と同様に、「水平方向の移動」である。さらに、すでに、4の「個別の解説」でも触れたように、「さげる」は「高い位置から低い位置への移動」であっても「前から後ろへの移動」であっても、「より目立たない位置への移動」という面がある。そして、特にこの「より目立たない位置への移動」ということに注目したのがここでの用法である。

■ 個別の誤用情報：

食器には使えても、例えばスポーツの道具には使いにくい。また、片付ける場所には、給仕される人が存在する（ことが期待される）必要がある。

(誤) 使い終わった野球道具を下げた。

(誤) 誕生日会の後、教室から茶菓子を下げた。

6. 数量の減少

語義：数量（として捉えられるもの）を減少させる。

表記：さげる、下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム：〈人間〉が〈数量〉をさげる

■ 共起例：

〈人間〉：「人間」であれば特に制約はなし

〈数量〉：

価格：価格、値段、運賃、家賃、コスト

賃金：賃金、給料

音量：音量、ボリューム

その他：温度、室温、血圧、コレステロール、中性脂肪

〈副詞的要素〉ぐんと（ぐんと温度を下げる）、しっかり（と）（しっかり血圧を下げる）

■ 非共起例：

〈数量〉：×数、体重、身長

■ 例文・作例：

1. 商品の価格を下げて、購買意欲を引き出す。
2. 不況の中、社員の給料を下げざるをえなくなった。
3. 部屋の温度を下げる。

■ 例文・コーパス：

1. いまの日本は、国民が物を買わないから急速に需要が減り、それに合わせて企業が価格を下げるから、企業の倒産が多発して、ともに供給も自動的に減少している。(小菅哲著『CMが建築を変える』, 2004 技術・工学)
2. おばあちゃんのところに行って、音量を下げるようにいって見たら？と母がいった。あなたのいうことならきくかもしれないわ。(アミタヴ・ゴーシュ/井坂理穂著『シャドウ・ライズ』, 2004 文学)
3. コレステロールや中性脂肪を下げ、生活習慣病を予防するとして、注目されている成分である。(蒲原聖可著『サプリメント小事典』, 2003 自然科学)
4. 中枢神経のバランスを整え、血圧を下げる作用があります。また、皮脂バランスを整えます。(小幡有樹子著『おうちでエステ!』, 2003 技術・工学)

■ 個別の解説：

「数量を減少させる」ことは、1「(高い位置から)低い位置へ移す」とことと相関関係がある。

たとえば、積み上げてある積み木から、一部の積み木を取り除くと、つまり、「数量を減少させる」と、積み木全体の高さは低くなる。この種の経験を基盤として、本来、空間における高さに関する意味を持つ「さげる」が「数量を減少させる」ことも表せるわけである。

■ 個別の誤用情報：

具体的な物の数や長さ・重さなどには用いにくい。以下は、「減らす」を使うべきところである。

(誤) 読む本の数を下げた。

(誤) ボクサーは3ヶ月で体重を10キロ下げた。

7. レベル・価値の低下：意図的

語義：人間が、意図的に、ある対象のレベル・価値を低くする。

表記：さげる、下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム <人間>が<レベル・価値>をさげる

■ 共起例：

<人間>：「人間」であれば特に制約はなし

<レベル・価値>：

レベル：(問題の) レベル、水準、理想

位：位、地位、役職、階級、打順

その他：人、話

<副詞的要素>ぐっと (ぐっとレベルを下げる)

■ 非共起例：

「話をさげる」に対して、「スピーチ／物語をさげる」などとは言わない。

■ 例文・作例：

1. 問題のレベルを下げないと、誰も解けないかもしれない。
2. これぐらいの失敗で、地位をさげられてはかなわない。
3. 3試合ノーヒットでは、打順を下げられても仕方がない。
4. そろそろ理想を下げて、現実を見つめた方がいいのではないか。
5. あの人はいつも話を下げるので、話をしたくない。(話をさげる：下品にする)
6. Aさんはよくかんがえもせず、人を上げたり下げたりする(褒めたりけなしたりする)

■ 例文・コーパス：

1. ただし、成績が悪くなったときは3級に下げることができる。(法務省法務総合研究所研究部研究事務部門著『犯罪白書』, 2004 白書)

■ 個別の解説

「役職」が「課長／部長」など具体的な役職名になる場合、「田中を部長から課長へ下げた」などのように、「から」や「へ」をとる。また、6「数量の減少」の中でも、「給料をさげる」などは、給料を受け取る者にとって好ましくないことである。同様に、ここでの「地位をさげる」は、その地位にあった者にとって明らかに好ましくないことである。このような類似性に基づいて、6の意味から7の意味に拡張したと考えられる。

また、相場が安くなることを指す名詞として「下げ」が用いられる他、「下げ止まる」(相場の下落が止まる)のように複合動詞の前項動詞(自動詞)として「下げる」が用いられることがある。

■ 個別の誤用情報：

明確な高低の格付けがない場合には用いにくい。

(誤) 使用する小麦粉を強力粉から中力粉に下げた。

8. 評価の低下：非意図的

語義：人間が、意図せず、自分の調子・評価を低くする。

表記：さげる、下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム：<人間>が<自分の調子・評価>をさげる

■ 共起例：

<人間>：「人間」であれば特に制約はなし

<自分の調子・評価>：調子、評価、評判、男

■ 非共起例：

<自分の調子・評価>：×格好良さ、見た目、容姿、体調、気分、名声

■ 例文・作例：

1. 彼は思わぬ不手際で評価を下げた。
2. そんなことをすると、男を下げることになるよ。
3. あの選手は夏場に入って調子を下げている。

■ 例文・コーパス：

1. ～、そんなに問題がある人物とは知らなかった、と弁明しても通りっこない。かえって男を下げ、支持率を下げるだけだ。(俵孝太郎著『世界の中の日本最良の選択』, 2002 社会科学)

■ 個別の解説

7と8は「価値・評価を低下させる」という点では共通であるが、7は、「ある人が意図的に他者の価値などを低下させる」という意味であるのに対して、8は「ある人が意図せず自分の評価などを低下させる」という意味であり、「意図性」の点で異なる。

■ 個別の誤用情報：

容姿には用いられない。

(誤) その俳優は歳とともに格好良さを下げていった。

また、「評価」や「調子」に類似した以下のような表現も不適格となる。

(誤) その作家はスキャンダルが原因で名声を下げた。

(誤) 風邪を引いて健康を下げた。

9. 効果・効率の低下

語義： ある物事が、別の物事に関して、好ましくないことを引き起こす。

表記： さげる、下げる 自他の区別：他動詞

構文フレーム： <ある物事>が<あること>をさげる。

■ 共起例：

<ある物事>：長時間労働、(何らかの)発言、～のし過ぎ・やり過ぎ

<あること>：効果、効率、士気、やる気

■ 非共起例：

<ある物事>：×流れ作業、大量生産

<あること>：×風邪予防

■ 例文・作例：

1. 練習のし過ぎは、かえって効果をさげるという説もある。
2. そのような発言は、みんなの士気をさげかねない。

■ 例文・コーパス：

1. 労働時間中に休憩を入れずに働くことは、結果的に仕事の効率を下げることにつながりかねません。(河野順一著『給与計算をするならこの1冊』, 2004 社会科学)
2. 戦うと敵の武器を盗めるが、そのかわり周囲3マス以内の味方の能力を下げってしまうというものだった。(奥山美雪著『ユウゲーDX』, 2004 芸術・美術)

■ 個別の解説

ここでの「さげる」は、「(他者に対して) 好ましくないことを引き起こす」という点で、7「レベル・価値の低下」(および8)と同様である。ただし、7は人間が意図的に行うことであるのに対して、ここでの用法は、「物事」が引き起こすという点で違いがある。

■ 個別の誤用情報：

効果・効率の具体例は目的語に取れない。

(誤) ビタミン剤の飲み忘れが風邪予防を下げた。

IV. 全体の用法解説

「さげる」は、多くの意味で対義関係をなす「あげる」に比べ意味の範囲が狭い。例えば、「客を家に上げる」に対して「客を家から下げる」という表現は存在しない。また、「さがる」同様、類義語の「おろす」と異なり、上下方向のみならず水平方向の移動にも用いることができる(4)。また、対応する自動詞「さがる」に存在する<離れる>という意味に対応する用法は「さげる」にはない(例：見物客を{×下げた/下がらせた})。空間的な上下の移動のみならず、数量、レベル・価値、評価、効果の高低の変化にも用いられる点は、「さがる」「あげる」「あがる」といった関連語と共通している。

なお、1・4・6～9では相対的な下方移動・変化を表すため、移動・変化後の位置・状態が最下部である必要はない(例：旗を1メートル下げた、室温を2度下げた)。一方で、5では<目立たないところ>という特定の目的地が存在する点で、絶対的な移動である。

V-1. 文法情報

	さげられる (受身)	さげられる (尊敬)	さげさせる (使役)	さげよう (意思)	さげている (継続)	さげている (結果・完了)
1	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	×	○
3	○	○	○	○	△	○
4	○	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○	○
7	○	○	○	○	○	○

8	×	○	×	×	○	△
9	○	×	×	×	○	△

VI. 複合語

V+さげる：取り下げる、掘り下げる、吊り下げる、下げる、引き下げる、切り下げる、ひっ下げる、繰り下げる、払い下げる、押し下げる

さげ+V：蔑む（=下げ墨む）、下げ損なう、下げ止まる

その他：ぶら下げる

VII. 慣用句・連語・ことわざ

慣用句

・溜飲を下げる（のどに上がってきた胃液が下がることから、胸をすっきりさせる、不平、不満、恨みなどを解消して気を晴らすこと。）

・どの面下げて（何の面目があって、よくも恥ずかしくなく）

・手鍋（を）提げても（好きな男との生活ならば苦勞をいとわないこと）
（「どの面下げて」と「手鍋（を）提げても」は、この形でのみ使用する。）

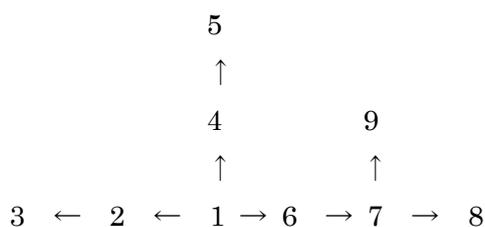
・眉尻を下げる（悲しむ、落胆・心配する）

・上げたり下げたり（褒めたりけなしたり）

・男を下げる（男性として恥ずべき行為をして自らの価値を低くする）

・目尻を下げる（大いに満足して好色そうな表情をする）

VIII. 多義ネットワーク



IX. 関連語（ワードファミリー）

類義語

1・5：下ろす

2・3：掛ける、引っ掛ける、ぶら下げる

2：垂らす、吊る、吊るす、吊り下げる

4：控える

5：片付ける、引き下げる、戻す、退ける

6～8：低める

6～9：減らす、減ずる、落とす

7：安くする

対義語

1・5～9：上げる

5：出す

6～9：増やす、増す

7～9：高める

6.5 【かう】

アクセント：[LL]（活用：1型）＜語幹：kaw＞

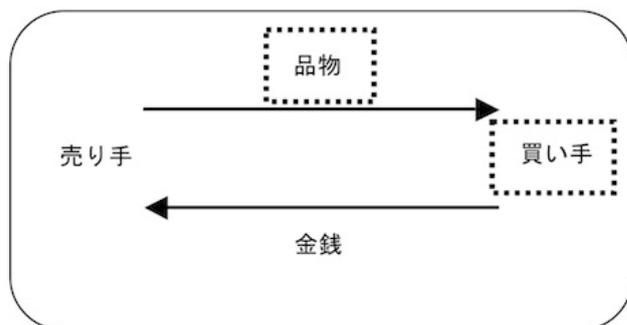
語義一覧

01. 買い手が価値を認める品物を、その品物を所有している売り手から、合意した額の金銭を与えることで新たに所有する。
02. 評価者（上位者）が、価値を認める対象を、肯定的に高く評価する。
03. （慣用句的）使役者が、他者に刺激を与えて、自分（＝使役者）に対して特定の感情を持つような結果を生じさせる。
04. （慣用句的）志願者が、自分が価値を認める作業・役割を、新たに実行しようという決意を表す。
05. （慣用句的）影響者が、重要な出来事の成立において、重要な役割を果たす。

01. 【授受＞売買】

語義：買い手が価値を認める品物（具体物）を、その品物を所有している売り手から、合意した額の金銭を与えることで新たに所有する。意志、責任あり。状態変化。結果含意をもつ（*「買ったけど買えなかった」）。

[買う]（他動詞）



構文フレーム： <買い手>が、<品物>を {<売り手>から} {付随的要素} 買う。

■ 共起例

<品物>

小売り商品の他、不動産（「土地」、「家」）や金融商品（「株」、「ユーロ」）も可。抽象的なサービスについては使われない（*「マッサージを買う」）。保険なども、「買う」でなく「入る・加入する」。比喩的拡張（品物＞効果のメトニミー）によって、それがもたらす満足や安心が<品物>の位置に入ることもある（「安らぎを買う」）

<売り手>

比喩的拡張（人>場所のメトニミー）によって、<場所>が<売り手>と融合する事がある。そのため、場所についてもカラ格が可能になる（「生協から／でPCを買う」）

■ 非共起例

<買い手>

<金銭>が<買い手>にかわって主語になることはない。「*5000 円がその本棚を買えるでしょう」。この場合、<金銭>はデをとる。

■ 例文（作例）

1. 兄が車を買った。
2. 政府は空港用地を地主から時価で買う予定だ。
3. これから夕飯のおかずを買いに行こう。
4. 親戚に挨拶に行くなら、お土産はちょっと多めに買うのがいい。
5. この値段では買う人はあまりいないと思います。
6. ドリンク買いに行くけど、何かいっしょに買うものある？

■ 例文（コーパス）

1. 美千絵は料理の本を買った。（立松和平著 『アジア偏愛日記』，1998，9 文学）
2. この銘柄は、何かのハプニングや全体相場に引きづられて下げたときは株を買う好機になります。（石井経済研究所，さいとうはるき著 『株でかんたん稼ぐ法』，2005，3 社会科学）
3. ルーマニアでは黒海沿岸地方にまで足をのぼし、黒海にのぞむルーマニア最大の港町コンスタンツァへ行って優雅に水泳をする計画でいたが、ブカレスト北駅で切符を買おうとしても、どこで売っているかわからず、ホテルのマネジャーに聞いても知らない。（佐藤健著 『東欧見聞録』，1991，3 社会科学）

■ 個別の解説

1

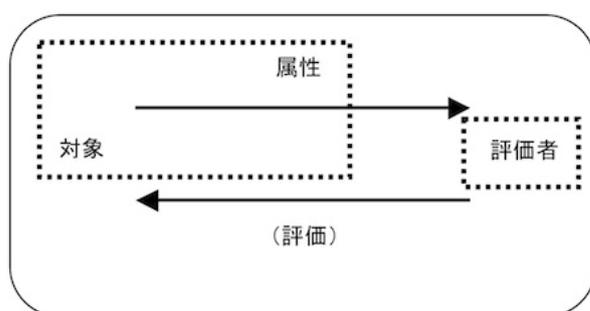
付随的要素は以下のとおり：<買い手の目的>に／として：新たに所有した<品物>を使う、その目的。（「自宅用に／として買う；プレゼントとして買う」） | <品物の受益者>（のため）に：<買い手>が手に入れた<品物>を、さらに与える人。（「子供（のため）に買う／買ってやる」） | <品物の状態>で：中古、新品、など。（「中古で買う」、「若干キズありで（も）買う」） | <場所>で：<売り手>と<品物>のある場所。現実世界の店舗だけでなく、インターネットショッピングのように、<買い手>が<品物>を（画面上で）見て選べる媒体も含む。（「アマゾンで買う」、「フリーマーケットで買う」） | <金銭の形態>で：

現金、クレジットカード、小切手、2000 紙幣、ローン、など。「小銭で買う」、「一括払いで買う」、「折半で買う」)

02. 【評価】

語義：評価者（上位者）が、価値を認める対象（人または性質）を、肯定的に評価する。意志・責任あり。心的状態を表すため、状態性をもつ。

[買う] 他動詞



構文フレーム：

- a. <評価者>が {<対象>の} 属性) >を {付随的要素} 買う
- b. <評価者>が<対象>を {付随的要素} 買う

■ 共起例

<評価者>

人間またはそれに準ずる組織。対象よりも社会的に上位にあることが多い（「??児童たちは先生を高く買っていた」）。

<対象>

人間またはそれに準ずる組織。比喩的拡張（対象>属性のメトニミー）によって、a-b パタンの交替がある。

<属性>

主に能力・才能など、成功につながる継続的・本来的な属性。ただし、やる気のように、そうとは限らない属性も含む。

■ 非共起例

<対象>

対象をヲ格で表した場合は、属性を独立して表すためには格助詞でなく（「*監督はこの選手をスピードで買っている」）、言葉を足して、「監督はこの選手をスピードという点／面で買っている」のようになる。

■ 例文（作例）

1. 監督は君を買っている。
2. 監督は君の演技力をとても買っている。
3. 彼は海外経験を買われて、採用された。
4. 君はこんなに買われているんだから、ベストを尽くさないといけない。
5. 信長が一番買っていた家臣は、実は秀吉ではなく光秀だったかもしれない。
6. 佐藤投手について、コーチが特に買っているのは彼の精神的な強さだ。

■ 例文（コーパス）

1. おれはお前を買っている。（千野隆司著 『追跡』，2005，9 文学）
2. 彼女の父親はガブを尊敬し、その業績を高く買っていた。（スーザン・フォックス作；飯田冊子訳 『結婚と償いと』，2004，9 文学）
3. 応募する者は、経験と実績を買われて採用される。（富士社会教育センター政治専科編 『地方議員・政策ハンドブック』，2004，3 社会科学）

■ 個別の解説

1

付随的要素は以下のとおり：＜対象の状態・資格＞として：評価される＜属性＞が最もよく発揮される活動の仕方を表す。（「宮本をチームのまとめ役として買っている」） | ＜場所／母集団＞（の中）で：チーム、会社の部署、候補者など。（「うちの新人の中では山田をキャプテン候補として買っている」） | ＜評価：肯定的＞副詞句：高く、非常に、とても、など肯定的な度合いを表す語句。（「高く買う／非常に買っている／とても買っている」）

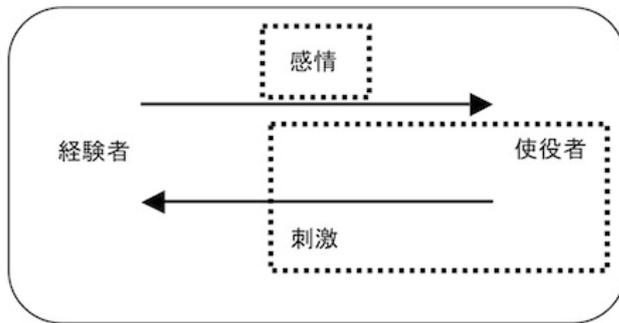
2

受動態が多い。能動形の場合は「買っている」が多い。

03. 【感情（使役）】

（慣用句的）使役者が、他者（＝心的経験の主体）に刺激を与えて、自分（＝使役者）に対し特定の感情を持つような結果を生じさせる。状態変化、結果含意をもつ。好感情の場合は、＜使役者＞が意図をもって行う。悪感情の場合は、意図しない結果もありうる。

[買う、かう]（他動詞）



構文フレーム :

- a. <使役者>が {<刺激>で/によって} {<経験者>の/から} <好感情>を買う
- b. <使役者> {の<刺激>} が {<経験者>の/から} <悪感情>を買う

■ 共起例

<使役者>

人間またはそれに準じるもの（会社、国家、体制など）

<刺激>

属性（しつこさ、理屈っぽさ）、行動（発言、失敗）、その産物（作品、騒音）

<経験者>

人間の集団（一同、まわり、世間）。個人の場合もありうる（「妻のひんしゆくを買った」）

<感情>

肯定的感情：歓心、同情。否定的感情：ひんしゆく、恨み、妬み、反感、不興、など
限られた語しか入らない。

■ 非共起例

<感情>

他者との利害関係と関わるため、経験主体にとって自発的で他者に向かわない感情、例えば「幸せ」、「喜び」、「悲しい」などは共起しにくい。

■ 例文（作例）

1. （肯定的・好感情）若手社員がゴルフの話題で上司の歓心を買おうとした。
2. （否定的・悪感情）ダメ社員が有給を突然とって一同から反感を買った。
3. （肯定的・好感情）無理して他人の関心を買おうとするのはみっともない。
4. （肯定的・好感情）その会社は若い子の歓心を買いたいような広告をいつも打っている。
5. （肯定的・好感情）女子社員の歓心を買おうとして、服装に余計な気を使う人がいる。
6. （否定的・悪感情）そんなことを言って、上の人の不興をかってしまったらどうしようもない。

7. (否定的・悪感情) 他人の妬みをかうような言動は慎んだほうがよい。
8. (否定的・悪感情) これ以上隣の国の恨みを買うことは御免蒙りたい。

■ 例文 (コーパス)

1. (肯定的・好感情) 相手の歓心を買おうとか、計画的に口にしたものでもない。
(遠藤周作編 『友を偲ぶ』, 2004, 9 文学)
2. (肯定的・好感情) ベルリンの壁が崩壊するまでは、東ドイツの為政者はクレムリンの歓心を買うために、現存していた貴重な研究施設、建物などを煉瓦の一片たりとも残さず、すべて地上から抹殺するという売国の愚挙を犯していた。
(関口由紀夫著 『奇跡のデザイン』, 2002, 7 芸術・美術)
3. (否定的・悪感情) これは周囲のヒンシュクを買いまくった。
(鷲沢萌著 『少年たちの終わらない夜』, 1993, 9 文学)
4. (否定的・悪感情) どんなに名言やうまいジョークを挟んで喋っても、タイミングが悪くては失笑を買うのがオチだからだ。
(福田健著 『なぜ人は話をちゃんと聞かないのか』, 2005, 8 言語)
5. (否定的・悪感情) ストレートに人種差別を批判する映画では、白人観客の反感を買ったり、配給上の困難にぶつかったりして、商業映画として失敗するかもしれない。
(長谷川功一著 『アメリカ SF 映画の系譜』, 2005, 7 芸術・美術)

■ 個別の解説

1

肯定的・好感情、否定的・悪感情どちらの場合も、慣用句的な性質が強く、共起できる語は限られている。公的・好感情の場合には、「買おうとする」という結合が目立つ。「歓心」のように好感情であっても、自分の利益を目的とするために、そのような感情を「買う」ことは(社会一般からは)善良なこととは見なされない。

■ 個別の誤用解説

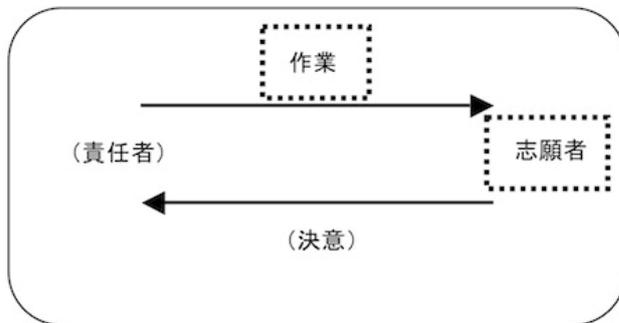
1

<感情>が受動文の主語になることはない。「*ひんしゅくが買われた」、「*歓心が買われた」

04. 【志願】

語義：(慣用句的) 志願者が、自分が価値を認める作業・役割を、新たに実行しようという決意を表す。志願者は人間。意志・責任あり。状態変化をとまなう行為。企図の意味が主なので、結果含意はもたない。

[買う] (他動詞)



■ 共起例

<語結合>

動詞複合形「買って出る」に限られる。

■ 例文 (作例)

1. 新人社員がプラン作りを買って出た。
2. 課長が意外にもお茶くみを買って出た。
3. 李さんが通訳を買って出てくれました
4. 難しい仕事ほど自分で買って出るのがエリートというものだ。
5. こんな役目を買って出る人間がいるとはどうてい思えない。
6. 君がそれを買って出たところで、誰も居力してくれずに暗礁に乗り上げるに決まっている。

■ 例文 (コーパス)

1. 小山は大審院裁判では自ら立会検事の役を買って出たくらいだ。
(松本清張著 『昭和史発掘』, 2005, 9 文学)
2. ジェンダーに関係なく、デキる女性を支える“女房役”を買って出る新しい男たちは、狭量な古い男と違って頼もしい。
(岩下久美子著 『ヴァーチャル love』, 2002, 3 社会科学)
3. 陸軍四五〇〇、海軍一八〇〇、空軍三一〇〇という、弱小の兵員で参戦に踏み切ったカナダにすれば、最大の課題は、苦境に立つ英本国と軍事強国アメリカとの仲介役を買って出ることによって、中立国のアメリカを実質的に参戦させることに尽きた(32)。
(細谷千博ほか編 『太平洋戦争』, 1993, 2 歴史)

■ 個別の用法解説

1

ふだん期待されるよりも、＜志願者＞の年齢、力量、立場などと比較して不釣り合い、または意外なく作業＞をやろうとする意思を表す。下位の者が自分の力や責任以上の＜作業＞をすることが基本だが、上位の者が「わざわざ」下位の者の＜作業＞を代わりにする場合を表すこともある。

■ 個別の誤用解説

- 1 <作業＞が受動文の主語になることはない（*その仕事が若手に買って出られた）

05. 【影響】

語義：（慣用句的）影響者が、重要な出来事の成立において、重要な役割を果たす。＜影響者＞は人間以外の事象・状況でも可能なので、意志・責任の有無は関係ない。また影響は間接的・偶然のものでも可。継続性をもった行為。

[買う]（他動詞）

構文フレーム： <影響者＞が<事象＞に一役買う

■ 共起例

<語結合>

「一役買う」限定。「一役を買う」は不可（*そのアイドルグループがチェック柄の流行に一役を買っている）。

<事象>

「<事象>に一役買う」という慣用句なので、ヲ格はとらない。「*そのアイドルグループがチェック柄の流行を一役買っている」

■ 例文（作例）

1. 可愛いキャラクターが地域の活性化に一役買っている。
2. 今年は冷夏が節電に一役買った。
3. 先生も学園祭の盛り上げに一役買おうとした。
4. 震災による観光客の減少対策に一役買おうと、台湾からたくさんの団体客が来日しました。
5. 欧州市場の動向も、今回の円高に一役買う形となった。
6. かれらの国際的な活躍は、日本のイメージアップに一役買うことになった。

■ 例文（コーパス）

1. 私の若気の至りは、ほとんどあいつが一役買っているようなものだ。（辻桐葉著 『英国紳士の野蛮なくちづけ』，2005，9 文学）

2. もっといえば, そのような社会を支える構造に女性自身が一役買っていることにすらなりません。(諸井克英ほか著 『彷徨するワーキング・ウーマン』, 2001, 3 社会科学)

■ 個別の解説

1 「一役買っている」という状態性をもった表現がよく見られる。

■ 個別の誤用解説

1 <事象>が受動文の主語になることはない。

文法情報

1

	買われる (受身)	買われる (尊敬)	買わせる (使役)	買おう (意思)	買っている (継続)	買っている (結果・完了)
1	○	○	○	○	○	○
2a	○	○	△	○	○	△
2b	○	○	△	○	○	△
3a	×	△	○	○	△	○
3b	×	△	△	△	△	○
4	×	○	△	○	△	○
5	×	○	○	○	○	○

複合語

V+買う

特になし

買- +V

(NINJAL 自立動詞) 買い忘れる、買いする、買い支える、買い出動する、買い慣れる、買い直す、買い進む、買い進める、買い集める、買いつく (NINJAL 非自立動詞) 買い続ける、買い過ぎる、買い直す、買いなさる、買い始める、買いまくる、買いとる、買いそびれる、買い出す、買い回る (その他) 買い取る、買い支える、買いかぶる、買って来る、買ってしまふ、買っちゃう

慣用表現

※難しくはないがよく出る言い方（これはコメントとして入力）

見て買う、新しく買う、買いやすい、あるだけ買う、買って（も）損はしない、
買おう（か）と思っている、買おうか迷っている、

買い物

意味：何かを買いに出かける行為（「買い物に行く」）。あるいは、＜品物＞を表すこともある。
英語では good buy というが「*いい買い」は不可。「いい買い物」は可。

お買い得

意味：通常の場合にその＜金銭＞で買えるよりも価値の高い＜品物＞であるときに言う。

＜品物＞は買った

意味：＜品物＞が特に買う価値のあるものであるときに言う。

（大金／大枚を）叩いて／はたいて買う

意味：＜金銭＞の値が大きいときに言う。

安物買いの銭失い

意味：安くて品質の悪い＜品物＞を買って（しばしば一回でなく、＜買い手＞の習慣をいう）、
結果として使い物にならず、＜金銭＞をむだにすること。

買いが入る

意味：株式、為替、先物などの投機市場において、ある金融商品を買うという目立った動きが
あったときに言う。

買い手市場

意味：＜品物＞の供給が需要よりも多く、＜買い手＞がより安い＜価格＞でよりよい＜品物＞
を買える、有利な状態にある市場。通常の＜品物＞だけでなく、金融商品についてよく使われ
るほか、労働市場（学生の就職など）についても言われる。

先物買い

意味：先物取引の投機市場において、ある品物を買うこと。拡張として、先物市場でなく
ても、将来において有望と思われる商品を買うこと、また比喩的に、将来において人気が出る
と思われる対象（作家、歌手、あるいは新しい小売り商品など）を高く評価すること。

青田買い

意味：元来は米作において、田で育てている稲穂が成熟する前の「青い（＝緑色の若い状態）」
状態で、価格をつけて買うこと。「先物買い」の一種。また比喩的に、労働市場において卒業
よりも相当早い時期に学生の採用を決めること。

女／男（及びその下位カテゴリー）を買う

意味：＜金銭＞によって、性欲を満たすためのサービスを人（女／男）に提供させること。下
位カテゴリーには「若い娘」、「芸者」、「男娼」などが入る。

飲む打つ買う（の三拍子）

意味：酒を飲む、博打を打つ（＝ギャンブルをする）、女を買うという、不道德で反社会的な

行為の代表例となることを三つすべて行うこと。

若いときの苦勞は買ってでもしろ

意味：＜金銭＞のやりとりはないが、苦勞は価値のあるとなので、積極的に望んで経験したほうが、後で役に立つということ。

金で買う

意味：「金で」は本来なら冗長。商取引でないが、影響力をもった人間（不特定多数を含む）に金銭を与えることで、役職、名誉、権力、など欲するものを手に入れる。善良な行為とは見なされない。

喧嘩を買う

意味：語義 3 の拡張例。他人から挑発されて、喧嘩を行う＜志願者＞となること。「争いを買う」などは言わないので、慣用句的な性質が強い。

売り言葉に買い言葉

意味：他人から挑発的な言葉を言われて、喧嘩となるような言葉を発すること。

多義ネットワーク

1. コア > 2. 一般化（＜評価＞への拡張。継続的な心的活動なので状態の意味になる）；フレーム要素の変化（＜売り手＞と＜品物＞が融合、授受の意味はない）
 - > 3. メタファー（＜感情＞への拡張）
 - > 4. メタファー（＜志願＞への拡張）
 - > 5. 不明

関連語

類義語

買い物する、ショッピングする；「買う」と大きな意味の違いは無いが、自動詞として＜買い手＞が＜品物＞や＜売り手＞を表さずに使う。場所は表すことが可能。例：「駅のお店で買い物をする」

類義語

購入する；「買う」と大きな意味の違いはない。構文フレームも同じだが、やや形式張った言い方。あらかじめ計画を立てて、何を買うか考える場合が多い。例：「航空券はネットで買う／購入するつもりです」、「毎日お昼ご飯の時にヨーグルトを買う／?購入する」。

類義語

あがない、購う；「買う」と大きな意味の違いはない。構文フレームも同じだが、「購入する」よりもさらに形式張った言い方。売買ではなく、罪などを「償う」の意味で使うときは「贖う」という字をあてる。例：「鎌倉の老舗で香木を購った」。

類義語

買い込む；＜品物＞の量が特に多いとき、しばしば後で楽しむために買うときによく用いられる。例：「マンガを何冊も買い込む」

類義語

買い出し（に行く／出る）；計画的に、多くの＜品物＞を買うためにお店などに行くこと。例：「週末のパーティーに備えて食べ物の買い出しに行こう」。

類義語

衝動買い（する）；特に計画もなく、その時に気分、雰囲気にしたがって買うこと。例：「サウンダーボードのDVDボックスを衝動買いした」

類義語

買いだめする；本来ならば短期間で大量に消費しない＜品物＞を、近い将来に手に入らなくなることを恐れて、一度に大量に買う。例：「地震のときに、トイレットペーパーを買いだめする人たちがいた」

類義語（上位語：授受一般）

もとめる、求める；結果含意をもたないため、「中古のワゴン車を求めています」のような使い方が可能。結果まで含む、「??この自動車は80万円で求めました」は非常に不自然。

類義語（下位語：特殊な商取引）

買いつける、買い付ける；特に＜買い手＞が個人でなく、会社や機関の代表として、＜品物＞を大量に買う、またはそのための契約をするときに使う。例：「オーストラリアまでレアメタルを買い付けに行く」。

類義語（下位語：特殊な商取引）

仕入れる；＜買い手＞の商業活動の一部として、＜品物＞を使って何かを作り、それを売ることを目的として買う。例：「魚を築地から仕入れる」。

類義語（下位語：特殊な商取引）

買収する；会社や施設など、大きい額の＜金銭＞によって、必ずしも＜売り手＞の望まない形で買う。意味拡張として、組織の中で影響力のある個人に＜金銭＞を与えることで（比喩的な）＜買い手＞の有利になるように影響力を使わせることも表す。例：「審判を買収する」

類義語（下位語：特殊な商取引）

輸入する；海外から買う。貿易。

6.6 【うる】

アクセント：[LL]（活用：1型）＜語幹：ur-＞

（コメント：自動詞形「うる」あり）

語義一覧

01. a. ある品物を所有している売り手が、その価値を認める買い手から、合意した額の金銭を得ることで、買い手に品物を与えて新たな所有者とする。 / b. ある品物を所有している売り手が、その価値を認める買い手から、合意可能な額の金銭を得ることを期待して、買い手の目につく場所に品物を置く。
02. ある品物（抽象物も可）を所有している売り手が、その価値を認める買い手から、合意した利益1を得ることで品物を放棄して、買い手がその品物から派生的に得られる利益2を利用できるようにする。
03. 使役者が、人や品物（使役者自身の場合もある）の社会的な知名度や評価を向上させるよう試みる。
04. （慣用句的）使役者が、他者に刺激を与えて、自分（＝使役者）に対して特定の感情を持つような結果を生じさせる。

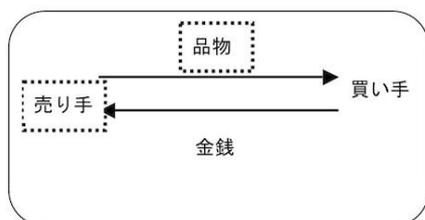
01. 【授受＞売買】

語義 a. ある品物（具体物）を所有している売り手が、その価値を認める買い手から、合意した額の金銭を得ることで、買い手に品物を与えて新たな所有者とする。意志・責任あり。状態変化。結果含意をもつ（「*売ったけど売れなかった」）。

語義 b. 【授受＞売買】ある品物を所有している売り手が、その価値を認める買い手から、合意可能な額の金銭を得ることを期待して、買い手の目につく場所に品物を置く。企図する行為なので、結果含意はもたない（「そんな物は売っても売れないよ」）。

bの場合、口語では自動詞用法あり。個別の用法解説参照

[売る]（他動詞）



構文フレーム：

＜売り手＞が＜品物＞を {＜買い手＞に} {＜金銭＞で} {付随的要素} 売る

■ 共起例

<品物>

土地、株、など具体物でないものも含む。商品、ものなど、不特定のものである場合も見られる。比喩的拡張（品物>効果のメトニミー）によって、それがもたらす<満足・安心>が<品物>の位置に現れることもある。

<売り手>

比喩的拡張によって、<（売り手のいる）場所>として表されることがある。「ブックオフで売っている」

<買い手>

比喩的拡張によって、<（買い手のいる）場所>と融合することがある。「ブックオフに／で売った」

■ 非共起例

<売り手>

<（売り手のいる）場所>はガ格をとりにくい。「コンビニが医薬品を売る」のような文では、背後に何らかの主体が含意されているように感じられる。

■ 例文（作例）

1. a. 着なくなった衣類をリサイクルショップに売った。
2. a. 中古のアナログオーディオは今は売り手市場だ。
3. a. 今ユーロを売るのは損ですよ。
4. a. 一戸建ての家を売ってマンションを買った。
5. a. 車を売ったので電車通勤を始めた。
6. a. あの老人が持ち株を売った相手を知っていますか？
7. b. この本は生協で売っています。
8. b. 新譜のCDでも10%オフで売りに出ている。
9. b. アラビア語配列の外付けキーボードは日本で売っていますか？
10. b. この本を売っているお店を知っていますか？
11. b. まさかそんな物を日本で売っているとは思わなかった。
12. b. 彼女は描けたイラストを雑誌に売ったりしながら、漫画家の修行を続けていた。

■ 例文（コーパス）

1. a. 管理人に尋ねると、オーナーが部屋を売ろうとしているという。
(芦崎治著 『逃げない人を、人は助ける』, 2004, 6 産業)
2. a. 目的は、結局、都市ディベロッパーが、商品を守るための戦略にすぎないわけですよ。

(荒巻義雄著 『樹々より木漏陽の国』, 1991, 9 文学)

3. a. 珍しい熱帯魚を育てることひとつとっても、育てる楽しみと同時に、それを売って利益が出るかもしれない、などという目的がないと気がすまないのです。

(福原義春著 『生きることは学ぶこと』, 2005, 1 哲学)

4. b. 大型量販店で1050円程度で売っています。

(Yahoo!知恵袋, 2005, インターネット、PC と家電)

5. b. 丸のまま一尾がお手頃な値段で売られていたら、ぜひ食卓に。

(NHK 科学番組部編; 並木和子監修 『NHK ためしてガッテン血液サラサラ健康レシピ』, 2001, 4 自然科学)

6. b. エルグランドVIP仕様の中古車を売っているところを知道吗せんか？

(Yahoo!知恵袋, 2005, スポーツ、アウトドア、車)

■ 個別の解説

1

付随的要素は以下のとおり：〈買い手の目的〉(用)に／として：新たに所有した〈品物〉を買い手が使う、その目的。「高級品を贈答用に売る」 | 〈場所〉で：〈買い手〉のいる場所。また、〈買い手〉が売買に参加出来るインターネット上の媒体も含む：「フリーマーケット／ヤフオクで売ってみよう」 | 〈金銭の形態〉で：現金、後払い、銀行引き落とし、など。

2

現代の日本では、個人商店が減って、個人が小さな品物を現金で売ることが少ないため、用例に現れる〈品物〉は土地、株、自動車など額の大きいものとなることが多い。この場合、〈売り手〉は個人だけでなく、企業などの組織もよく見られる。一方、個人が小さな品物を売るときは中古品を安価で売ることが多い。

3

b 用法では、「～ている」や受動態など、状態性をもった表現が多い。また、この意味では「売りに出す／出る」、「売り出し」などの語結合がよく見られる。〈買い手〉は不特定となるため表現されないことが多い。

4

口語では次の自動詞用法がある。

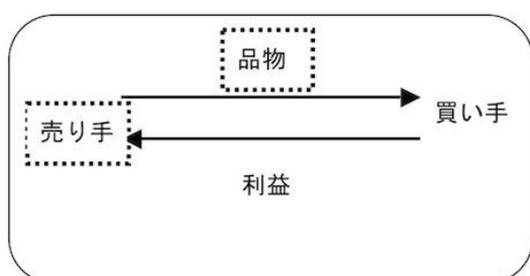
構文フレーム：〈品物〉が {〈金銭〉で} {付随的要素} 売っている | 例文 (コーパス)
| 専用のケーブルが売っています。 | (Yahoo!知恵袋, 2005, インターネット、PC と家電)
| どの商品がどの時点で売り終わったかまでしっかり見て、仮説が正しかったかどうか

かを確認する。 | (勝見明著 『鈴木敏文の「統計心理学」』, 2002, 6 産業)

02. 【授受>売買】

語義：ある品物（情報や他者に対する影響力・権利といった抽象物も可）を所有している売り手が、その価値を認める買い手から、合意した利益1を得ることで品物を放棄して、買い手がその品物から派生的に得られる利益2を利用できるようにする。非合法的活動（例えばスパイ活動）というニュアンスをもち、道義的に善良ではない行為を表す。意志・責任あり。状態変化、結果含意あり。

[売る] (他動詞)



構文フレーム：

<売り手>が<品物>を {<買い手>に} {<利益1>で/と引き換えに} 売る

■ 共起例

<語結合>

複合動詞形「売り渡す」を用いると、この意味が強化される。

<品物>

国、機密（情報）；また、本来売ってはならないものを売ることが主なので、同時に誇り、魂、心も放棄する。「日本人の魂までも売り渡す」

■ 例文（作例）

1. ユダは主を銀貨 30 枚で売った。
2. 一部の人間がわが国の情報を敵国に売った。
3. 少年はマフィアに心を売ってしまった。
4. 彼は、仲間を売って自分だけ助かろうというような奴ではない。
5. 祖国を売ろうとする者たちは団子排除すべきだ。
6. 彼女は悪魔に心を売ったというより、自分が悪魔と化してしまったようだ。

■ 例文（コーパス）

1. 陸軍の機密をドイツへ売ったスパイがいるのだ。(福島行一著 『大仏次郎』, 1995, 9 文学)
2. 国民に独立の気力いよいよ少なければ、国を売るの禍もまたしたがってますます大なるべし。(福沢諭吉著 『学問のすすめ』, 2002, 3 社会科学)
3. 権力やお金に魂を売ってない学者が多い大学はどこですか? (Yahoo!知恵袋, 2005, ニュース、政治、国際情勢)
4. 個々の研究者は予算面でその独立性がいくぶんかでも拘束されており、とくに企業からの委託研究の場合はそれが顕著で、しばしば企業に魂を売って御用学者に成り下がるようなケースも生まれる。(西澤潤一, 上野勲黄著 『「悪魔のサイクル」へ挑む』, 2005, 5 技術・工学)

■ 個別の解説

1

具体的な所有でなく、<売り手>が自由にできるという関係もある。裏切り行為なので、悪い側面が強調される。<売り手>が得る<利益1>については述べられないことが多いようだ。

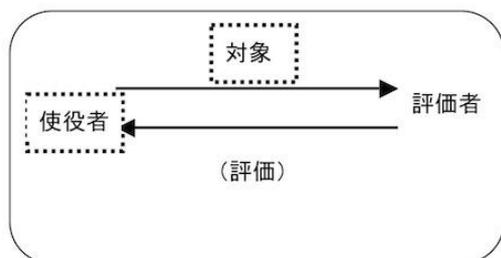
2

<品物>が<売り手>自身の魂や誇りなどの場合もある。この場合、魂などは抽象的なく品物>と同時に手放される。例えば、学者が客観的事実を重んじるという研究者としての態度を棄て、事実を歪めた報告をすることは、同時に「魂」を手放すことである。この場合、<買い手>（例えば企業）は学者の「魂」が欲しいわけではなく、彼（女）が研究者としての態度を放棄することで派生的に得られる利益（例えば本来危険な設備についての安全性の保証）が欲しいわけである。

03. 【評価（使役）】

語義：使役者（利害関係者）が、人や品物（使役者自身の場合もある）の社会的な知名度や評価を向上させるよう試みる（その結果として金銭的利益も期待する）。意志・責任をもった活動・行為であるが、企図を意味するので、状態変化の意味や結果含意はもたない。

[売る]（他動詞）



構文フレーム :

- a. <使役者>が<対象>を {<評価者>に} 売る
- b. <使役者>が<対象:譲渡不可能な身体部位・属性>を {<評価者>に} 売る (<使役者>=<対象>、すなわち自分自身を「売る」)。

■ 共起例

<語結合>

「売り出す」、「売り込む」の形でしばしば用いられる。

<使役者>

- b フレームで<対象>と同一の場合、<譲渡不可能な身体部位・属性>は「名(前)」、「顔」、「男」などがある。「男を売る」の場合は、俠客の世界で賭博の才能やトラブル收拾の能力などによって知名度を高める場合にしばしば使われる。

例文(作例)

1. 市長候補が街頭で名前を通行人に売り込んだ。
2. 売り出し中の新人俳優を初めてテレビで見た。
3. 今のうちに多方面に顔を売っておいたほうがいいよ。
4. 様々な慈善事業に関わることで名前を売ろうとする政治家がよくいる。
5. 健康なイメージを売り出すことで、若い女性の購買層も増えるのではないか。
6. 彼女は美貌を武器にあちこちに顔を売って歩いて、営業成果のアップに努めている。

例文(コーパス)

1. それで一しよに本郷座へ佐藤歳三を尋ねて、賣り込みたいやうなことを微微見せたが物になる筈はなかつた。
(『正宗白鳥全集』, 1986, 9 文学)
2. 以来、かつて2年間で720本もの映画を観たのと同じ情熱で、ブルーノートをいかに売りだすか、日夜、研究に没頭する。
(中山康樹著 『スイングジャーナル青春録』, 1999, 7 芸術・美術)
3. むしろ、自分を売ってもらっては困るのです。
(田部井昌子著 『資産ゼロから大成功する「魔法の粉」の使い方』, 2003, 1 哲学)
4. 一九三二年といえば、世界大恐慌の真只中、一躍SF界に名を売ったキャンベルといえども<アメージング・ストーリーズ>だけではとても食って行けるわけがなく、一九三二年には、ガンズバックの<ワンダー・ストーリーズ>にも作品を売っている。
(野田昌宏著 『「科学小説」神髓』, 1995, 9 文学)

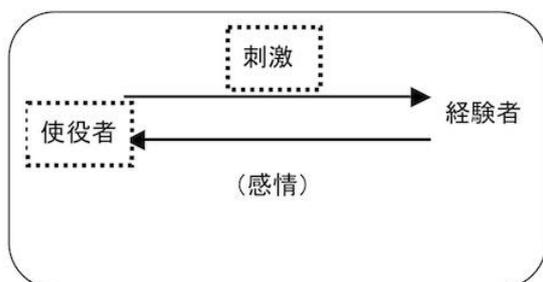
個別の誤用解説

1 <対象>が受動文の主語になることはないようである。

04. 【感情（使役）】

語義：（慣用句的）使役者が、他者（＝心的経験の主体）に刺激を与えて、自分（＝使役者）に対して特定の感情を持つような結果を生じさせる。意志・責任をもった活動・行為であり、結果含意については中立的。

[売る]（他動詞）



構文フレーム： <使役者>が {<行為>で/によって/て [<行為>が動詞の場合]} {<経験者>に} <刺激>を売る

■ 共起例

<使役者>

人間に限られる。

<刺激>

恩、媚にほぼ限られる。恩の場合は、経験者が使役者に対して恩を感じる（「相手に恩を売る」＝「相手が恩という感情をもつ」）。媚の場合は、経験者が媚に反応して新たな感情をもつ（「相手に媚を売る」≠「相手が媚という感情をもつ」；この場合、「相手が媚に反応して好感をもつ」ことになる）

■ 例文（作例）

1. 課長が食事代を払って部下に恩を売った。
2. ダメ社員がお世辞を言って上司に媚を売った。
3. 将来のために情けを売っておく。
4. 日頃から部下に恩を売っておいて、いつか困った時に助けてもらおう。
5. アメリカに媚を売るようなやり方は嫌いだ。
6. いくら媚を売っても、あの人は実力主義だから無駄です。

■ 例文（コーパス）

1. ここでフジに恩を売っておけばという思惑もある。
（Yahoo!知恵袋, 2005, ビジネス、経済とお金）
2. となれば、今の内に離党して自民党に恩を売り、時期を見て自民党に入党しようというのが彼らの狙いではないでしょうか。
（Yahoo!ブログ, 2008, 政治）
3. このほうが、妙に客に媚を売るパーティーよりは、よほど疲れなくていい。
（藤田宜永著 『モダン東京物語』, 1988, 9 文学）
4. 不思議とジョンには、自分が進んで媚を売らなくとも、周囲の方から、彼を愛される人物にすべく動く人間が登場する。
（きたやまおさむ著 『ビートルズ』, 1987, 7 芸術・美術）

■ 個別の誤用解説

1

<刺激>が受動文の主語になることはない。

文法情報

1

	売られる (受身)	売られる (尊敬)	売らせる (使役)	売ろう (意思)	売っている (継続)	売っている (結果・完了)
1a	○	○	○	○	○	○
1b	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	×	○
3	×	△	○	○	○	○
4	×	△	△	○	○	○

複合語

V+売る

叩き売る；(名詞形) 叩き売り、投げ売り、切り売り、量り売り、空売り

売+V

(NINJAL 自立動詞) 売り買う、売り返す、売り進む (NINJAL 非自立動詞) 売りまくる、売り始める、売り尽くす、売り切る、売り続ける、売りなさる、売り出す、売り終わる、売りかける、売りつける (その他) 売り切れる、売り込む、売り払う、売り渡す、売り込む、売り飛ばす、売り上げる

慣用表現

売れゆき

意味：売れる度合い（スピードまたは販売量）。

売るほどある

意味：売るための＜品物＞ではないが、数多く所有している。例えば高級ブランドのバッグを一人で何十も持っているときに、ユーモアの感覚または揶揄する意図をもって言う。

飛ぶように売れる

意味：速いスピードで大量に売れる。

安売り（する）

意味：本来の価格よりも安く売る。

身売り

意味：会社などの法人が、その経営権および設備を他者に金銭によって譲渡する。

体／身体／身を売る

意味：＜金銭＞と引き換えに、自分自身を性的欲求を満たすためのサービス的手段として提供する。売春行為。「体を売る」は本人の意思のあるなし両方可能であり、一時的な場合もあるが、「身を売る」は本人の意思に反して、娼館（近代以前の遊郭）などで長期契約を結ぶことを主に指す。

売りが入る

意味：株式、為替、先物などの投機市場において、ある金融商品を売るという目立った動きがあったときに言う。

売り手市場

意味：＜品物＞の供給が需要よりも少なく、＜売り手＞がより高い＜価格＞で＜品物＞を売る、有利な状態にある市場。通常の＜品物＞だけでなく、金融商品についてよく使われるほか、労働市場（学生の就職など）についても言われる。

夢を売る

意味：具体的・実質的な＜品物＞を売るのではなく、娯楽を提供して＜金銭＞を得ることを遠回しに言う。例えば、芸能人は「夢を売る」職業であるなどと言われることがある。

喧嘩を売る

意味：他人を挑発して、喧嘩を行うようにしむける。「争いを売る」などは言わないので、慣用句的な性質が強い。

売り言葉に買い言葉

意味：他人から挑発的な言葉を言われて、喧嘩となるような言葉を発すること。

売り出し中

意味：語義 1 の場合は何かの＜品物＞が売られている状態を言う（「～中」と結合することで、目的語が主語になれることにも注意：「生協が中古 CD を売り出し中だ」～「中古 CD が売り出し中だ」）。語義 2 の場合は、主語になる＜人＞が社会的な知名度・評価を高

くしようと試みている様子を言う。

油を売る

意味：おしゃべりなどをして時間を（少なくとも第三者から見ると）無駄に過ごす。

多義ネットワーク

1. a. コア > 2. 一般化（合法的・具体的なく品物>以外に
対する<利益>の提供）
1. b. コア' > 3. メトニミー（<品物>を売る試みからその
ための予備的手段への拡張）
> 4. メタファー（<感情>への拡張）

関連語

類義語

販売する；商品売る。企業や商店などが売り手となる、正式の商取引についていう。個人どうしの一度きりのやりとりの場合は使わない。例：「アップルは新しい iPhone を7月から販売する」

類義語

鬻ぐ（ひさぐ）；「売る」の古めかしい言い方。商う。例：「春を鬻ぐ」（=売春する）

類義語

発売する／リリースする；商品を（新たに）売り出す。例：「CDを発売／リリースする」

類義語（上位語：授受一般）

手放す；所有していた物を他人に売る。「手放す」という言葉自体は、金銭の授受を含まない。特に売り手が必ずしも望まない売買で使われる。例：「長く乗った車を手放す」

類義語（上位語：授受一般）

分ける；「売る」の遠回しな言い方。「分ける」という言葉そのものは、金銭の授受を必ずしも含まない。正式の商取引よりも、売り手の好意で比較的少量が売られるときが多い。例：「木材を少し分けていただけませんか」

類義語（上位語：授受一般）

譲る；ある物を欲しい人に売る。「譲る」という言葉そのものは、金銭の授受を必ずしも含まない。一種の婉曲表現。例：「家具をお譲りします」

類義語（下位語：特殊な商取引）

直販する；生産者が、卸売りなどの流通経路を経ずに、直接消費者に商品を販売する。例：「ビリンゴを産地から直販する」

類義語（下位語：特殊な商取引）

転売する；買った物を別の相手に売り渡す。例：「コンサートのチケットを転売する」

類義語（下位語：特殊な商取引）

競売する；複数の買い手に値段を付けさせ、最も高い値を付けた者に売る。通常は「きょうばい」と読むが、裁判所が法的手続きにしたがって行う場合は「けいばい」と読む。例：「土地を競売する」

類義語（下位語：特殊な商取引）

売却する；売り払う。公的な性質をもつ売り手、または大きな品物であることが多い。例：「ホテルを売却する」

類義語（下位語：特殊な商取引）

払い下げる；大きな組織、特に公的機関が、持っていたもの（土地、建物、機材など）を特に民間に売りに出す。例：「東京都は宿舎の跡地を A 社に払い下げた」

類義語（下位語：特殊な商取引）

輸出する；自国の製品を外国に売る。例：「日本は自動車を多く輸出している」

類義語（下位語：特殊な商取引）

分譲する；土地などを部分に分けて売る。例：「マンションを分譲する」（注：日本語では「マンション」とは所有権を売り買いできる集合住宅の一室を指す）

類義語（下位語：特殊な商取引）

市販する；店で売る。特別の資格や手続き（例えば医師の処方箋など）がなくても買うことができる。例：「この薬は市販されている」

類義語（下位語：特殊な商取引）

卸す（おろす）；問屋が商品を小売業者に売る。例：「その商社は地方スーパーに食品を卸している」

6.7 【かす】

アクセント：[LH]（活用：1型）＜語幹：kas＞

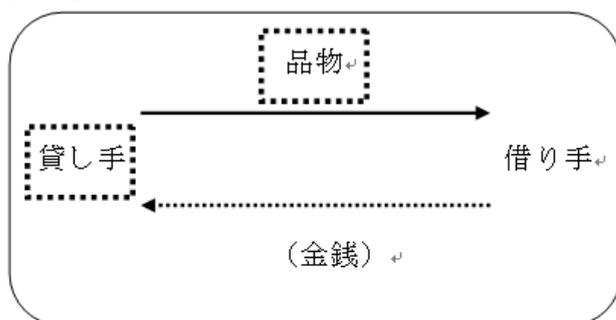
語義一覧

01. a. 借り手にとって必要なもの（金品、場所など）を、後で貸し手に返すという約束のもとで、一時的に与える。
 - b. 物品が部分的に消費される場合にもいう。
02. 借り手にとって必要な無形の資源（体の一部、労力、時間、能力、知識など）を、貸し手が与えることによって助ける。
03. （慣用句的）「耳を貸す」主体となる者が別の者の発言に意図的に注意を向ける。
04. （慣用句的）「顔を貸す」主体となる者が別の者に会う、またはそのいる場所に現れる。

01. 【授受＞貸借】

- a. 借り手にとって必要なもの（金銭、物品、場所など）を、後で貸し手に返すという約束のもとで、一時的に与える。
- b. 物品が部分的に消費される場合（消しゴム、ライター、化粧品・医薬品など）にもいう。所有権に変化はない。a, bともに商行為となる場合（使用料や利子が発生する）もそうでない場合もある。意志、責任あり。状態変化。結果含意をもつ（*貸したけど貸せなかった）。

【貸す】（他動詞）



構文フレーム：

＜貸し手＞が／で、＜品物＞を {＜借り手＞に（対して）} {付随的要素} 貸す。

■ 共起例

＜貸し手＞

人間が基本。商行為となる場合は業者（「不動産屋」）、機関、組織（「銀行、公庫」）

＜借り手＞

人間が基本。商行為となる場合は機関、組織（「会社、ベンチャー、企業」）、抽象物（「ダム

の建設計画」)

<品物>

具体物およびその利用(「トイレ、電話」)、金や証券(「起業資金、株式、権利、名義」)、場所(「部屋、宿、店舗、軒」)

■ 例文(作例)

1. 兄が弟にネクタイを貸した。
2. ちょっとだけ消しゴムを貸してくれる?
3. ここの地主は休耕地を坪単位で貸している。
4. 貴重な蔵書をお貸しくださり、有り難うございました。
5. 試験が近いので、ノートを貸してくれる人を見つけないと。
6. このまえ貸してあげたの、面白かった?

■ 例文(コーパス)

1. 妻子に見切られ、食うにも困るような生活を続ける笹倉に、原田は時折、金を貸してやった。(唯川恵著『ため息の時間』, 2001, 9 文学)
2. 「安楽君も死んでしまったし、保険会社が手形で金を貸しておくのは、原則として認められない。このままだと、やっかいなことになる。」(星新一著『人民は弱し官吏は強し』)
3. 二人はプールの端についている水道の栓で足を洗い、それから濡れたまま家のところまで来て、そこで女中さんから、雑巾とスリッパを貸してもらった。(曾野綾子著『太郎物語』)
4. 民間銀行で金を貸すことは、いくらでもできる。(大下英治著『小泉純一郎 vs. 抵抗勢力』, 2002, 9 文学)
5. 「開拓使で貸してくれる道具や食糧だけでは足りないのです。資力さえあれば早く拓け、早く収穫をあげられることははっきりしているのです」(渡辺淳一著『花埋み』)

■ 個別の解説

1

付随的要素は以下のとおり:<様態・条件>デ:貸すという行為の細部の条件。金銭の形態(「現金で、手形で、円で、ドル(建て)で」)、貸す条件(「月8万で、3%の金利で、低金利で、無利子で、信用で」、「長期で、無期限で、週単位で、月極で」、「～という／の条件で」) | <場所>で:何かを貸すための営業オフィス(「駅前のビルで駐車場を貸している」) | <範囲>カラ/マデ:量的な上限(「～本まで、～冊まで」)、期限(「今日から、来週まで」) | <用途>トシテ(「ビルの1階を店舗として貸す」) | <態度的副詞>:喜んで、気前よく、積極的に、しぶしぶ、こっそり、そっと | <量副詞>:たっぷり、そっくり、いくらか、ちょっと、(お)安く | <頻度副詞>:いつも、たびたび、時折

2

「民間銀行で金を貸す」のように、〈貸し手〉がデ格をとる場合がある。このデ格は単なる場所格ではないため、構文フレームに加えた。このように〈貸し手〉をデ格で表すときは、述語が大きな名詞句の一部だったり（「銀行でお金を貸すことは…」）、テイルをとって（「銀行でお金を貸している」）状態性をもっていることが多い。

3

ものを貸して、それを使い終わった後には、〈借り手〉が〈貸し手〉に〈品物〉を「返す」。また、〈貸し手〉が〈借り手〉から〈品物〉を「返してもらう」。正式な契約にもとづいている場合は「取り立てる」（特にお金など）。

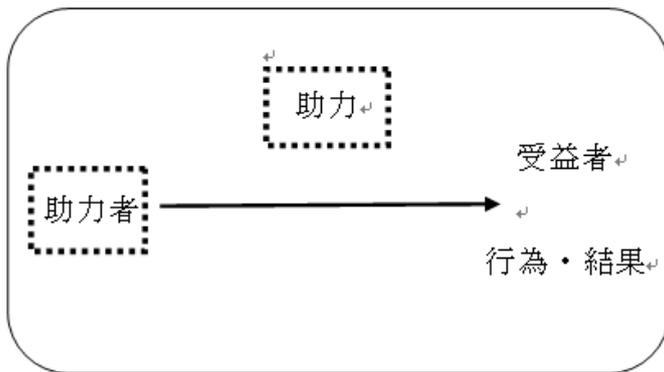
4

（文化的情報）業者による商行為ではなく、知人の間で高価でない物品をインフォーマルに貸すときは、文化によって貸し手と借り手という関係をどこまで意識するかが異なる。日本の文化では、例えばクラスで隣にいる学生の消しゴムを一時的に使う場合でも「貸し借り」の関係が意識されるので、使うときにはていねいに依頼し（「悪いけど、ちょっと貸してくれる？」）、貸し手の好意に感謝を表す。しかし文化によっては、簡単に利用可能なものは誰でも自由を使うのが当然であるという見方をすることがあるので、借り手は「いっしょに使おう！」と言って、所有者が返事する前に使ってしまうことが不自然ではない。つまり「貸し借り」として意識されない。日本の文化では、小さいものでも貸し借りは相手の領域に踏み込む行為なので、借り手は可否の確認が必要となる。例えば仲の良いルームメイトであっても、その人が持っているアクセサリなどを断りなく勝手に使ってしまうと、日本の文化では非常に乱暴で礼儀を知らない行為と見なされる。これは西洋的な「個人の所有物」という概念が強くはたらいっているというよりは、公的なものでなくても人との接触には手順を踏む必要がある、という日本における通念の反映と思われる。

02. 【助力】

語義：借り手にとって必要だが当人には利用できない無形の資源（体の一部、労力、時間、能力、知識など）を、貸し手が与えることによって助ける。意志・責任は原則としてあるが、意図しない場合もある。状態変化、継続的行為のどちらも可能。結果含意をもつが、与えるものが無形なので、特に貸し手の意図がない場合には、借り手が助力を受けたと認識しない場合がある（「気づかれないように力を貸した」）。

[かす、貸す] 他動詞



構文フレーム：

- a. <助力者>が<受益者>に<手、力、知恵など>をかす
- b. <助力者>が {<受益者>} <行為・結果>に<手、力など>をかす

■ 共起例

<助力者>

人間、組織（財団、裁判所）、原因・手段（「～すること」）。

<助力>

手（比喩的に「力」と同じ意味の場合もある）、肩、力、知恵

<受益者>

人間（助けを必要とする者）、組織（会社、政権）

<行為・結果>

動作・事象などを表す名詞（計画、作戦、企て、脱出、逃亡、操作、措置、発展）。助力の結果として生じる出来事をしばしば表す（作例2）。「～が／の～するのに力をかす」のように行為を表す節が名詞化されていることがある（作例3；「(幼児が) 立ち上がるのに～」、「(病人が) 服を脱ぐのに～」）。個人間の助力の関係でなく、ある原因が結果を誘発する場合には、<行為・結果>は好ましくないものが多い（コーパス5）。

■ 非共起例

<助力>

身体部位では、動作の物理的な助けにならない部分（口や目）は「貸す」対象にならない。

<行為・結果>

ある原因によって誘発される結果の場合、特に「手」などでは、好ましくない結果を表す方が自然になる（「例：スタッフの真摯な教育活動が東京大学の国際化に手を貸す」）。

■ 例文（作例）

1. ちょっと手をかしてください。

2. メディアが政権の延命に力をかしてきた。
3. 若者がお婆さんが横断歩道を渡るのに手をかした。
4. 知らないうちに、不正な経理に手をかしてしまった。
5. 困ったときに力をかしてくれた人のことは決して忘れない。
6. あなたがあの団体に知恵をかしたという事実は重要だ。

■ 例文 (コーパス)

1. 鶴見雅彦は桜田興業の資金調達に手を貸していました。
(高野裕美子著 『サイレント・ナイト』, 2002, 9 文学)
2. そして、必要とあらば、兄が苦境を脱するのに手を貸す。
(メグ・レイシー作;片山真紀訳 『プリンセスに夢中』, 2003, 9 文学)
3. 同時にリチャードは、はじめての選挙に出馬するにあたって力を貸してくれる相談役を探していた。
(シェリル・ウッズ作;田中淳子訳 『大富豪の孤独』, 2005, 9 文学)
4. 「——どうだろう、役所の岡安さんなら、いい知恵をかしてくれるんじゃないかと思うが」
(山本周五郎著 『さぶ』)
5. 軍用地を提供することは人殺しに手を貸すことなんですよね。(『沖縄の基地問題』, 1997, 3 社会科学)

■ 個別の解説

1

付随的要素は以下のとおり：<目的> (動詞連体形) ために：簡単にはできないこと (「ライバル社に対抗するために取引先に手をかす」) | <目的>に向けて：大きな事業など。語義 01 の場合よりもよく見られる (「再生可能エネルギーの早期実用化に向けて力をかす」) | <時/際> (に) (「PC の操作で困ったときに友達が手をかしてくれた」、「海外進出の際に知恵をかしてくれたコンサルタント」) | <態度的副詞>：喜んで、進んで、すぐに、不正を承知で

2

<助力>が望ましい結果をもたらす場合は、<受益者>が「恩」を受ける。これは金銭的なものや契約によるものではないが、<受益者>が<助力者>に「恩を返す」ことが期待される。実際には具体的な行為によって「恩を返す」ことはできなくても、そうする意志を持つことが望ましいという倫理観が日本文化にはある。例：「あなたは私たちが困ったときに力をかしてくれたので、今こそ恩返しをしたい」

3

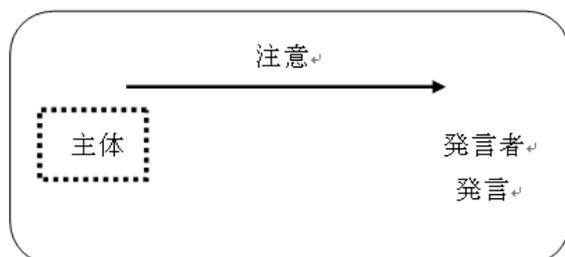
慣用句的な性質が強い。ヲ格をとる<助力>を意味する語はBCCWJでは「手を貸す」が194件

で最も多い。「知恵を貸す」が44件で次に多く、「力を貸す」が24件。特に「手／力を貸す」の場合、＜貸し手＞は個人でなく、組織の場合が多く、二格をとるのも個人より行為や出来事が多い。ただし、「知恵を貸す」の用例の殆どは「YAHOO!知恵袋」の例であり、「どうかお知恵をお貸してください!」という決まり文句が見られる。ネットにおけるひとつの「お願いフレーム」として成立しているようである。

03. 【注意】

語義：(慣用句的)「耳を貸す」：主体となる者が別の者の発言に意図的に注意を向ける。行為の始動及び継続。

[貸す、かす] (他動詞)



構文フレーム： <主体>が<発言者>/<発言>に耳を貸す

■ 共起例

<主体>

人間またはそれに準じるもの(団体、機関、窓口など)。

<発言者>

人間またそれに準じるもの(同上)。省略されることが多い。

<発言>

発言、意見、世論など

■ 例文(作例)

1. 政府は国民の世論に耳を貸そうとしない。
2. 大事な話があるので、ちょっと耳を貸してくれないか。
3. 先生は生徒のちょっとした疑問にも耳を貸す人でした。

■ 例文(コーパス)

1. しかし、夫は頑として、耳を貸さなかった。
(笹沢左保著 『水木警部補の敗北』, 2000, 9 文学)

2. 庇護をうけているのだというひけめを彼はそんな形で補償したがっているのかも知れなかった。いつもぼくは彼の悪口を聞きながして、まともには耳をかさないことにしていた。(開高健『裸の王様』)

個別の解説

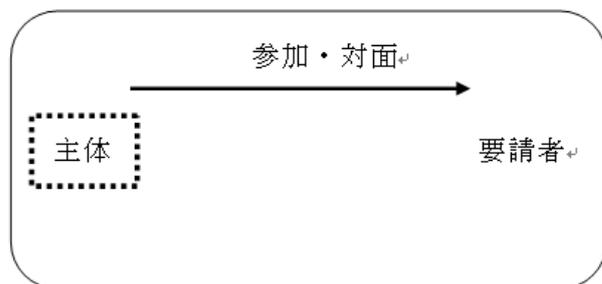
1

<主体>が<発言者>よりも立場が上位である場合が多い。注意をあえて向けない状況があるため、「耳を貸さない」のように否定的に表す用例が多い。「貸す耳をもたない」のような表現もある。

04. 【参加】

語義：(慣用句的)「顔を貸す」：主体となる者が別の者に会う、またはそのいる場所に現れる。特に何かの相談や作業に参加する。主体の意志に反して行うことが多い。行為の始動。

[貸す、かす] (他動詞)



構文フレーム： <主体>が<要請者>に／まで顔を貸す

■ 共起例

<要請者>

人だけでなく、その人のいる場所(「事務所」)も可能。威嚇や脅迫をともなう例がみられる。人+二格はあまり使われない。

■ 例文(作例)

1. 社長のところまで顔を貸せ。
2. 私はやくざ者に事務所まで顔を貸すよう凄まれた。
3. 悪い仲間のいるところにちょっと顔を貸したら、なかなか帰してもらえなかった。

■ 例文 (コーパス)

1. いきなり顔を貸せとは穏やかではないな。
(福原廉太郎著 『悪魔が舞い降りる夜』, 2005, 9 文学)
2. 「ちょっと顔を貸してくれ」富樫が有無を言わせぬ口調で言った。
(法月綸太郎著 『ふたたび赤い悪夢』, 1995, 9 文学)

■ 個別の用法解説

1

頼まれて、人に会ったり人前に出たりする。命令形で使われる例 (作例 1-2、コーパス 1-2) が多い。非合法的な作業への参加・協力を要請する場合や、脅迫の前置きに使われることもある。

2

「名義貸し」(関連語参照) の意味で使われることもある。

文法情報

1

	貸される (受身)	貸される (尊敬)	貸させる (使役)	貸そう (意志)	貸している (継続)	貸している (結果、完了)
01	△	○	○	○	○	○
02	△	○	○	○	○	○
03	△	○	○	○	○	△
04	×	×	×	△	△	△

2

語義 01 で受身になる場合、すなわち金品が主語になる場合は、「貸し出されている」、「貸貸に出ている」、「貸し付けられる」のような表現がされる。

複合語

V+貸す

特になし

貸- +V

貸し込む、貸し始める、貸し続ける、貸しおく、貸しまくる、貸し得る、貸し与える、貸し出す、貸しつける、貸しはがす、貸し渋る、貸し倒れ、貸し切る、貸し越す

N+貸し

高利貸し (*高利貸す; 高利で貸す)、信用貸し (*信用貸す; 信用貸しをする)、又貸し (*又貸す; 又貸しをする)

慣用表現

貸しがある

意味：語義 01 で、貸した金品がもとに戻っていない状態。または語義 01 では貸し手、02 では助力者が、借り手や受益者から十分な見返り・謝礼を受け取っていない状態。拡張されて、損失を取り戻していない状態にもいう。例：「あいつには1万円の貸しがある」。「貸しを作る」、「貸しができる」ともいう。

貸し借り無し

意味：金銭的な利害関係、恩と義務、感情的な利害などが最終的に解消されたイーブンな状態。「借り貸しなし」も頻度は低いが可能。

庇（ひさし）を貸して母屋（おもや）を取られる

意味：語義 01 から。家の庇の下という限られた部分を他人に利用させて（例えばそこで何かの営業をすることを許す）、その結果、意図しないにもかかわらず、貸した人が住む家全体が庇を貸した他人に奪われてしまう。部分的な助力をした結果、不当にも大規模な損失にあってしまうことをいう。

胸を貸す

意味：もともとは相撲のぶつかり稽古で、上位の力士が下位に力士に対して正面からぶつからせて、それを避けずに自分の胸でしっかり受け止める形になることをいう。すなわち、スポーツや競争を含んだ対戦において、上位の者が余裕をもって下位のものに対応する。

多義ネットワーク

- | |
|---|
| 1. コア > 2. 一般化（有形の<金品>から、無形の<助力>へ）
> 3. メトニミー（「耳」が<注意>を表す）；特殊化（注意を向けて、意見などを聞くことは<助力>の一つのタイプ）
> 4. メトニミー（「顔」が人全体を表す）；特殊化（人と会って、相談などをすることは<助力>の一つのタイプ。ただし、対面は<主体>の意志に反しているのが普通） |
|---|

関連語

類義語

貸与する：公的な機関（財団、学校、役所など）がものを貸す。例：「奨学金を無利子で貸与する」、「受付窓口の職員に制服を貸与する」

類義語

賃貸<ちんたい>する／賃貸<ちんが>しする／レンタルする／リースする：一定の期間に対して決まった金銭をとってものを貸す。営業のやり方を指すので、状態表現（テイル形）をとりやすい。例：「1Fフロアを店舗として賃貸している」

類義語（上位語：授受一般）

融通する／用立てる：（簡単には用意できない）お金を何らかの手段によって提供する。単に与える場合（返さなくてよい）も含む。お金で買って物を与える場合も含む。例：「子供の進学費用を祖父母に融通してもらおう」

類義語（上位語：貸借一般）

貸し借りする／貸借する：貸すことと借りることを一まとめにした表現。

類義語（下位語：特殊な貸借）

立て替える：何かを買ったときに、Aがお金を払ったが、そのお金は本来Bが払うべきお金だった。後でBがAにそのお金を渡す（＝精算する）ことが決まっている場合、Aはこの売買でお金を「立て替えた」という。「立て替え払い」ともいう。例：「友達がカードを忘れたので、代金を立て替えた」、「修理費用を立て替え払いで払ったら、後で精算が面倒だった」

類義語（下位語：特殊な貸借）

転貸くてんたい>する、又貸しする：<貸し手>が<品物>を他の持ち主から借りている場合。「又貸し」はくだけた言い方で、契約がなく、元々の持ち主の許可を得ない場合について言われることが多い。例：「人から借りた本を誰かに又貸しするのはいけない」

類義語（下位語：特殊な貸借）

前貸しする：会社などが従業員に、本来支払われる日より早く給料を支払う。この場合、給料を「返す」必要はない。例：「今月は何人かの社員に前貸しした」

類義語（下位語：特殊な貸借）

間貸しする：部屋を貸す。「間」とは部屋を意味する。例：「その家では老夫婦が2階を間貸ししている」cf. 「間取り」（1軒の住宅の中で部屋がどのように配置されているかについての情報）

類義語（下位語：特殊な貸借）

名義貸し：お金や品物でなく、資格や営業の権利を貸す。例えば事務所を開くためにある資格をもった者がいることが義務づけられるけれども、そういう人がいない場合、資格の持ち主を探して、事務所に所属しているように見せて（実際には勤務しないが）営業を始める。例：「あの人は不動産屋に宅建主任の名義貸しをしている」

類義語（下位語：特殊な貸借）

融資する：金融機関でお金を貸す。例：「家のリフォームのためのローンを安く融資する銀行が増えている」

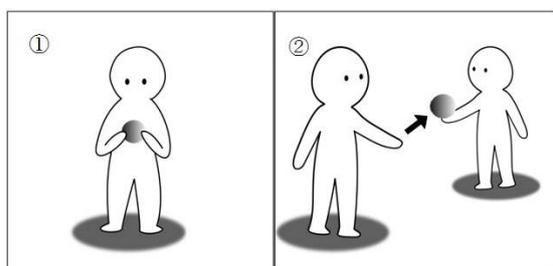
6.8 【あげる】(授受)

アクセント：[LHH] (活用：2型) <語幹：age>

語義一覧

- 01 好意で相手に相手が好むものを与える
- 02 好意で対象に益になるものを与える
- 03 好意で相手に恩恵を与える

01. 好意で相手に相手が好むものを与える



【あげる】(他動詞)

構文フレーム：

<ヒト>が<目的>に／として<相手>に<モノ>をあげる。

■ 共起例

<目的>

- ① 祝い：プレゼント、お祝い、記念
- ② 返礼：お礼、お返し、ご褒美、お詫び (のしるし)

<相手>

- ① ヒト：人、子 (ども)、彼、～さん、あなた、相手、親
- ② 動物：猫、犬、ペット

<モノ>

- ① 飲食物：餌、水、ミルク、母乳、おっぱい、ご飯、食べ物、フード
- ② 贈り物：プレゼント、お祝い
- ③ 金銭：お金、小遣い

<副詞的要素>

クリスマスに、誕生日に、お正月に、帰りに

■ 非共起例

<相手> (誤) 私、(誤) 先生

- 参照：全体の用法解説（１）、（２）

- 例文（作例）

1. おじいさんは孫にお小遣いをあげました。
2. 入学のお祝いにプレゼントをあげよう。
3. 手伝ってくれたお礼にチョコレートをあげました。
4. 妹に 9 歳のお誕生日プレゼントとしてぬいぐるみをあげました。
5. 山田さん、彼女に高級バッグをあげたんだって。
6. ねえ、ちょっと悪いんだけど、花に水をあげてくれる。
7. この本、彼にあげてください。
8. よかったらこれ、あげる。

- 例文（コーパス）

1. ビーズのお返しに、私は REIKO に絹のキモノガウンをあげた。
(森瑤子著 『人生の贈り物』, 1996, 9 文学)
2. パンダのお返しに新幹線をあげると言う意見が有ります。
(Yahoo!知恵袋, 2005, ニュース、政治、国際情勢)
3. クジラはすべり出して、海にぷっかりと、うかびました。「さて、のせてくれたお礼に、何をあげよう。」クロスカップが聞くと、クジラは、ちょっと考えていいました。
「パイプとタバコをください」
(Yahoo!ブログ, 2008, Yahoo!サービス)
4. クリスマスにおとうさんにあげるんだから、と、オーラはいったのです。
(マリー・ハムズン/石井桃子著 『牛追いの冬』, 1990, 分類なし)

02. 好意で対象に益になるものを与える

[あげる] (他動詞)

構文フレーム：<ヒト>が<対象>に<モノ>をあげる。

- 共起例

<対象>

植物：花、植木

<モノ>

水、肥料

- 参照：全体の用法解説（３）

- 例文（作例）

1. 植木に水をあげるのを忘れないでね。

2. この花はたっぷり肥料をあげないと育ちません。

■ 例文（コーパス）

1. 仕事が思うように進まなくてイライラしている時に、花に水をあげたり水を替えたりすると、ちょっと気持ちが楽になるのです。

（上大岡トメ著『キッパリ！』, 2004, 3 社会科学）

2. サボテンは、水をあげない方が、根は出やすいのでしょうか？

（Yahoo!知恵袋, 2005, 教養と学問、サイエンス）

3. 土が乾いたらタップリ鉢底から出るくらいに水をあげます。受け皿には溜めません。

（Yahoo!知恵袋, 2005, 教養と学問、サイエンス）

4. 「見てよ、あの肌。乾燥し切った砂漠よ、砂漠。一年水をあげたって草も生えやしない」

（毎日新聞, 2001, 全国紙）

5. ほうれん草は、普通以上に肥料を沢山あげるとよく育つ。

（Yahoo!知恵袋, 2005, 教養と学問、サイエンス）

6. 置き場所さえ気をつければ、たとえ肥料をあげなくても結構育つもの。もともと丈夫なものですから。

（飯田充代著『花時間』, 2002, 総合）

7. 食器を洗う前にかけておくと汚れ落ちもよくなりますし植木にあげても。

（Yahoo!知恵袋, 2005, 健康、美容とファッション）

03. 好意で相手に恩恵を与える

[あげる]（他動詞）

構文フレーム：<ヒト>が<相手>に<抽象>をあげる。

■ 共起例

<相手>

人：友達、子ども、～さん

<抽象>

猶予、時間、機会、チャンス

■ 非共起例

<相手>

（誤）私、（誤）先生

参照：全体の用法解説（1）、（2）

<抽象>

(誤) 感謝、(誤) 満足、(誤) 権利

■ 例文 (作例)

1. どの子にも平等にチャンスをあげよう。
2. 彼に3日間の猶予をあげることにしました。

■ 例文 (コーパス)

1. あなたにもう一ヶ月だけ時間をあげましょう。

(七瀬ざくろ著『かえで荘の朝』, 2001, 9 文学)

2. ただ、あなたが許せるなら彼にチャンスをあげてもいいかも。

(Yahoo!知恵袋, 2005, 健康、美容とファッション)

3. 今日はルシンダに心の準備をさせる時間を上げたいんだ...フォーチュン家の人たちと対面する前にね。

(村上あずさ『冷たい億万長者』, 2004, 9 文学)

4. 周太郎の前に仁王立ちになって、美依子はそういい放った。「一か月猶予をあげるっ。その間にどっちが好きか選んでよね！」

(山本文緒著『おひさまのブランケット』, 1990, 9 文学)

■ 個別の誤用解説

1

時間や機会に関わる語しか使えない。(誤) 私たちはみんなに心から感謝をあげたいです。(誤) 先生は一生懸命教えて、学生に満足をあげました。

■ 全体の用法解説

1

(1) 「あげる」は、自分側から相手側にもものが受け渡されることを表す。そのため、〈相手〉にの部分に「私」や「私側の人」は使えない。

(誤) 友達が私に時計をあげた。

(誤) 友達が私の妹に時計をあげた。相手側から自分側にもものが受け渡されることを表す場合は、「くれる」を使う。

(正) 友達が私に時計をくれた。 (正) 友達が私の妹に時計をくれた。

2

(2) 「あげる」は、目上の相手にもものを受け渡す場合に使うのが基本であったが、現在では対等か目下の相手にしか使わない。

(誤) 先生にプレゼントをあげた。目上の相手の場合は、「差し上げる」を使う。

(正) 先生にプレゼントを差し上げた。

3

(3) 対等な相手や目下の相手、あるいは動植物にもものを与える場合には「やる」を使うのが基本であったが、現在では「あげる」が使われるようになり、「やる」を使うとぞんざいだと感じる人が多くなっている。

(正) 赤ちゃんにおっぱいをあげた。 (正) ペットに餌をあげた。

しかし、与える相手が動植物で、特に愛玩しているものでない場合は、「やる」を使ってもぞんざいにならない。

(正) 畑の野菜に水をやらないと枯れてしまう。(正) 公園内の鳩に餌をやらないでください。

4

(4) 「あげる」はものの移動とともに所有権も移動する。

(正) 誕生日プレゼントに彼に時計をあげた。

「渡す」は、ものが移動するだけで、所有権については問題にしない。

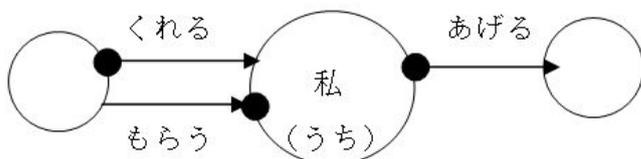
(正) 彼に時計を渡して、山田さんに届けてもらった

文法情報

1:

(誤) あげられる (受身) (誤) あげられる (尊敬) (?) あげさせる (使役)

2:



(1) ●は主語「くれる」と「もらう」はモノの移動の起点、着点は同じだが、起点を主語にすると「くれる」、着点を主語にすると「もらう」。「あげる」に対応する着点を主語にする動詞はない。

(2) 「うち」は私の家族や会社の同僚など。ただし、これは相対的なもの。例えば、「友達が私の妹にプレゼントをくれた。」では、妹は「うち」。「私の妹が私にプレゼントをくれた。」では、妹は「うち」ではない。

関連語

類義語 やる、さしあげる、渡す、与える、くれる、もらう

6.9 【もらう】

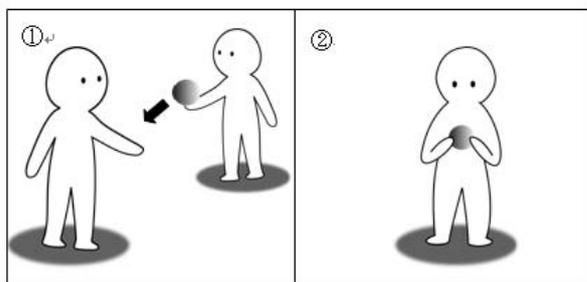
アクセント：[LHH]（活用：1型）＜語幹：moraw-＞

語義一覧

- 01 相手からものを受け取って自分のものにする。
- 02 相手から時間、許可、機会、評価などを受ける。
- 03 人を自分の家族やチームの一員として受け入れる。
- 04 人を自分の家族やチームの一員として受け入れる。
- 05 相手の許可なしに抽象的なものを自分のものにする。
- 06 メッセージなどを受け取る。
- 07 だれかを介して病気にかかる。
- 08 買う。注文する。
- 09 勝利を宣言する。宣言して自分のものにする。

01. 相手からものを受け取って自分のものにする。

[もらう]（他動詞）



構文フレーム：

<人>が<もの>をもらう。 <目的>に／として、 <相手>に／から

■ 共起例

<人>

私、友達、子ども、～さん

<もの>

金銭：（お）金、給料、年金、（失業・雇用）保険、報酬、小遣い

ギフト：プレゼント、勲章

サイン、仕事、名前

<目的>

祝い：記念、プレゼント、お祝い

返礼：ご褒美、お礼、お返し、お詫び（のしるし）

<相手>

人：～さん、友達

組織：国、政府、大学、会社

■ 非共起例

<相手>

私、先生

■ 例文（作例）

1. 太郎はおじいさんにお小遣いをもらいました。
2. 結婚のお祝いに友達から絵をもらいました。
3. 成人式のお祝いに近所のおばさんからお金をもらいました。
4. 文部科学省から奨学金をもらって勉強しています。
5. 妹はハンドボールで優勝して、立派なトロフィーをもらいました。
6. 訪問の記念として時計をもらいました。

■ 例文（コーパス）

1. 成人祝いに会社のオバちゃん達たちからお祝いを一人 1,000 円づつ貰いました。
(Yahoo!知恵 袋, 2005, マナー、冠婚葬祭)
2. 私の勉強机の上には進水式を見に行った姉からお土産にもらった新田丸の模型
(石本隆一ほか編纂 『日本文芸鑑賞事典』, 1988)
3. めんどくさくなって保護者らしき人にクリーニング代として2万もらって帰りました。
(Yahoo!知恵 袋, 2005, ニュース、政治、国際情勢)
4. 少女は、家の近くに犬が繋がれていて、餌に肉をもらっていたと語ったが、それはおかしな話に聞こえた。
(ジェフェリー・アイバーソン著;片山陽子訳『死後の生』,1993)
5. そこで賭けに勝った男は和尚に金をもらってきてくれるように頼んだんだ
(川上健一著 『虹の彼方に』, 2004)
6. マルウは耕一から金をもらい、その薬を飲んだという。
(浜なつ子著 『マニラ行きのジジババたち』, 2002)
7. 厚生年金は国の年金制度ですから、当然、国に保険料を納めて国から年金をもらいます。
(高木隆司著 『年金受給生年月日別完全ガイド』, 2001)
8. 重臣の丹羽長秀と柴田勝家の名を、勝手に一字ずつもらい、木下藤吉郎秀吉から、羽

柴秀吉にあらためた。

(徳永真一郎著『島津義弘』, 1992)

02. 相手から時間、許可、機会、評価などを受ける。

[もらう] (他動詞)

構文フレーム：<人>が<抽象>をもらう。 <相手>に／から

■ 共起例

<人>

私、友達、子、～さん

<抽象>

時間：時間、休み、休暇、猶予

許可：許可、お墨付、オーケー、チャンス、機会、了解

評価：評価、賞、一等賞、満点

<相手>

人：友達、～さん

組織：国、政府、大学、会社

■ 非共起例

<相手>

私、先生

■ 例文 (作例)

1. 社長にお願いして三日間の休暇をもらった。
2. 会社から許可をもらって大阪まで出張した。
3. 事務室でコピー機を使う許可をもらいました。
4. 2度も失敗したら、これ以上チャンスを得るとは思えない。
5. 完成まであと1週間の猶予をもらえないでしょうか。

■ 例文 (コーパス)

1. 直属の上司がいればその人に事前了解を貰い、退職届をやめる2週間前に提出すれば、法的ほうてきにはなんら問題もありません。
(Yahoo!知恵袋, 2005, 職業とキャリア)
2. 先生に許可をもらったから、オレのレッスンを見学してみろよ。
(岡村喬生著『ヒゲのオタマジャクシ世界を泳ぐ』, 1986)
3. そういえば、学士院の先生にちゃんとお墨付をもらって、それで商品価値になると書

いてありますね。

(鹿島茂, 山田登世子編 『バルザックを読む』, 2002)

4. 先生に百点をももらった子

(岸本裕史, 藤原義隆監修;学力の基礎をきたえ落ちこぼれをなくす研究会編著 『だれでもできる学力づくり』, 2001)

5. 責任を果たして社会に戻ったら、専門家せんもんかにアドバイスをもらい、前向まえむきに生きて行ってほしい。

(Yahoo!ブログ, 2008, 政治)

6. マルチング栽培さいばいなので水みずやりは不要ふようで生徒せいとはおもに草取りくさとりをし、観察かんさつ記録きろくを書かいて日直にちちよくの先生せんせいに判はんをもらって帰かえる。

(日本農業教育学会編 『学校園の栽培便利帳』, 1996)

03. 人を自分の家族やチームの一員として受け入れる。

[もらう] (他動詞)

構文フレーム : <人 1>が<人 2>をもらう。 <相手>から、<受け手>に

■ 共起例

<人 1>

私、息子、娘、～さん、チーム

<人 2>

嫁、奥さん、妻、養子、婿、選手

<相手>

～家、夫婦、親戚、となり村、チーム

<受け手>

息子、娘、子

■ 例文 (作例)

1. 裕福な家から次男に嫁をももらった。
2. 子のない夫婦が親戚から養子をももらった。
3. 両親は、いい嫁をもらって満足している。
4. 息子は 40 歳になるのに、いまだに嫁をもらえない。
5. アメリカのチームからピッチャーを我がチームにもらうことにした。
6. 我々のチームに、あの優勝チームから得点王の選手をもらいたいものだ。

■ 例文（コーパス）

1. 息子に嫁をもらい、娘を嫁にやるのは、世間の常道ではありませんか。
(津本陽著 『新积水滸伝』, 2001)
2. 結婚している夫婦が養子をもらう場合、夫婦は二人とも、養子と戸籍上の養子縁組をする必要がある。
(森保著 『遺言は愛のメッセージ』, 2001)
3. この前野という家いえは小苗代という部落で最大の土地所有者で自作農だったが、昔ら一家そろって地味な働き者ばかりだった。そこへ隣となりの葛巻町の藤岡という家から婿養子をもたらったのだった。
(中野清見著 『回想・わが江刈村の農地解放』, 1989)
4. エジプトでは、4人まで奥さんをもらうことができる。ただし、ふたり目の妻をもらう場合ばあいは、夫はかならず妻の了解を得なければならない。
(高瀬真尚著 『よい国』, 1996)
5. 「占師がいうには、相斌は日本で生きているというんだ。日本人の妻をもらって、幸せに暮らしているそうだ」
(林えいだい著 『妻たちの強制連行』, 1994)
6. ジャイアンツからトレードで若手選手をもらうことになり、敏腕スカウトを連れて、ファーム試合に物色に行いった。
(伊東一雄/馬立勝著 『野球は言葉のスポーツ』, 2002)

04. 人を自分の家族やチームの一員として受け入れる。

[もらう] (他動詞)

構文フレーム：<人 1>が<目的>に<人 2>をもらう。 <相手>から

■ 共起例

<人 1>

私、息子、娘、～さん、チーム

<目的>

嫁、婿、養子、補強

<人 2>

～さん、次男、子ども

<相手>

～家、夫婦、親戚、となり村、チーム

■ 例文（作例）

1. 山田家から長女を嫁にもらった。

2. 貧しい家の三男を婿養子にもらった。
3. 戦争孤児を養子にもらった。

■ 例文（コーパス）

1. お父つつあんが、それじゃア倅の嫁にもraitたいというに違いございません。
(小島貞二編著 『禁演落語』, 2002)
2. 「私もまた、もうあなたの娘を息子の嫁にもらうのはお断わりします！」
(佐藤正彰著 『美食』, 1998)
3. 道節は、二十五歳の時、東常縁の息女、珠名を嫁に貰った。
(鎌田 敏夫著 『新・里見八犬伝』, 1982)
4. この頃、桐生では、両親のほか妹のヤスが前橋の織物の職人・岡田善次郎を婿にもらい、四人家族の生活であった。
(早瀬利之著 『タイガー・モリと呼ばれた男』, 1991)
5. 「友之助さんをおきくさんの婿に貰って家を継がせるために、父上は一日も早く小普請組でなく、役付の武士になることを願っていました。
(梅本育子著 『代表作時代小説』, 1995)

05. 相手の許可なしに抽象的なものを自分のものにする。

[もらう] (他動詞)

構文フレーム：<人>が<抽象>をもらう。 <相手>に／から

■ 共起例

<人>

私、彼、彼女

<抽象>

元気、パワー、エネルギー、勇気、アイデア

<相手>

人：～さん、彼、彼女

もの：本、先行研究、論文、作品

■ 例文（作例）

1. 江戸時代の画家にアイデアをもらった。
2. がんばっているおじいさんから元気をもらった。
3. 先行研究からアイデアをもらう

■ 例文 (コーパス)

1. 吉方位の旅行先で自然からパワーをもらって、一気に開運したい今月。
(小林祥晃著 『誕生月でわかる Dr.コパの風水大開運』, 2005)
2. 実は私が、彼女たちから元気をもらっているのだ。
(武蔵国際総合学園編 『不登校と向き合う』, 2001)
3. どんなときでも必死でボールを追うカズにいつも勇気をもらった。
(神戸新聞, 2005)
4. 先輩のエア・ドゥからは勇気をもらい、多くを学びました。
(北海道新聞, 2001)
5. 夜明けまえ、わたしはすぐには眼を覚まさず、かすかな希望の残像に勇気をもらい、ゆっくりゆっくり現実に戻った。
(ケリー・ジェームズ/田口俊樹著 『哀しいアフリカ』, 2004)
6. 幸い母は教師として多くの生徒達からたくさんのエネルギーをもらい、楽しい日々を送ってくれています。
(江藤亜矢子 『現役ナースが明かす更年期ホントの話』, 2001)
7. それからは山に行くと、山に慰さめられ、励まされ、山のエネルギーをもらって、なんとか下界でも元気でやってゆけるようになった。
(室田とをり 『ヤマネコ山にのぼる』, 2005)
8. 永久機関とは、完全に外部からエネルギーをもらわないで動き続ける機関を言いません。
(Yahoo!知恵袋, 2005, 教養と学問、サイエンス)
9. 「そうも言えませんが」と、晴美は苦笑して、「あなたも、先生からアイデアをもらったことがあるんでしょ？」
(赤川次郎著 『作者消失』, 2004)

06. メッセージなどを受け取る。

[もらう] (他動詞)

構文フレーム : <人>が<言葉>をもらう。 <相手>に/から

■ 共起例

<人>

私、友達、子ども、～さん

<言葉>

手紙、電話、返事、連絡、回答、(はげまし/ねぎらい/なぐさめ) の言葉、
アドバイス、コメント、感謝状

<相手>

人：先生、友達、彼、彼女、～さん

組織：警察署、消防署、政府

■ 例文（作例）

1. おばさんに励ましの言葉をもらいました。
2. 人助けをして、消防署から感謝状をもらった。
3. 友達から近況を知らせる手紙をもらった。

■ 例文（コーパス）

1. 今度こんどは、川越さんに、授業中、手紙をもらったの。
（榎野道流著 『忘恋奇談』, 2000）
2. しかし、反応はまったくと言っていいほどなく、経営コンサルタントにアドバイスをもらったりもしたが、これも特に効果はなかった。
（佐藤彰紘, 佐藤友映著 『あなたはなぜ生まれてきたのか』, 2003）
3. そうして満員の聴衆から拍手を受け、「あなた、よかったわよ」などというお褒めの言葉をもらい、いくばくかのギャラをいただければ、気分はすっかり演奏家である。
（渡部玄一著 『音楽のある知的生活』, 2002）
4. 「なかなかいい味にできてるわよ」と妻からお褒めの言葉ことばをもらった。嬉しいものである。（椎名誠著 『活字の海に寝ころんで』, 2003）
5. 「昨夜、平岡調査事務所の前島さんから電話をもらい、いま川越の長沢仙一さんに会って参りました」（深谷忠記著 『運命の塔』, 1994）
6. 「外国人（日本人）も船に乗れるか？」とたずねたところ、「日本人ならビザ免除で九十日間滞在できるからOK」と返事をもらいました。（Yahoo!ブログ, 2008, 地域）
7. 私が金銭に困ったとき、いつもきまって相談に行くが、未だかつて快い返事をもらったことはない。（神崎紫峰著 『炎の声土の声』, 1988）

07. だれかを介して病気にかかる。

[もらう]（他動詞）

構文フレーム：

<人>が<病気>をもらう。 <相手>に／から

■ 共起例

<人>

私、友達、子ども、～さん

<病気>

病気、風邪

<相手>

人：友達、彼、彼女、～さん

組織：学校、幼稚園

■ 例文（作例）

1. 悪い病気をもらってしまった。
2. 息子は幼稚園から風邪をもらってきた。
3. 友達にもらった風邪がなかなか治らない。

■ 例文（コーパス）

1. あいつらは薄汚ない瘡っかきばかりだから早くやめないと必ず例の病気をもらうことになる。（ラン・オブライエン著;大澤正佳訳 『ハードライフ』, 2005）
2. 先週みずぼうそうになり、やっと治ったところです。病院に行こうかと思いましたが、また別の病気をもらっても困りますので様子を見ている状態じょうたいです。
（Yahoo!知恵袋, 2005, 子育てと学校）
3. 保育所に行かせた途端、元気だった子が熱、下痢、嘔吐をするようになりました。最初は食べ物も変わるし、みんなから風邪を貰ってるのだと言ってます。
（Yahoo!知恵袋, 2005, 子育てと学校）

08. 買う。注文する。

[もらう]（他動詞）

構文フレーム：<人>が<商品>をもらう。

■ 共起例

<人>

私

<商品>

大根、魚、花

■ 例文（作例）

1. この大根をもらおうかな。

■ 例文（コーパス）

1. 「とりあえず、俺はコーヒーをもらおかな」と言うと、「そしたら私もコーヒー」とまずリーダー格が注文した。
（西川のりお著 『オトンとオカン』, 2002）

2. 「もう一杯、もらおうか」 秋葉は残った水割りを飲み干して、グラスを差し出す。
(渡辺淳一著『化身』, 1986)

■ 個別の解説

1

- 「～もらおう」の形が普通。 売り手に直接話しかけるときにしか使われない。
(誤) 昨日スーパーで大根をもらいました。
(正) 昨日スーパーで大根を買いました。

09. 勝利を宣言する。宣言して自分のものにする。

[もらう] (他動詞)

構文フレーム : <人>が<試合>をもらう。

■ 共起例

<人>

私、私達、我がチーム

<試合>

試合、勝負

■ 例文 (作例)

1. この勝負はもらった。
2. この試合、俺達がもらうぞ。

■ 例文 (コーパス)

1. (貰もらったッ) 隆介は勝利を確信したが (赤城毅著『帝都最終決戦』, 1998)
2. そしてひげをふり上げ、眉をつり上げ、腕まくりをして、首をふりながら踏み台の上に登り、続いて「白馬」の歌を歌った。この勝負はもらったものと思っているので、あたりを見回みまわし、自分の歌のうまさを誇るかのようであった。
(乾一夫/内田 泉之助著『唐代伝奇』, 2002)

■ 個別の解説

1

- 「もらう (ぞ)」「もらった (ぞ)」と言い切るときは、勝利することに対する強い確信や決意を表す。「もらった」と過去形が用いられた場合でも、試合に勝ったという完了した事実があるわけではない。
(誤) 前回の試合では、私達のチームがもらいました。

(正) 前回の試合では、私達のチームが勝ちました。

2

<相手>に／から は使えない。

(誤) この試合しあい、俺達がああのチームにもらうぞ。

全体の用法解説

1

<相手>が組織の場合は「から」を使うことが多い。

(?) 文部科学省に奨学金をもらう。 (正) 文部科学省から奨学金をもらう。

3

「<目的>に」を伴うとき、<相手>は「から」を使うことが多い。

(?) 夫に結婚記念日のプレゼントにもらったの。

(正) 夫から結婚記念日のプレゼントにもらったの。

4

「もらう」は、自分側が相手側からものを受け渡されることを表す。そのため、「<相手>に」に「私」や私側の人は使えない。

(誤) 田中さんは私にプレゼントをもらいました。

(誤) 田中さんは私の子供にプレゼントをもらいました。

他者が自分側にもものを受け渡すことを表す場合は、「くれる」を使う。

(正) 田中さんは私にプレゼントをくれました。

(正) 田中さんは私の子供にプレゼントをくれました。

第三者同士でもものが受け渡される場合は、「もらう」が使われる。

(正) 鈴木さんは佐藤さんに花束をもらいました。

5

目上の人からものが受け渡されるときは「いただく」や「頂戴する」を使う。

(正) 先生からお褒めの言葉ことばをいただきました。

(正) 先生せんせいからお褒ほめの言葉ことばを頂戴ちょうだいしました。

6

「もらう」はものの移動とともに所有権も移動する。

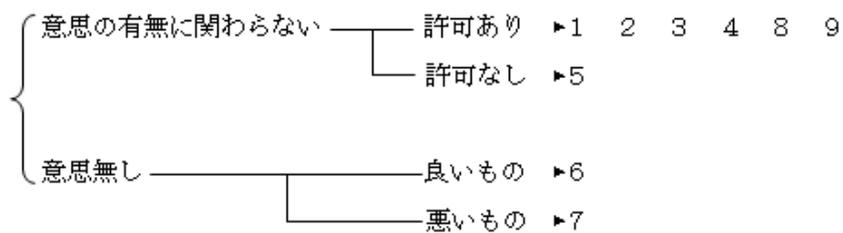
(正) 誕生日プレゼントに時計をもらった。

「受け取る」は、ものが移動するだけで、所有権については問題にしない。

(正) 彼から書類を受け取って先生に渡した。

文法情報

	もらわれ る (受身)	もらわれる (尊敬)	もらわせる (使役)	もらおう (意思)	もらって いる (継続)	もらって いる (結果)
①	×	×	△			
②	×	×	△			
③		×			×	
④		×			×	
⑤	×	×	×		△	
⑥	×	×				
⑦	×	×	×	×	×	
⑧	×	×	×		×	
⑨	×	×	×		×	×



複合語

複合動詞

貰い受ける

複合動詞

貰い下げる

複合名詞

貰い手

複合名詞

貰い物

慣用表現

1. 暇をもらう

意味：（仕事などで）休暇を取ること

- ・法事ほうじのため、暇ひまをもらって帰省きせいした。

意味： 使用人が店などをやめること

・暇ひまをもらって独立どくりつすることにした

2. 杯をもらう

意味： 相手から杯を受け取り、酒をつがれて飲むこと

・結婚のあいさつの席で、相手の父親から杯をもらううちに酔いつぶれてしまった。

多義ネットワーク

7 5 6

↖ ↑ ↗

8 ← 1 → 2

↙ ↓

9 3/4

関連語

類義語

いただく、頂戴する、受け取る、

反義語

あげる、やる、くれる

6.10 【はしる】

アクセント：[LHL]（活用：1型）＜語幹：hasir＞

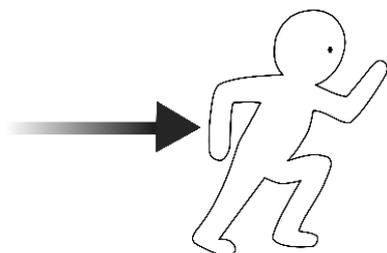
語義一覧

- 01 人、動物などが、（足を交互にすばやく動かして）速やかに前進する
- 02 乗り物が速く動く
- 03 乗り物が運行する
- 04 目的の場所へ急いで移動する
- 05 目的のために動き回る
- 06 逃げる。自分の立場から逃げてある側につく
- 07 好ましくない傾向に傾く
- 08 速くさっと見る
- 09 感覚、現象などが一瞬にして現れる（現れて消える）
- 10 道、川、亀裂などがある方向に延びている、通じている
- 11 活動する。実績を上げる

01. 人、動物などが、（足を交互にすばやく動かして）速やかに前進する

[走（はし）る]（自動詞）

[走（はし）る]（自動詞）



構文フレーム：

<人・動物> が走る。 <起点>から、 <着点>まで、 <場所 1/位置>を、 <距離 1>
を、 <場所 2>で、 <道具>で、 <速さ>で、 <距離 2>、 <目的>で、 <時間 1>
で、 <様態>、 <時間 2>

■ 共起例

<人/動物>

人：私、～（さん）、彼、子供、選手

動物：馬、猫、ネズミ

<起点>

建物：駅、家

場所：東京、箱根、(人/もの) のところ

<着点>

建物：駅、家

場所：東京、箱根、(人/もの) のところ

<場所 1/位置>

場所：公園、屋内、校庭、砂浜、～沿ぞい、歩道、山道、コース、廊下、水の上、闇の中、暖かい日差の中

位置：目の前、先頭、トップ、はるか前方

<距離 1>

距離：マラソン、42.195km、ハーフマラソン、長距離、短距離

<場所 2>

公園、屋内、校庭、砂浜

<道具>

ジョギングシューズ、裸足

<速さ>

全速力、時速50km

<距離 2>

100メートル、50メートル

<目的>

国体、オリンピック、レース

<時間 1>

1時間、100メートルを11秒

<様態>

ゆっくり、速く、一目散に、勢いよく、息せき切って、トロトロ、ビュンビュン

<時間 2>

1時間、10分

■ 非共起例

<様態> 遅く

■ 例文 (作例)

1. 大学の中を新しい靴でゆっくりと10km走った。
2. 犬が公園の中を向こうからこちらへ走ってくる。
3. 駅伝で東京から箱根まで走る。

4. 駅まで大通りを走っていく。
5. 家のまわりをゆっくり 20 分ほど走った。
- 6.

■ 例文（コーパス）

1. まるで競争しているみたいな勢いで廊下を走るとは。
（ベティ・ニールズ作、和香ちか子訳『幸せへの航海』, 2004）
2. ちなみに、お巡りさんは歩道を走っています。
（Yahoo!知恵袋, 2005, マナー、冠婚葬祭）
3. かなり本格的に走る人たちばかりで、半分ぐらいは外国人の感かんじもしますが、日本人であれ外国人であれ、こんなに大勢の人が走るの健康になりたいためでしょうか。（阿久悠『詩小説』, 2000）

■ 個別の誤用解説

1

語義 1 で到達地点の「に」をとることはできない。到達地点の「に」を用いた場合、語義 4 の解釈になる。語義 1 で到達地点の「に」をとるときは「走っていく」「走りこむ」などと方向を表す動詞を伴った複合動詞にする必要がある。

（誤）駅に全速力で走った。（語義 4 の解釈になる。）

（正）駅まで全速力で走った。

（正）駅に全速力で走っていった。

2

<様態>の「はやく」は速度を表す「速く」であり、時期を表す「早く」は用いない。

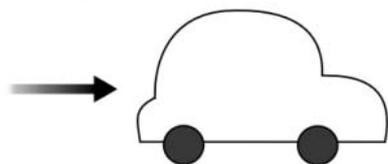
（誤）あの選手はとても早く走る。

（正）あの選手はとても速く走る。

02. 乗り物が速く動く

[走（はし）る]（自動詞）

[走（はし）る]（自動詞）



構文フレーム：

<乗り物> が走る。 <起点>から、 <着点>まで、 <場所／位置>を、 <距離>を、 <

速さ>で、 <様態>

■ 共起例

<乗り物>

車、自転車、バス、列車、電車、船、ヨット

<起点>

建物：駅、家

場所：東京、箱根、(人の) ところ

<着点>

建物：駅、家

場所：東京、箱根、(人の) ところ

<場所/位置>

場所：大通り、線路、高速道路、～沿い

位置：目の前、前方、後方

<距離>

100km

<速さ>

高速、時速 50km、

<様態>

ゆっくり

■ 非共起例

<乗り物>

飛行機、ロケット、船

<様態>

速く、遅く

■ 例文 (作例)

1. ソーラーカーが東京から京都まで走った。
2. 自転車が公園を走っている。
3. あそこを走っているのは電車です。
4. 川沿いをしばらく車で走った。

■ 例文 (コーパス)

1. しばらくは、ホーチミンの街をドンのバイクで走った。
(佐田亜矢著 『トホホなベトナムのほほんラオス』, 2005)

2. 庄内平野の中心山形県鶴岡市から東へ車を走らせると、水田地帯の中に朱の大鳥居が見えてくる。(大矢邦宣『図説みちのく古物』 1999)
3. バスが舗装されていない道を走り始めると、急に車体が揺れだした。
(ルイジ・コッツィ、ミケーレ・デレ・アイエ、ダニエレ・デル・ジュディチェ、ソニア・モルテーニ脚本; 清水節編著『ラストコンサート』,2004)
4. 列車が動き出し、しばらくすると海岸を走っている。
(アリスティア・マクラウド著; 中野恵津子訳『灰色の輝ける贈り物』, 2002)

■ 個別の解説

1

「<人> が <乗り物> を走らせる。」の形で良く使われる。

(例) 昨日は東京から筑波山まで車を走せました。

■ 個別の誤用解説

1

道路、線路や水面など、何かに接して動く乗り物に使われる。

(誤) 飛行機が空そらを走っています。

03. 乗り物が運行する

[走 (はし) る] (自動詞)

構文フレーム：

<乗り物> が走っている。 <起点>から、 <着点>まで、 <場所>を

■ 共起例

<乗り物>

バス、電車、タクシー、モノレール

<起点>

東京、青森、駅、大学

<着点>

東京、青森、駅、大学

<場所>

構内、市内、郊外、大通、～沿い

■ 非共起例

<乗り物>

飛行機、ロケット

■ 例文（作例）

1. このバスは夜の1時を過ぎても走っている。
2. この電車はA市からB市まで走っている。
3. 広島市は路面電車が走っている。

■ 例文（コーパス）

1. 市内を走る電車は市民の足として幅広く利用されている。
(シニアライフ研究会編『年金をもらってシニアライフは海外で!』, 2004)
2. 大阪空港から宝塚、宝塚より有馬温泉行きのバスが走っています。
(Yahoo!知恵袋, 2005, 地域、旅行、お出かけ)
3. バスが走っているが、どのバスがどこへ行くのか判らず、結局利用できなかった。
(沖島博美文・写真; 一志敦子絵『北ドイツ=海の街の物語』, 2001)

■ 個別の誤用解説

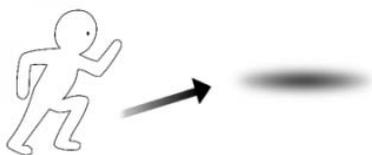
1

道路や線路などの決まっている経路（路線）に接して動く乗り物に使われる。

(誤) 成田空港から新千歳空港まで飛行機が走っています。

04. 目的の場所へ急いで移動する

[走(はし)る] (自動詞)



構文フレーム : <人> が <目的地> に／へ走る。 <目的>に、 <様態>

■ 共起例

<人>

私、警察、父、母

<目的地>

病院、現場、市役所

<目的>

人に会い、物を取り、お金を下ろし

<様態>

急いで、慌てて、急遽

■ 例文（作例）

1. 警察は通報を受け、事故現場へ走った。
2. 息子が救急車で運ばれたと知り、取るものもとりあえず病院へ走った。
3. 市役所に住民票を取りに走った。
4. 叔父が倒れたので、母は大阪に走った。
5. レジのお金がなくなり、店長は銀行に下ろしに走った。
6. 背後を歩く男の足音が段々と大きくなり、怖くなった少女は夢中で家へと走った。

■ 例文（コーパス）

1. 母親の命で組事務所に走ったのは私だったが、兄はすんでのところでは抗争相手あいての組員たちの手から逃がれたのである。
(宮崎学著『ハンパな人生論より極道に学べ』, 2002)
2. その日の夜、本屋敷コンディショニングコーチに激しいひざの痛みを訴ったえ、病院に走った。(Yahoo!ブログ, 2008, Yahoo!サービス)
3. それと同時に、私は空港内で唯一開いていたカフェテリアに走った。
(沢木耕太郎著『オン・ザ・ボーダー』, 2003)
4. 恋人に会いに遠いところから走ってきてくれる人は好きですか？
(Yahoo!知恵袋, 2005, 健康、美容とファッション)
5. 個人の預金者のほとんどは二〇〇〇万ルピア以下の預金しか保有していなかったものの、慌てた預金者が健全な銀行にまで取付に走った。
(高橋琢磨, 関志雄, 佐野鉄司著『アジア金融危機』, 1998, 3 社会科学)
6. ジョヨンが止めに走るかと思ってたけど、何が起こってるのかわかってなかったみたいだね（汗） (Yahoo!ブログ, 2008, エンターテインメント)

■ 個別の誤用解説

1

物理的に遠い場所にはあまり用いない。

(誤) 母が倒れ、私は日本に走った。

(正) 母が倒れ、隣町の実家に走った。

05. 目的のために動き回る

[走(はし)る] (自動詞)

構文フレーム：<人> が<目的> に走る。<様態>

■ 共起例

<人>

私、人々、母、社長

<目的>

金策、～集め、借り

<様態>

我を忘れて、必死になって

■ 例文（作例）

1. 大地震が起こり、人々は食料を集めに走った。
2. 借金を抱えた社長は今、金策に走っている。
3. A社は倒産を目前にして、お金を借りに走った。

個別の解説

1

<目的>は動詞(句)の「ます形（連用形）」を使うこともできる。

(例) 醤油を切らしていたので、買いに走った。

06. 逃げる。自分の立場から逃げてある側につく

[走（はし）る／奔（はし）る]（自動詞）

構文フレーム：<人> が <場所> に／へ走る。<様態>

■ 共起例

<人>

彼、彼女、人々

<場所>

場所：山、高台、出口

方向：外、北

所属先：相手側、敵方、東軍、女のもと、恋人のもと

<様態>

一目散に、急いで、脇目もふらずに

■ 例文（作例）

1. あの男は味方を裏切り、敵側に走った。

2. 津波警報を聞き、人々は山へと一目散に走った。

■ 例文（コーパス）

1. 黒縁眼鏡が追いかけてきそうだったので、そのまま全速力でセンターの外へ走る。
（瀬川ことび著 『7』, 2002）

2. 赤根武人は、危ういと見て奇兵隊を脱出して九州へ奔った。
（南條範夫著 『十五代将軍徳川慶喜』, 1998）

■ 個別の解説

1

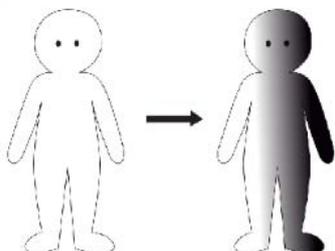
意思を表す際にはあまり用いられない。

(?) 走ろう (正) 逃よう

(?) 走ることにした (正) 逃ることにした

07. 好ましくない傾向に傾く

[走（はし）る／奔（はし）る]（自動詞）



構文フレーム：<人> が <悪い慣習／状態> に／へ走る。

■ 共起例

<人>

少年、人、若者、子供、政治家

<悪い慣習／状態>

習慣：ギャンブル、酒

状態：楽な方、悪の道、保身、感情、極端

行為：悪事、犯罪、凶行、非行、不倫、ドル買い、安易な値下げ、私利私欲、党利党略
宗教、流行

■ 例文（作例）

1. 子供が高校を中退し、非行の道に走ってしまった。

2. リストラされた同僚は、再就職せずギャンブルと酒に走ってしまったそうだ。

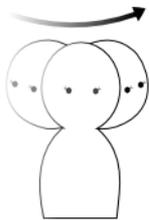
3. 政治家が私利私欲に走ってはいけない。
4. そうやってすぐ流行に走るのはいかがと思うよ。

■ 例文（コーパス）

1. 両親が離婚し兄妹は母方につきましたが離婚後、兄は非行に走り地元でもかなり有名になってしまいました。
(Yahoo!知恵袋, 2005, 健康、美容とファッション)
2. 生活を維持できなくなった留学生のなかに犯罪に走ってしまった人間が増えた。
(莫邦富著 『日中はなぜわかり合えないのか』, 2005)
3. 私が保身に走り、原稿を握り潰してしまったら、真実は永遠に闇へと葬むられたことでしょう。(新堂冬樹著 『鬼子』, 2003)
4. これらが欠如した現今の青少年が、犯罪へ走るのは当然であり、今さら教育の有様を問うてみたところで、なんの解決にもならない。(田盛清隆著 『ヤング武士道』, 2005)
5. 早くから戦後を見据えて戦略をたてていたソビエト外交のしたたかさを見ると、客観情勢を無視してご都合主義にはした日本の外交が、いかにお粗末なものであったかを実感せずにはいられない。(NHK 取材班編 『太平洋戦争日本の敗因』, 1995)

08. 速くさっと見る

[走 (はし) らせる] (他動詞)



構文フレーム：<人> が <場所／対象>に <視線>を走らせる。<様態>

■ 共起例

<人>

私、彼、男、刑事、警備員

<場所／対象>

紙面、部屋の中、辺りに

<視線>

視線、目、横目

<様態>

ちらっと、さっと、鋭く、素早く

■ 例文（作例）

1. 彼はちらりと時計に目を走らせた。
2. 玄関から上がるなり、刑事は部屋中に視線を走らせた。
3. 父は家に帰ってくるなり、あわてて新聞に目を走らせた。

■ 例文（コーパス）

1. バック・ミラーに、松平は目を走らせた。（笹沢左保著 『悪魔岬』, 1991）
2. セリーナはガースの出生証明書に目を走らせ、紙を彼に返した。
（ヴァレリー・パーヴ作;長田乃莉子訳 『まぼろしのプリンス』, 2005）
3. 彼はロザモンドの爪先から目元まで視線を走らせた。
（ジャクリーン・ネイヴィン作;沢田純訳 『ヴァイキングの誇り』, 2001）
4. そのパッケージに彼はちらと視線を走らせた。（藤原伊織著 『ひまわりの祝祭』, 2000）
5. とっさに隣の碓氷真人に横目を走らせたが、彼は相変わらずワイングラスを唇に当てたまま新郎新婦が再入場してくる扉のほうを見つめ、珠代の声に気づいた様子ようすはない。（吉村達也著 『京都天使突抜通の恋』, 2001）

■ 個別の誤用解説

1

「速くさっと見る」動作を表すときに使う。内容をチェックしたり、意思や依頼を表すときにはあまり使わない。

（誤）この書類に目を走らせてくれませんか。

→（正）この書類に目を通してくれませんか。

（正）この書類を見てくれませんか。

（誤）今（この書類に）目を走らせますから、少し待っていて下さい。

→（正）今（この書類に）目を通しますから、少し待っていて下さい。

（正）今（この書類を）見ますから、少し待っていて下さい。

09. 感覚、現象などが一瞬にして現れる（現れて消える）

[走（はし）る]（自動詞）



構文フレーム：

<感覚／現象> が走る。 <起点>から、 <着点>に／へ、 <場所>に

■ 共起例

<感覚／現象>

感覚：刺激、痛み、激痛、戦慄、快感、悪寒、冷たいもの（比喩）、電気（比喩）

現象：稲妻、閃光、プラズマ、ひび割れ、亀裂

<起点>

腕、指先、背中、体、背筋、首筋、顔

<着点>

腕、指先、背中、体、背筋、首筋、顔

<場所>

夜空、暗がり、凍った湖面

■ 非共起例

<感覚／現象> 花火

自然現象や自発的に生じる感覚・感情にしか使えない。人工的な現象には使えない。

■ 例文（作例）

1. 立ち上がった瞬間、腰に痛みが走った。
2. 突然夜空に稲妻が走った。
3. 地盤に大きな亀裂が走った。

■ 例文（コーパス）

1. つばさの胸に締めつけられるような痛みが走った。
(米村正二著;Genco,OLM 原作 『フィギュア 17』, 2002)
2. 店内に低いざわめきが走った。(C.W.ニコル著;村上博基訳 『白河馬物語』, 1989)
3. 輸入禁止から八か月後の十月、この核ミサイル基地の存在をアメリカが知ることになり、米ソ間に核戦争の緊張が走った。(コネスール編著 『たばこの「謎」を解く』, 2001)
4. そのとき、突然目の前に砲弾でも落ちたような音と衝撃が走り、小屋が揺れ動いた。
(逢坂剛著 『アリゾナ無宿』, 2005)
5. その少しかすれた声を聞いて、バービーの背筋に戦慄が走った。
(エマ・ダーシー作; 橋由美訳 『復讐は甘美すぎて』, 2002)
6. 前方の丘の上でピカピカッと夜空に稲妻が走った。
(カイ・マイヤー原作;山崎恒裕訳;山田章博絵 『黒い月の魔女』, 2003)
7. 強化ガラスの表面に亀裂が走り、粉々に砕け散った。(栗府二郎著 『クッキング・オン!』, 2003)

■ 個別の誤用解説

1

速度を表す副詞と一緒に使えない。 (誤) ゆっくり (誤) 速はやく

10. 道、川、亀裂などがある方向に延びている、通じている

[走 (はし) る] (自動詞)



構文フレーム：

<長いもの> が走る。

<場所 1>を、 <場所 2>に、 <起点>から、 <着点>まで、 <長い場所>に沿って、 <距離>にわたって

■ 共起例

<長いもの>

山脈、水脈、亀裂、血管、葉脈、水道管、電線、光ファイバー、断層、道、通り、高速道路、線路、東海道線、万里の長城、用水路、川

<場所 1>

地下、表面、南、北、沿岸部、湾岸、山岳地帯、高原、表、裏

<場所 2>

地下、表面、南、北、沿岸部、湾岸、山岳地帯、高原、表、裏

<起点>

北、南、東、西

<着点>

北、南、東、西

<長い場所>

土手、海岸、建物、駅

<距離>

10km

■ 非共起例

<長いもの>

ズボンの折り目、壁、行、例

■ 例文（作例）

1. 南から北へ向って国道が走っている。
2. この天井には、無数のパイプが走っている。

■ 例文（コーパス）

1. この一帯の東西に、長く一〇〇〇キロを超える巨大な北アナトリア断層が走っている。
（遠山敦子著 『トルコ世紀のはざままで』, 2001）
2. かつての築地川の川底には現在、首都高速道路が走っている。
（陣内秀信, 法政大学・東京のまち研究会著 『水辺都市』, 1989）
3. 水路が縦横に走っている江戸の深川は、幕末に日本を訪ずれた外国人から“東洋のベニス”ともいわれました。（中村幸昭著 『鳥羽水族館館長のジョーク箱』, 2002）
4. 自治区のほぼ中央を天山山脈が走っていて、それより北を「北疆」、南を「南疆」と呼ぶのがふつうです。（陳舜臣著 『中国歴史の旅』, 1997）

■ 個別の解説

- 1 「～ている」の形で使われる

11. 他より優れている、他より進んでいる

[走（はし）る]（自動詞）

構文フレーム：<人／機関> が <前の方（比喩）> を走る。

■ 共起例

<人／機関>

人：～（さん）、彼、彼女

機関：～（社）、会社、企業、チーム

<前の方（比喩）>

世間の先頭、時代の先、業界のトップ、最先端

■ 例文（作例）

1. このチームは現在リーグの首位を走っている。
2. 一つの会社が、長年トップを走ることはむずかしい。
3. 常に時代の先を走る彼は、ときに非難の的となった。

■ 例文（コーパス）

1. しかし先頭を走る者は後から追いかけてくる者にとかくマネをされる。

(高桑末秀著 『広告の世界史』, 1994)

2. こうした従来の常識を破った拡張路線についても、先頭を走っているのは、業界の雄マクドナルドだ。(ダン・S.ケネディ著;池村千秋訳 『悪魔の法則』, 1999)
3. 以前は麒麟が圧倒的にトップを走っていたが、最近では各メーカーが鎬を削って新製品づくりに精を出し、その売上を競っている。
(山形琢也著 『自分の魅力をつくる人つukれない人』, 1999)
4. この間、鉄道技術は、わが国の工業技術の最先端を走り、リーダー役を務めてきた。
(片山修著 『JR 躍進のプロセス』, 1989)
5. だけどですよ、もしも前半4月、5月、6月が5割だったら、今頃完全に首位を走って、もうマジック出てるかもしれないですよ。(谷村志穂著 『野球に逢った日』, 1998)

■ 個別の誤用解説

1

「走っている」「走り続ける」など、継続する状態を表す場合に用い、特定の時間に生起する出来事を表す場合には用いない。

(誤) 我が社は必ず今年度中に業界のトップを走ります。

(正) 我が社は必ず今年度中に業界のトップに立ちます。

(正) 我が社の目標は、衣料メーカーのトップを走り続けることです。

全体の用法解説

■ 文法情報

1:

	走らせる (使役)	走ろう (意思)	走っている (進行)	走った (過去)
1	○	○	○	○
2	○	×	○	○
3	○	×	○	△
4	○	△	○	○
5	○	○	○	○
6	△	△	△	○
7	○	×	○	○
8	○	×走らせよう	○走らせている	○走らせた
9	×	×	×	○
10	△	×	○(状態)	×
11	△	△	○(状態)	△

複合語

複合動詞

走り回る、走り去る、走り通す、走り込む、走り抜く、走り抜ける、走り過ぎる、突っ走る、ひた走る、口走る、先走る、才気走る、血走る、

複合名詞

走り高跳び、走り幅跳び、小走り、ひとつ走り、使い走り、走り書き、走り読み、ご馳走

慣用表現

1. ペン（筆）が走る

意味： 執筆がすばやく進むこと

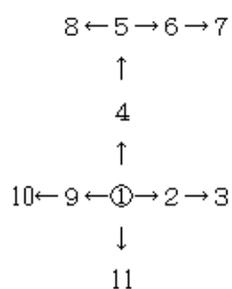
- ・ペンが走り、予定よりはやく原稿を書き上げることができた。

2. 虫酸が走る

意味： たまらなく不快であること

- ・あいつの顔かおを見みただけで、虫唾むしずが走はしる。

多義ネットワーク



関連語

同義語

駆（駈）ける、駆け足、馳せる、ダッシュする

類義語

歩く、通る、動く、進む、行く、飛ぶ

7. 學術論文

7. 学術論文

**COMPILATION OF JAPANESE BASIC VERB
USAGE HANDBOOK FOR JFL LEARNERS:
A PROJECT REPORT**

(Reproduced with permission from *Acta Linguistica Asiatica*)

COMPILATION OF JAPANESE BASIC VERB USAGE HANDBOOK FOR JFL LEARNERS: A PROJECT REPORT

Prashant PARDESHI

National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)
prashantpardeshi@gmail.com

Shingo IMAI

Tsukuba University

Kazuyuki KIRYU

Mimasaka University

Sangmok LEE

Kyushu University

Shiro AKASEGAWA

Lago Institute of Language

Yasunari IMAMURA

National Institute for Japanese Language and Linguistics
(NINJAL)

Abstract

In this article we introduce a collaborative research project entitled “*Nihongogakushuushayou kihondoushi youhouhandbook no sakusei* (Compilation of Japanese Basic Verb Usage Handbook for Japanese as Foreign Language (JFL) Learners)” carried out at the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) and report on the progress of its research product, namely, a prototype of a basic verb usage handbook (referred to as “handbook” below). The handbook differs in many ways from the conventional printed dictionaries or electronic dictionaries available at present. First, the handbook is compiled online and will be made available on internet for free access. Secondly, the handbook is corpus-based: the contents of the entry are written taking into consideration the actual use of the headword using the BCCWJ corpus. Also, it contains illustrative examples of particular meanings culled from the BCCWJ corpus as well as those coined by the entry-writers. Third, the framework used in the description of semantic issues (polysemy network, cognitive mechanism underlying semantic extensions and semantic relationships among various meanings, etc.) is cognitive grammar, which adopts a prototype approach. Fourth, it includes audio-visual contents (such as audio files and animations/video clips etc.) for effective understanding, acquisition and retention of various meanings of a polysemous verb. Fifth, the handbook is bilingual (Japanese-Chinese, Japanese-Korean and Japanese-Marathi) and incorporates insights of contrastive studies and second language acquisition. The handbook is an attempt to share cutting edge research insights of various branches of linguistics with Japanese language pedagogy. It is hoped that the handbook will prove to be useful for JFL learners as well as Japanese language teachers across the globe.

Keywords

basic verbs; corpus-based; cognitive grammar; audio-visual contents; bilingual dictionary; multilingual dictionary

Izveček

Članek predstavlja skupinski raziskovalni projekt z naslovom “*Nihongogakushuushayou kihondoushi youhouhandbook no sakusei* (Izdelava priročnika o rabi japonskih osnovnih glagolov za učence japonščine kot tujega jezika)”, ki poteka na Državnem inštitutu za japonski jezik in jezikoslovje (National Institute for Japanese Language and Linguistics - NINJAL), ter poroča o trenutnem stanju raziskovalnega izida, t.j. prototipa priročnika o rabi osnovnih glagolov (v nadaljevanju “priročnik”). Priročnik se v marsičem razlikuje od običajnih tiskanih in elektronskih slovarjev, ki so trenutno dosegljivi. Prva značilnost je ta, da se priročnik ureja preko spleta in bo prosto dostopno objavljen na spletu. Druga je ta, da je priročnik osnovan na korpusih: pri redakciji gesel se upošteva dejanska raba iztočnic v korpusu BCCWJ, priročnik pa vsebuje tako primere rabe posameznih podpomenov, ki se črpajo iz korpusa BCCWJ, kot tudi primere, ki jih sestavijo redaktorji. Tretja značilnost je ta, da se semantični vidiki (pomenske mreže, kognitivni mehanizmi, ki botrujejo pomenskimi širitvam, ter pomenske povezave med posameznimi podpomeni, ipd.) opisujejo v okviru kognitivne slovnice s prototipnim pristopom. Četrta značilnost je ta, da vključuje zvočne in slikovne vsebine (zvočne posnetke, animacije, videoposnetke ipd.) kot pomoč pri učinkovitem razumevanju, učenju in pomnjenju različnih pomenov večpomenskih glagolov. Peta značilnost je ta, da je priročnik dvojezičen (japonsko-kitajski, japonsko-korejski in japonsko-maratski) in vključuje spoznanja protistavnega jezikoslovja in vede o učenju tujih jezikov. Priročnik je poskus zlitja najnovejših raziskovalnih spoznanj različnih vej jezikoslovja z didaktiko japonskega jezika. Upamo, da bo priročnik koristil tako učencem kot učiteljem japonščine po celem svetu.

Ključne besede

osnovni glagoli; korpusno osnovan; kognitivna slovnica; zvočno-slikovne vsebine; dvojezični slovar; večjezični slovar

1. Introduction

Verbs as predicators are one of the crucial components determining the skeleton of a sentence, which serves as a basic unit of communication. For improving communication skills in Japanese it is imperative for JFL (Japanese as foreign language) learners to master various usages of basic verbs used frequently in day-to-day communication in a systematic way. At the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), a collaborative research project entitled “*Nihongogakushuushayou kihondoushi youhouhandbook no sakusei* (Compilation of Japanese Basic Verb Usage Handbook for Japanese as Foreign Language (JFL) Learners)” is being carried out (project leader: Prashant Pardeshi, timeline: October 2009-September 2012). The aim of the project is to develop a prototype for the compilation of a handbook of usage of basic verbs in Japanese frequently used in day-to-day conversation by integrating state-of-the-art insights from various related fields such as Cognitive Linguistics, Corpus Linguistics, Japanese Linguistics, Japanese Language Pedagogy, Contrastive Linguistics, and Linguistic Typology. The envisaged end product is a set of small-scale bi-lingual handbooks such as Japanese-Chinese, Japanese-Korean and Japanese-Marathi, compiled adopting the prototype developed in the project. We believe that such a bilingual handbook of usage of Japanese basic verbs

would be of great help for JFL learners in their effort to acquire the Japanese language systematically and efficiently.

The handbooks under compilation differ from existing dictionaries in various respects such as compilation policy, scope and contents of description and the writing and editing process. In this article we report on the progress of the project and salient features of its envisaged research output, namely, a prototype of a bilingual Japanese basic verb usage handbook (referred to as handbook below). The structure of this article is as follows. In section 2 we provide the outline of the handbook project and a overview of the salient features of the handbook under preparation. Against this backdrop, in section 3 we exemplify the organization of each entry with the help of a concrete example – the verb *hashiru* “to run” – and describe the (tentative) methodology of description. One of the salient features of the handbook is that it is corpus-based. In section 4, we describe the tools/interfaces developed for retrieving information necessary for writing an entry from the corpora of correct use of Japanese and of the errors of JFL learners. Further, the compilation and editing work of the handbook is carried out online using a web-based editing tool. In section 5, we describe the multilingual editing tool developed in this project. This tool allows us to transcend the barriers of space and time. Furthermore, we are developing audio-visual contents in order to foster understanding of various meanings of polysemous verbs. In section 6 we introduce those contents. Finally, in section 7 we discuss future prospects.

2. Overview of the handbook project and salient features of the handbook

2.1 Overview of the handbook project

We believe that systematic learning of polysemous basic verbs including features such as the semantic behaviour (semantic extensions of a verb and interrelationship among its various meanings, related words such as synonyms, antonyms etc., proverbs/idioms involving the verb in question etc.), grammatical/syntactic behaviour (voice and polarity bias, aspectual and modal characteristics, co-occurrence restrictions, modifiers/adverbial elements, ungrammatical/unnatural usages, etc.), argument structure (case frame), genre/register bias, etc. is necessary in order to master communication skills in Japanese. Further, it is also necessary to know where and how the Japanese language (target language: L2) is similar to or different from the user's mother tongue (source language: L1). In view of this, the aim of the project is to develop a prototype for the compilation of a handbook of usage of Japanese basic verbs by integrating state-of-the-art insights from various related fields of theoretical and applied linguistics for the JFL learner. At present, 58 scholars from various parts of the globe are participating in this project. Out of these 58 scholars, 42 are native speakers

of Japanese while 16 are non-native researchers working on Japanese language for a long period of time¹.

Since the primary goal of the project is qualitative, viz. developing a prototype of a bilingual basic verb usage handbook, we decided to restrict the quantity (number) of verbs and focus on highly polysemous basic verbs which pose a great challenge for JFL learners. Concretely speaking, we focus on the following 11 verbs: verbs of spatial motion (vertical motion: *agaru* “go/move up”, *ageru* “cause to go/move up”, *sagaru* “go/move down”, *sageru* “cause to go/move down”, and horizontal motion: *hashiru* “run”), and verbs of temporary or permanent transfer of possession (*ageru* “to give something to someone as a present/gift”, *morau* “to receive something from someone as a present/gift”, *uru* “to sell”, *kau* “to buy”, *kasu* “to lend” and *kariru* “to borrow”). All of these verbs are highly polysemous: for example, in our handbook there are 19 meanings/senses for *agaru* “go/move up”, 22 for *ageru* “cause to go/move up”, and 11 for *hashiru* “run”. In section 3, we describe the policy and method of description of an entry through the example of the entry for *hashiru* “run” in our handbook.

2.2 Salient features of the handbook

The handbook under preparation is in electronic online form and the target users of the handbook are envisioned to be advanced JFL learners and native as well as non-native teachers of Japanese. In addition to the dictionary-like usage for looking up the meaning and examples illustrating various meanings of a verb, the handbook serves as a reference grammar also containing many salient features such as explanation of cognitive mechanisms underlying semantics extensions, notes on grammatical and non-grammatical usages, pragmatics or context-related explanations, tips from the contrastive perspective (comparison with the L1 of the JFL learner), “real” examples from the corpus, visual contents such as image-schema (static, abstract line drawings as well as concrete animations and video-clips), and audio-contents such as accent pattern and sound-files for all illustrative examples. Further, the descriptions and “coined” examples are all based on the actual use of the verb as “objectively” gleaned through the corpus data.

Out of all these salient features, two features can be considered as “discriminatory” ones that set apart the present handbook from the bi-lingual dictionaries available at present: (i) corpus-based approach: drawing on a corpus of “correct use” of Japanese native speakers and one of “erroneous use” of JFL learners in addition to the intuitions of scholars for the composition of entries and (ii) incorporating the insights of cognitive linguistics and contrastive linguistics.

For the corpus of “correct use” of Japanese native speakers we used the BCCWJ corpus (Maekawa, 2012) developed by the National Institute for Japanese Language

¹ For further details visit the project HP: <http://www.ninjal.ac.jp/research/project/b/youhoujiten/>.

and Linguistics (NINJAL) and developed an interface called NINJAL-LWP for the BCCWJ corpus (NLB) to cull the information necessary for writing an entry. For “erroneous uses” of JFL learners we used the data from Teramura (1990) and developed an interface to retrieve relevant information from it (see section 4 for details). The prototype of the handbook under preparation incorporates examples from BCCWJ corpus culled with the help of NLB and thus offers both coined as well as real examples side-by-side (see the tentative design in Figure 1).

For incorporating the insights of cognitive linguistics we have incorporated visual contents such as image-schema (static, abstract line drawings as well as concrete animations and video-clips), and audio-contents such as accent pattern and sound-files for all illustrative examples taking full advantage of the web-based nature of the handbook. As for incorporating insights of contrastive linguistics, in addition to grammatical similarities and differences between Japanese and JFL’s native language we have provided extra-grammatical information such as notes on pragmatics and cultural factors.

The handbook is compiled/edited using a web-based editing tool connecting scholars in Japan, China and India. Such a handbook differs in many respects from contemporary bilingual dictionaries and therefore we purposely call it a bilingual handbook. In the following sections prominent salient features of the handbook are discussed.

3. The organization of an entry and the (tentative) methodology of description

3.1 Organization of an entry

The organization of an entry/headword is explained below with the help of the concrete example of the verb *hashiru* (to run). Following this, the methodology of description is mentioned. However it should be borne in mind that the statement pertaining to the methodology of description is tentative and subject to change.

〔アクセント : Accent〕 LHL

〔活用 : Conjugation〕 hasir- Group I

〔語義一覧 : List of senses/meanings〕

1. 人、動物などが、（足を交互にすばやく動かして）速やかに前進する (a person or an animal moves quickly ahead (by quickly moving its legs alternatively))
2. 乗り物が速く動く (a vehicle moves fast)
3. 乗り物が運行する (transportation operates)

4. 目的の場所へ急いで移動する (to move to the destination hurriedly)
5. 目的のために動き回る (to run around for some purpose)
6. 逃げる。自分の立場から逃げてある側につく (to run away, to flee from one's own side and join another side)
7. 好ましくない傾向に傾く (incline towards an undesired trend)
8. 速くさっと見る (take a quick look)
9. 感覚、現象などが一瞬にして現れる (現れて消える) (sudden appearance [and disappearance] of a feeling or phenomenon)
10. 道、川、亀裂などがある方向に延びている、通じている (extension or continuation of a road or a river or a crack etc. in a particular direction)
11. 活動する。実績を上げる (to work, to achieve results)

The details of the sense 1 are described below. Owing to space restrictions, other senses are not discussed here.

〔語義 : Sense/meaning〕

人、動物などが、(足を交互にすばやく動かして) 速やかに前進する
a person or an animal moves quickly ahead (by quickly moving its legs alternatively).

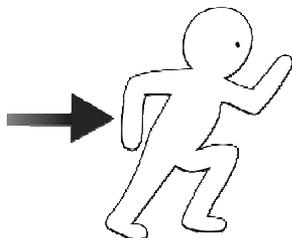
〔表記 : Orthographical form〕

走 (はし) る

〔自他 : Transitivity〕

自動詞 (Intransitive)

〔イメージ : Image〕



〔構文フレーム : Construction frame〕

- ・ 基本フレーム : <人・動物> が走る (Basic frame: <person/animal> NOM runs)
- ・ オプション要素 (Optional elements/adjuncts)
(起点) から (source) kara, (着点) まで (goal) made
(場所 1 / 位置) を (location 1/position) wo, (距離 1) を (distance 1) wo

(場所 2) で (location 2) de, (道具) で (instrument) de, (速さ) で (speed) de, (距離 2) (distance 2), (目的) で (purpose) de, (時間 1) で (time 1) de, (様態) (manner), (時間 2) (time 2)

[共起例 : Collocations]

<人・動物> が <person/animal> ga	① 人 (person) : 私 (I), ~ (さん) Mr./Mrs./Ms. X, 彼 (he), 子供 (child), 選手 (player) ② 動物 (animal) : 馬 (horse), 猫 (cat), ネズミ (mouse)
(起点) から (source/starting point) kara	① 建物 (building) : 駅 (station), 家 (house) ② 場所 (place) : 東京 (Tokyo), 箱根 (Hakone), (人/もの) のところ (from the location of a person or an object)
(場所 1 / 位置) を (place 1/position) wo	① 場所 (place) : 公園 (park), 屋内 (in-house), 校庭 (school ground), 砂浜 (beach), ~沿い (along something), 歩道 (walkway), 山道 (mountain trail/pass), コース (course), 廊下 (corridor), 水の上 (on or above the water surface), 闇の中 (in the dark), 暖かい日差しの中 (in the warm sun) ② 位置 (position) : 目の前 (in front of one's eyes), 先頭 (ahead), トップ (top), はるか前方 (way ahead in the forward direction)
(距離 1) を (distance 1) wo	マラソン (Marathon), 42.195km, ハーフマラソン (half marathon), 長距離 (long distance), 短距離 (short distance)
(場所 2) で (location 2) de	公園 (park), 屋内 (indoor), 校庭 (school ground), 砂浜 (beach)
(道具) で (instrument) de	ジョギングシューズ (jogging shoes), 裸足 (bare foot)
(速さ) で (speed) de	全速力 (with full speed), 時速 50km (50 km/hour)
(距離 2) (distance 2)	100 メートル (100 meters), 50 メートル (50 meters)
(目的) で (purpose) de	国体 (national tournament), オリンピック (Olympic), レース (race)
(時間 1) で (time 1) de	1 時間 (one hour), 100 メートルを 11 秒 (100 meters in 11 sec)
(様態) (manner)	ゆっくり (slowly), 速く (fast), 一目散に (as fast as one's legs can/could carry one), 勢いよく (fiercely), 息せき切って (breathlessly), トロトロ (feebly), ビュンビュン (zippingly)
(時間 2) (time 2)	1 時間 (one hour), 10 分 (10 minutes)

[非共起例 : Wrong collocations]

(様態) (manner) (誤) (inappropriate/incorrect) 遅く (slowly)

〔例文・作例 : examples/coined examples〕

- ・ 大学の中を新しい靴でゆっくりと 10km 走った。(I slowly ran 10 km at the university wearing new shoes.)
- ・ 犬が公園の中を向こうからこちらへ走ってくる。(The dog runs across the park from the other side to here.)
- ・ 駅伝で東京から箱根まで走る。(To run from Tokyo to Hakone in the ekiden race.)
- ・ 駅まで大通りを走っていく。(To run to the station along the boulevard street.)
- ・ 家のまわりをゆっくり 20 分ほど走った。(I ran slowly around my house for 20 minutes.)

〔例文・コーパス : examples/from corpus: not translated into the target language〕

- ・ まるで競争しているみたいな勢いで廊下を走るとは。(ベティ・ニールズ作、和香ちか子訳『幸せへの航海』, 2004)
- ・ ちなみに、お巡りさんは歩道を走っています。(Yahoo!知恵袋, 2005, マナー、冠婚葬祭)
- ・ かなり本格的に走る人たちがばかりで、半分ぐらいは外国人の感じもしますが、日本人であれ外国人であれ、こんなに大勢の人が走るのは健康になりたいためでしょうか。(阿久悠『詩小説』, 2000.9 文学)

〔個別の誤用情報 : Information on errors pertaining to specific use〕

(1) 語義 1 で到達地点の「に」をとることはできない。到達地点の「に」を用いた場合、語義 4 の解釈になる。語義 1 で到達地点の「に」をとるときは「走っていく」「走りこむ」などと方向を表す動詞を伴った複合動詞にする必要がある。(In the case of sense/meaning 1, the goal location cannot be marked with the particle “*ni*”. If the goal location is marked with the particle “*ni*”, the meaning changes to sense/meaning number 4. In order to use the particle “*ni*” in the case of sense/meaning 1, it is necessary to use a complex predicate such as “*hashitte iku*” or “*hashirikomu*” which contain a verb implying direction.

(誤: ungrammatical use) 駅に全速力で走った。(語義 4 の解釈になる。)

(正: grammatical use) 駅まで全速力で走った。

(正: grammatical use) 駅に全速力で走っていった。

(2) (様態) の「はやく」は速度を表す「速く」であり、時期を表す「早く」は用いない。The adverb “*hayaku*” is the one that expresses “*speed*” and not the one that expresses “*an early time/period/season*”.

(誤: ungrammatical use) あの選手はとても早く走る。

(正: grammatical use) あの選手はとても速く走る。

— 中略 abbreviated —

[文法 : Grammar]

語義 sense	走らせる	走ろう	走っている	走った
	使役 causative form	意思 volitional form	進行 progressive form	過去 past form
1	○	○	○	○
2	○	×	○	○
3	○	×	○	△
4	○	△	○	○
5	○	○	○	○
6	△	△	△	○
7	○	×	○	○
8	○	×走らせよう	○走らせている	○走らせた
9	×	×	×	○
10	△	×	○ (状態)	×
11	△	△	○ (状態)	△

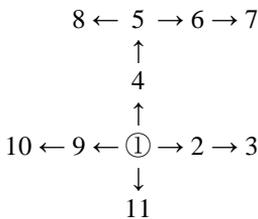
[複合語 : Compounds]

- ▶走り回る ▶走り去る ▶走り通す ▶走り込む ▶走り抜く ▶走り抜ける
- ▶走り過ぎる ▶走り高跳び ▶走り幅跳び ▶突っ走る ▶ひた走る ▶小走り
- ▶ひとつ走り ▶使い走り ▶走り書き ▶走り読み ▶口走る ▶先走る
- ▶才気走る ▶石 (いわ) 走る ▶血走る ▶ご馳走

[慣用句・ことわざ: Idioms/Proverbs]

- ▶ペン (筆) が走る ▶虫酸が走る

[語義ネットワーク: Semantic network]



[関連語 (ワードファミリー) : Related words (word family)]

- ・ 同義語 Synonyms : ▶駆 (駈) ける ▶駆け足 ▶馳せる ▶ダッシュする
- ・ 類義語 Near-synonyms : ▶歩く ▶通る ▶動く ▶進む ▶行く ▶飛ぶ

3.2 The methodology of description: the content and the intent

{Accent}

In the case of accent, H stands for high and L stands for low pitch accent. However, for conveying accent information, the audio medium is more effective than the visual and we provide audio files to convey accent in addition to the visual representation.

{Conjugation}

The stem of the verb and its conjugation pattern is provided. As for the conjugation pattern, the classification widely used in Japanese language education (Group I, II and III) is adopted.

{List of meanings/senses}

The basic meaning is presented first and derived meanings follow as distinct senses. The basic meaning is also known as the central meaning and in a polysemous word it is considered as the most basic sense/meaning. This meaning is more concrete, more frequent and corresponds to what is known as the prototypical sense. The order of senses/meanings in the list of senses/meanings is decided taking into consideration the semantic closeness or remoteness of the sense in question to the central meaning. However basically this relationship is not linear there is some inevitable arbitrariness in determination of the order of meaning/senses. A semantic network diagram (described below) is also presented in order to show relationships among meanings graphically.

{Meaning/Sense}

The meaning/sense is explained in simple, easily understood terms. Some key words are intentionally used in order to make clear the relationships among the explanations. Such a strategy will also help to foster the understanding of connections in the semantic network. Also, the explanation is devised in such a way that the semantic congruence between the constructional meaning suggested by the construction frame discussed later and the core arguments and adjuncts would be easier to comprehend.

{Orthographic representation}

The orthographic representation in Kanji (Chinese) characters is provided with kana reading.

{Transitivity}

The transitivity of the verb in question is given. Depending on the meaning/sense, the transitivity may vary. However, the transitivity given here is that of the basic/central meaning.

{Image}

Providing a pictorial image of the meaning/sense helps in facilitating understanding of the meaning/sense in question. Image plays an important role especially in the derived/extended meanings/senses. Images are modeled on image schema proposed in the theory of cognitive linguistics. However we adopted more concrete images as compared to theoretical image schema. Further, in the case of image, unlike image

schema, emphasis is given to ease of understanding rather than theoretical precision. For the image, still pictures, animation as well as video clips are used (see section 6 for details).

(Construction frame)

The construction frame is shown in the form of a two tier structure: obligatory core arguments and optional adjuncts. However, as shown below, in some cases judgment between the two is difficult. For example, the verb *kaku* “to write” is a two-place predicate taking two core arguments, however in a construction like <person 1> write <a letter> to <person 2> it behaves like a 3-place predicate. In such cases, in the construction grammar approach (cf. Goldberg (1995)), the construction containing 3 arguments is assumed. One falls in a dilemma on the issue of whether the 3-place construction should be incorporated in the description of a dictionary entry for the verb *kaku* “write”. This is because, if one proceeds with adopting the construction-centered explanation, one needs to include extremely eccentric constructions as well, resulting in dramatically swelling the length of the description. Even if one adopts such a description policy, the issue of deciding whether the phrase <person 2> *ni* should be treated as an argument or as an adjunct remains unsolved. Viewed from the meaning/sense of the verb it is an adjunct while viewed from the point of a construction it is an argument. At present this issue is left to the decision of the entry writer and editor, however, by referring to the frequency count, this issue can be resolved to a certain extent.

(Collocations)

Collocations are shown for both arguments and adjuncts. This is because collocations differ from one sense to another as well as from one case particle to another. Collocations are ordered in the sequence of collocation frequency deduced using the BCCWJ corpus browsing tool called NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB for short). As a statistical index expressing the strength of a collocation, a score called “Mutual Information (MI)” score is available, however the MI score tends to cull expressions involving high degree of idiomaticity, so we decided to use raw frequency as a criterion for the purpose of listing collocations. Arranging collocation based on the raw frequency deduced from NLB ensures objectivity and authenticity. However, on the other hand, owing to the limitation on the size of the corpus (65 million words in NLB, 100 million words in BCCWJ) there is no guarantee that all the collocations needed to be listed in the dictionary are culled without any leakage. Therefore, some collocations which do not appear in the NLB, but which are thought to be necessary for learners are added. This measure, to a large extent, depends on the experience of the editor. In future, if the size of the corpus is increased, it is expected that the selection of collocations on the basis of the frequency criterion would become easier. For this purpose, the Tsukuba WEB Corpus (TWC) with a projected ten times the entries of BCCWJ is under preparation.

(Wrong collocations)

Here collocations which are prone to lead to wrong usage are described.

(Examples: coined examples)

For each meaning/sense we provided more than 3 coined examples. In order to avoid examples ending only with dictionary form (plain style, non-past), we have made a deliberate attempt to coin examples involving variation of tense, aspect, voice, modality etc. Such a move also helps to enhance naturalness of examples. Quite often we have even used complex sentences as well.

(Examples: from corpus)

We have provided examples culled from the BCCWJ corpus as well. The purpose of providing examples from corpus is to provide examples that are natural in the context of situation in question. However, on the other hand there is the criticism that such examples are difficult for non-natives to comprehend. The same observation has been made during the process of compilation of this handbook as well. It has been pointed out that real examples from a corpus are hard to comprehend unless one has sufficient knowledge of socio-cultural background. It became clear in our handbook that translation of such examples into another language is a big obstacle. Especially, considering the typically High Context Communication (Hall, 1976) nature of Japanese, it is easy to imagine that the problems of real examples would be much graver than in English. Whether to stick to real-examples only or to allow coined examples for the point of view of second language education is a complex issue with no satisfactory solution. At present, taking merits of both, we have decided to include natural examples as well as tailored examples. However, since the translation of natural examples is an extremely difficult task, we have decided not to translate the corpus examples.

(Information on wrong usage: in the case of specific meanings)

Mistakes that learners tend to make often are described under this heading. For information on wrong usage by JFL learners, various databases including Teramura database (<http://teramuradb.ninjal.ac.jp/>) are used. However, since these corpora are developed individually, the size of each of them is rather small and it is difficult to deduce general patterns of mistakes from them. Under such circumstances we have to heavily rely on the teaching experience of the editor. The following are examples from learners' corpora:

Spoken language corpus:

発話対照データベース、生活対照データベース (taiwa taishou detaabeesu, seikatsu taishou deetabeesu)

日本語学習者会話データベース(nihongo gakushuusha kaiwa deetabeesu)

日本語学習者会話ストラテジーデータ (nihongo gakushuusha kaiwa sutoratejiideeta)

KY コーパス (KY koopasu)

タグ付き KY コーパスと検索ツール(tagutsuki KY koopasu to kensaku tsuuru)

BTS による多言語話し言葉コーパス (BTS ni yoru tagengo hanashikotoba koopasu)

インタビュー形式による日本語会話データベース (上村コーパス) (intabyuu keishiki ni yoru nihongo kaiwa deetabeesu (Uemura koopasu))

Written language corpus:

寺村誤用例集データベース (Teramura goyou reishuu deetabeesu)

日本語学習者言語コーパス (nihongo gakushuusha gengo koopasu)

作文対訳 DB (sakubun taiyaku DB)

自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパス
(shizengengoshori no gijutsu wo riyou shita tagutsuki gakushuusha sakubun koopasu)

日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース
(nihon/kannkoku.taiwan no daigakusei ni yoru nihongoikenbun deetabeesu)

JLPTUFS 作文コーパス (JLPTUFS sakubun koopasu)

In addition to the above list, there are many corpora which are either not made public or are accessible to only few individuals. For the effective use of intellectual resources, it is desired that an organization like NINJAL take the lead in the development of a platform like CHILDES (Child Language Data Exchange System) which allows accumulation of data in a common platform.

{ Grammar }

Here we have shown the behavior of the verb with respect to grammatical categories like aspect, voice, tense etc. A conclusion is still not reached on whether to include categories like direct passive, indirect passive, imperative form, other sentence-final expressions. Further, whether to make judgments on grammaticality of such categories based on intuitions of individuals or on the basis of corpus frequency is also not yet decided. For making judgments on grammaticality (especially the subtle ones, shown by triangle sign) on the basis of corpus frequency, the size of the BCCWJ corpus seems not to be sufficient.

{ Compounds }

Compound words are too large in number and hence it is impractical to include all of them. If so, again one has to decide on the basis either of intuition or of corpus frequency in order to decide potential candidates that should be listed. We would like to make use of the corpus for this and at present are using frequency as a criterion for listing compound words.

{ Idioms and proverbs }

Idioms and proverbs consist of elements which are tightly bound together and the meaning of the whole cannot be guessed from the combination of the meanings of the parts. In other words, it can be said that semantic transparency is low in the case of idioms and proverbs. However, the transparency is a gradient concept and the decision of collocation or proverb is bound to be arbitrary. One yardstick for this decision can be MI (Mutual Information) score. The higher the degree of idiomaticity the greater the MI score (see section 4.1.2).

{ Semantic network }

The relationships among meanings/senses are visually shown with the help of a radial category network diagram. The basic or central meaning is the one that is known in cognitive linguistics as the prototypical meaning. The relationships among meanings/senses are visually shown with the help of a radial category network diagram. The basic or central meaning is the one that is known in cognitive linguistics as the prototypical meaning. Derivations from it are arranged in a way to be understood intuitively. These semantic derivations themselves are products of linguistic research. Many cognitive linguists are also involved in this project. However, there is no guarantee that the semantic derivations are determined on the basis of a single meaning. Also the sequence of diachronic change and synchronic relationship often do not match. In view of these considerations, while insights from cognitive linguistics form the basis of description, often changes have been made in favour of intuitive understanding. There are places where accuracy of description from the point of cognitive linguistics conflicts with intuitive understanding. In such cases we have preferred educational considerations such as ease of understanding for teachers and learners.

As for the network, showing just the connection is not enough. The strength of the connection should also be shown. We are thinking of showing the strength or weakness of the connections visually in terms of the thickness of the line or the distance between the senses so as to foster understanding in a visual and intuitive way.

{ Related words (word family) }

At present, we have listed words with almost the same meaning and synonyms as related words. Listing of antonyms is also under consideration. We are thinking of presenting the word family in the form of a radial category network, if possible.

4. Developing tools for corpora of correct usage and wrong usage

One of the important policies we adopted to create this handbook is to make good use of available corpora. To compile a corpus-based handbook or dictionary, the existence of tools which enable dictionary writers to use corpora adequately and efficiently in the process of dictionary making is indispensable. In this project we chose the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) as a corpus of correct use by Japanese natives and the *Gaikokujin gakushuusha no nihongo goyoureishuu* (*Collection of errors of JFL learners*, 1990), compiled by Hideo Teramura and his colleagues, as a corpus of wrong usages of JFL learners. We developed search tools for each of these corpora. In the following two subsections, we will describe the features and functions of both tools.

4.1 NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB, <http://nlb.ninjal.ac.jp>) is an online search tool for the BCCWJ, jointly developed by the National Institute of Japanese Language and

Linguistics (NINJAL) and Lago Institute of Language (LIL). The basic unit of this system is LagoWordProfiler (LWP), which LIL has developed for dictionary writing and editing. LWP has been successfully utilized in several projects of English-Japanese, Japanese-English dictionary making.



Figure 1: The headword Window of NLB

BCCWJ is the first balanced corpus of the Japanese language, developed by NINJAL, and its final version was made public at the end of 2011. It is a large corpus of more than 100 million words, the size of which is comparable to the British National Corpus. The main component of the corpus consists of random samples from books, newspapers, magazines using rigid statistical methods to establish representativeness. Nine additional sub-corpora are provided for special purposes, including web text, which shows different usage patterns from those of text of the print media (Maekawa, 2012).

4.1.1 Lexical profiling

The most important feature of NLB is its introduction of the lexical profiling methodology. Lexical profiling is now a standard method for making corpus-based dictionaries because it satisfies the requirements for using corpora in dictionary making. A concordancer used to be a standard tool in the earliest corpus lexicography. On the COBUILD Project, which made extensive use of corpora for the first time, the writing staff wrote headword entries by analyzing concordance lines from a concordancer (Sinclair, 1987). Concordance lines enable the dictionary writer to analyze individual words in real context. However, the larger the number of lines, the more difficult it is to grasp the whole variety of linguistic phenomena. To solve this difficulty, lexicographers realized the importance of summarizing linguistic phenomena comprehensively by use of abstraction (lemmatization, POS tagging, and chunking) and statistical measures (the MI score, the T score, etc.). In this process,

lexical profiling as a new approach gradually developed (Church et al., 1991). At the end of the 1990s, a practical lexical profiling tool called *Word Sketch* appeared (Kilgarriff & Rundell, 2002). This software was first used for compiling *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*, and then it developed into the integrated system *Sketch Engine*, which is now used in many dictionary projects.

Lexical profiling has two important requirements. The first is comprehensiveness. Linguistic research, in general, focuses on a particular linguistic behavior and adopts an approach that examines individual instances carefully and thoroughly. On the other hand, what dictionary making requires is to examine each headword's overall behavior. A dictionary writer needs to grasp a headword's behavior as comprehensively as possible. When implementing a search tool, which patterns to extract and how to classify those extracted patterns are vital keys to ensure comprehensiveness.

The other key is time efficiency. This is essential in dictionary making. The number of headwords in a dictionary range from several thousand to one hundred thousand. To make best use of a corpus when writing a large number of headwords, an environment that enables dictionary writers to use a corpus efficiently is indispensable. Key factors to realize this environment include search speed and a user interface.

4.1.2 Lexical profiling in NLB

So how does NLB satisfy the requirements of lexical profiling? As to comprehensiveness, NLB deals with the orthographical variety of the Japanese language.

書字形		
取り上げる	2292	70%
とりあげる	544	17%
取りあげる	234	7%
とり上げる	88	3%
探り上げる	40	1%
取上げる	31	1%
探りあげる	17	1%
取り挙げる	3	0%
とり挙げる	2	0%
探り挙げる	2	0%
取り上る	1	0%
とり掲げる	1	0%
取り掲げる	1	0%

Figure 2: Orthographical forms for *toriageru*

Japanese is usually written in three types of characters: *hiragana*, *katakana* and *kanji*. This means a word could be written in at least three ways. The noun *hito*, which means *a person*, can be written as *ひと* in hiragana, or *ヒト* in katakana, or *人* in kanji, with different connotations. In the case of compound verbs, things are complicated by the fact that some verbs have two or more kanji candidates with slightly different meanings. The compound verb *取り上げる* (*toriageru*), which means *pick up* or *adopt*, can also be written as *探り上げる*. Including a variation of kana suffixes, more than ten orthographical forms for *トリアゲル* are possible. From the point of view of comprehensiveness, it is, in many cases, more appropriate to group two or more orthographical variants into the most typical orthographical form than to give each form a headword status. NLB deals with this issue by incorporating the idea of representative orthographical form. In the previous example of *取り上げる*, more than ten orthographical forms are all grouped into the

representative form 取り上げる, which consists of a headword entry. Figure 2 shows the frequency distribution of orthographical forms for 取り上げる in BCCWJ.

In order to maximize time efficiency, NLB has a user interface that allows the user to examine grammatical patterns, collocations, and examples from the corpus in the same window (See Figure 1). On *Sketch Engine*, which we mentioned earlier, a screen transition occurs every time the user looks for examples for each collocation. A user interface with frequent screen transitions is problematic from the point of view of time efficiency. With the recent spread of large screen displays, it is not so difficult as before to introduce a user interface with a minimum of screen transitions. Although user interfaces for corpus search tools have not been given much attention until recently, its importance is expected to increase as the size of corpora increases and more sophisticated search functions are implemented. Search speed is another important factor closely related to time efficiency. NLB shows the results of collocations and examples almost instantly by optimizing the structure of the database.

Another important feature of NLB is its function to sort collocations by raw frequency and other statistic measures such as the MI-score and the logDice score. Figure 3 shows collocations of N を買う (*N wo kau*, to buy *N*). In the upper part of the figure, collocations are ordered by raw frequency, and in the lower part, by MI score. The MI score has a tendency to be unreliably high among low-frequency collocations. To avoid this reliability issue, NLB provides a filter function to remove low-frequency collocations. In the lower part of Figure 3, low-frequency collocations of less than five instances are excluded from the list. You can see idiomatic expressions like 蟹癡を買う (upset someone), 歡心を買う (seek someone's favor), 失笑を買う (make someone laugh at you) are top of the list. Sorting collocations by multiple statistic measures is an extremely useful function.

...を買う 1264件			
コロケーション	頻度	MI	N-S
ものを買う	177	3.92	-2.29
本を買う	119	5.72	-0.30
【一般】を買う	118	2.12	-0.26
車を買う	99	6.38	0.16
物を買う	96	6.33	0.57
株を買う	87	8.42	-1.11
切符を買う	79	10.77	-0.48
家を買う	74	4.43	-0.23
のを買う	71	1.03	-1.99
土地を買う	66	6.84	-0.46
それを買う	59	2.64	-0.91
服を買う	56	7.85	-0.63
品を買う	50	6.70	0.12
商品を買う	49	6.27	0.32
券を買う	46	8.73	0.50
響盤を買う	46	13.01	-0.48

...を買う 180件			
コロケーション	頻度	MI	N-S
響盤を買う	46	13.01	-0.48
歓心を買う	18	13.01	-0.40
不興を買う	25	12.69	-0.04
失笑を買う	9	11.69	-0.22
不評を買う	10	11.69	-0.02
反感を買う	39	10.97	0.14
切符を買う	79	10.77	-0.48
パンプスを買う	6	10.21	0.02
馬券を買う	21	9.78	0.14
土産を買う	45	9.70	0.21
宝くじを買う	12	9.69	-0.40
おみやげを買う	9	9.52	-0.04
一役を買う	5	9.46	0.09
怨みを買う	34	9.42	-1.27
ウーロン茶を買う	5	9.21	0.11
チケットを買う	23	9.03	0.16

Figure 3: Collocations of *N wo kau*

NLB also facilitates creating examples with dictionary-making-oriented functionality. On the example panel (the right-most panel of Figure 1), examples for a collocation are shown in ascending order of their character counts. This helps the dictionary writer to use corpus examples for reference easily and effectively. Each corpus example is color-coded according to the sub-corpus it belongs to, which enables the writer to know where each example comes from quickly. In addition, the writer can examine the context of a corpus example just by clicking its source information label.

As we have seen, NLB provides an ideal environment for Japanese dictionary making, by dealing with the wide variety of orthographical forms in Japanese, and offering a user-friendly interface.

4.2 The Teramura Wrong Usage Database

Gaikokujin gakushuusha no nihongo goyoureishuu (Collection of errors of JFL learners) is a report compiled by Teramura Hideo and his team in the late 1990s, after they collected and classified misuse samples from compositions written by overseas students from 24 countries. The total of the misuse samples amounts to 6,300, with misuse labels attached to misuse positions. Other information includes learner's nationality and composition type.

The online version of this report, Teramura Wrong Usage Database provides a search function. The user can search misuse examples by combining conditions (a type of misuse, a learner's nationality, a composition type, etc.) Figure 4 shows the "search

from misuse type” function. Misuse types are shown in a tree structure, effectively informing the user of how many misuse instances there are for each type on any combination of nationalities and composition types.



Figure 4: Teramura Wrong Usage Database

Most conventional Japanese dictionaries for native speakers and foreign learners, including ones with a learning or teaching purpose, only show correct usages; very few show wrong usages. This tool enables us to include useful wrong usage information for learners such as wrong collocations in a definition entry.

5. Crossing the barriers of space and time: An online multi-lingual editing tool

Compiling a dictionary requires a lot of time and human resources. It is usually the case that there is an editor-in-chief who directs lexicographers in charge of writing up entries. The editor-in-chief proofreads the entries that the lexicographers have written, and corresponds with them as often as necessary. Proofreading may be done by different proofreaders and the editor-in-chief manages the editorial activity. This process usually takes a long time, and is not ideal if time for the compilation is limited. Another drawback of this traditional system is that lexicographers will usually have no chance to examine entries that the other lexicographers write.

To overcome these problems, we have developed a web-based editing system so that the editors, lexicographers and proofreaders can have access to the entry data for editing, reviewing and proofreading processes.

To develop the current online editor system, our experience in compiling A Dictionary of Basic Verbs in Japanese for Marathi, the outcome of Prashant et al. (2007)'s project is fully exploited. Under a limited budget, we made use of free applications to achieve our goal: a wiki system to store the entry data in XML format. Wiki is a system for collaborative editing online and has a repository system, under which all older versions of wiki pages are stored. By comparing the current version with one of the older versions, editors can tell what have been changed, deleted and/or added in the latest version. In this new system, we take advantage of the repository feature of wiki.

In the current system, the lexicographers write entries in Japanese first. Then the Japanese entries are translated into four foreign languages (Marathi, Korean, Chinese and English) by translators. At this stage some additional information will be added that is related to cultural and linguistic differences between Japanese and the target language.

The following sub-sections give a brief outline of the online editorial system.

5.1 An outline of the online editorial system

5.1.1 Some features of the online editor

The online editor developed for this project has the following features:

- Data are input in a textbox area on the editor and stored in an XML structure.
- The data input in the editor are reflected in a preview function to check how they look in the HTML format instantaneously.
- Employing Yahoo API, it is possible to assign furigana, the phonetic transcription of kanji, in a format that may be convertible into other formats like HTML.
- The lexicographers can read the entries that are written by the others online and post a comment, which will be shared by all editors.

5.1.2 Online editor as a plug-in of Dokuwiki

The editor is not a standalone application but is developed as a plug-in for Dokuwiki. Dokuwiki is a Unicode-based wiki application and does not require a binary database system like SQL because data pages are saved in text files. Each entry is organized in an XML format and stored as a Dokuwiki page. Since the file is a text file, it can be directly used as an XML file for data-processing.

The lexicographers first login to the Dokuwiki homepage as in Figure 5.



Figure 5: The homepage of the editorial system on Dokuwiki

5.1.3 Starting the online editor

After logging in, lexicographers choose the language, and then select one of the entries in the list to edit it. The Wiki page shows the XML data of the entry, but it is not directly edited. They start the plug-in online editor. On starting up, the editor retrieves the XML data from the Wiki page. The view of the entry data is formatted in an Explorer view, with a tree structure displayed on the left pane and each sub-data displayed on the right pane, as in Figure 6.



Figure 6: A full view of the online editor

Figure 7 shows the view when one of the items is selected and its editing area is displayed on the right pane.

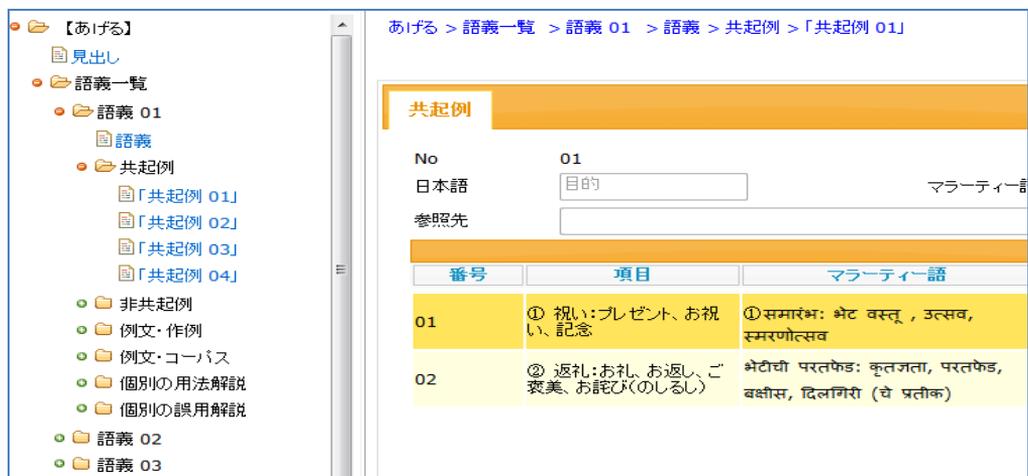


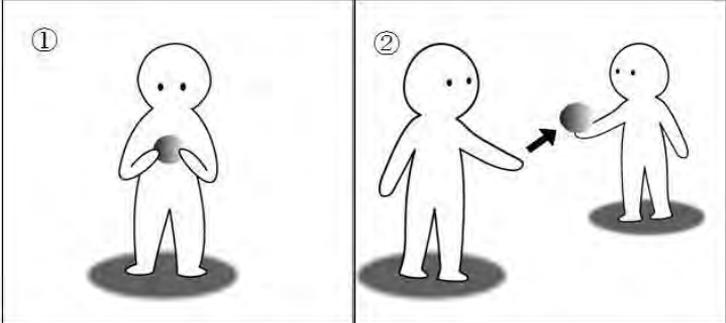
Figure 7: The editing pane for Collocation 01 (共起例 01) is open on the right page

5.1.4 The preview function

The editor has a preview function. There are two types of preview: the entire view of the entry and the partial view of an item of the entry. The preview is generated via XSLT as an HTML page. An image of the full-scaled preview in Marathi is shown in Figure 8, and an image of the partial view is shown in Figure 9. Since it is a bilingual version, both the Japanese data and the respective Marathi data are shown. In the bilingual version, as shown in Figure 8, an additional piece of information from a contrastive point of view (対照情報) is also provided when necessary. This information will not be included in the Japanese version.

01. 好意で相手に相手が好むものを与える
चांगल्या हेतूने समोरील व्यक्तीस तिच्या पसंतीची वस्तू देणे.

[あ(げる)](他動詞)



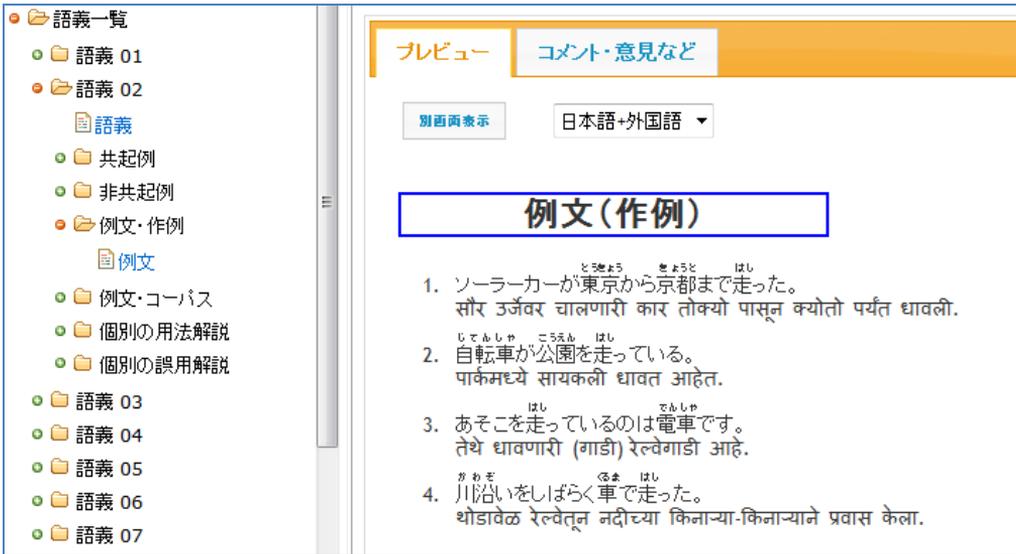
① A person stands holding a small round object in both hands.
 ② The same person stands on the left, holding the object out with their right hand, while another person stands on the right, reaching out to receive it.

構文フレーム <ヒト>が<目的>に/として<相手>に<モノ>をあげる。
 <एखाद्या व्यक्तीने><हेतू>खातर/पुरस्कृत<समोरील व्यक्तीस><वस्तू>देणे. <एखाद्या व्यक्तीने><समोरील व्यक्तीस><वस्तू>देणे असंही वापरतात पण क्वचित.

対照情報
 आगेरु या क्रियापदाने दर्शविलेल्या क्रियेमध्ये दिलेल्या वस्तूचा मालकी हक्क देणाऱ्या व्यक्तीकडून प्राप्त होणाऱ्या व्यक्तीकडे जातो असा अर्थ गभित आहे.

Figure 8: The full-scaled preview of the Marathi translation of *ageru*

The layout design of the preview in Figures 8 and 9 is not intended to be final, but to be temporary just for convenience. The final layout design will be developed differently and be applied to generate the final product from the same XML data.



The interface features a sidebar on the left with a tree view of categories: 語義一覧, 語義 01, 語義 02, 語義, 共起例, 非共起例, 例文・作例, 例文, 例文・コーパス, 個別の用法解説, 個別の誤用解説, 語義 03, 語義 04, 語義 05, 語義 06, 語義 07.

The main content area has a header with 'プレビュー' and 'コメント・意見など'. Below it are buttons for '別画面表示' and a language dropdown set to '日本語+外国語'. A blue-bordered box titled '例文(作例)' contains four numbered examples:

1. ソーラーカーが東京から京都まで走った。
सौर उर्जवर चालणारी कार टोक्यो पासून क्योतो पर्यंत धावली.
2. 自転車が公園を走っている。
पाकेमध्ये सायकली धावत आहेत.
3. あそこを走っているのは電車です。
तेथे धावणारी (गाडी) रेल्वेगाडी आहे.
4. 川沿いをしばらく車で走った。
थोडावेळ रेल्वेतून नदीच्या किनाऱ्या-किनाऱ्याने प्रवास केला.

Figure 9: Built-in partial preview of portion of examples

5.1.5 Comparison of different versions

Dokuwiki's revision control makes it possible to compare the latest version with any older version. When two versions are compared, differences will be displayed. This is one of the major merits in using Dokuwiki for entry data management.

5.1.6 Posting comments and improving the quality of description

The editor has a function of posting a comment on the data, while editing or reviewing. Comments are sent to all the editorial members to share the information by email. The comments can also be viewed on the editor and follow-up comments posted. Through this process, the editorial members can exchange ideas and opinions about entry data so that the lexicographer in charge can improve the quality of the descriptions and examples.

6. Audio-visual contents

Taking into consideration the cognition and memorization process in learning new words and meanings, we have incorporated audio-visual contents in the handbook. We believe audio-visual contents facilitate the comprehension and memorization of various meanings of a verb. A brief discussion of the audio-visual contents is provided below.

6.1 Audio-visual contents

In the present handbook, before presenting specific meanings of a polysemous verb, we first provide an abstract image schema which represents the core, shared meaning of the verb in question. Following this, a radial semantic network of the various meanings of a polysemous verb is provided. These two visual contents set the stage for zooming into a specific meaning. On moving to a specific meaning, we provide an animated illustration of the representative example of that meaning. The animated illustrations are a set of still hand-drawn pictures which are connected in such a way that they depict the semantic scenario as it unfolds in time. Audio contents are also added to the animated illustrations. In addition to the abstract image-schema animated illustration depicting a specific meaning, we also provide video-clips as well. A brief description of these three audio-visual contents is given below.

6.1.1 Image schema

The verbs included in the present handbook are all fairly polysemous. For example, the entry of *agaru* "rise/go up" in our handbook has as many as 19 meanings. In the cognitive linguistics perspective all these meanings are considered to share a core or prototypical meaning which is illustrated with the help of an abstract line diagram which is widely referred to as an image schema. For example, in the case of

the verb *agaru* “rise/move up” “motion of an entity in a upward direction” is taken to be the core meaning and it is illustrated with the help of an image schema shown in figure 10.

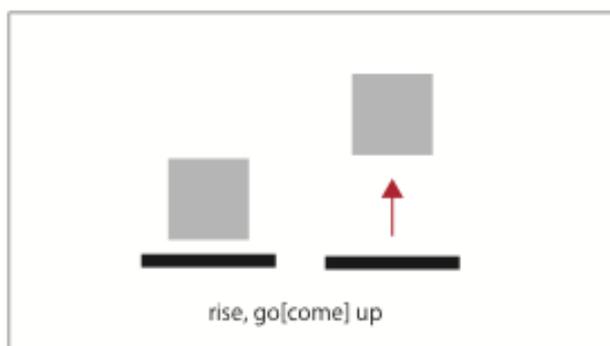


Figure 10: Image schema for the verb *agaru* “rise/move up”

All the meanings are derived from this prototypical meaning through semantic extensions of various types. Image schema would be useful for learners to understand the core or prototypical meaning of a polysemous verb and also to appreciate the connection with specific meanings.

6.1.2 Animated illustrations

As mentioned earlier, we have included animated illustrations in order to facilitate comprehension and retention of specific meanings. From previous research (Dwyer, 1978; Lin & Dwyer, 2004; Dwyer, 2007; Chou & Hsiao, 2010), it has become increasingly clear that the static visual instruction serves as a powerful learning strategy and improves information acquisition and retrieval capabilities. Using these insights, rather than using multimedia contents, we use multiple hand-drawn animations and we show them in a sequence along with audio contents synchronized with them as shown in Figure 11.

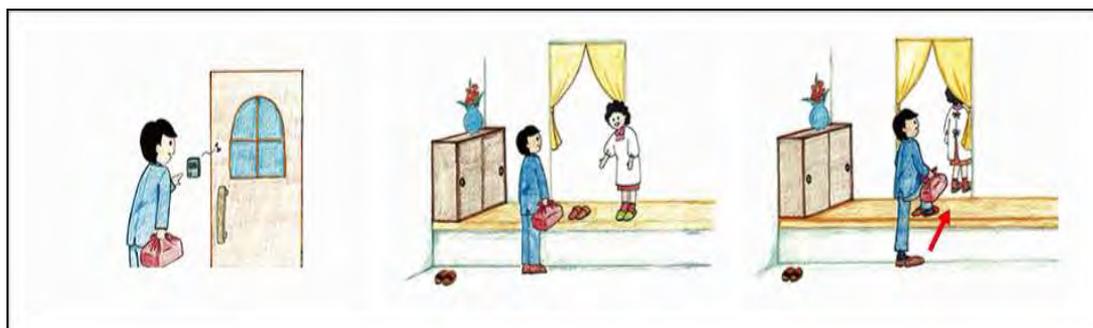


Figure 11: Animated illustrations for *ie ni agaru* “to visit someone”

6.1.3 Video clips

Contextbased information such as deixis (e.g. the use of auxiliary verb indicating the location of the speaker in expressions such as *agatte iku/kuru* (come/go up)), or the resultant state conveyed by *-te iru-* form as in the expressions such as *hata-ga agatte iru* (the flag is raised), or the perfectly fried, crisp *tempura* as depicted by the adverb *karatto* and the like can be effectively conveyed using a video clip. Wherever necessary and feasible, we have tried to provide video-clips to foster understanding of subtle meanings. Figure 12 below illustrates the expression *kaidan o agatte iku* (go up climbing the stairs) wherein the scenario is shot from the backside of the person climbing the staircase to induce the viewers “viewpoint” in the interpretation of the scene.

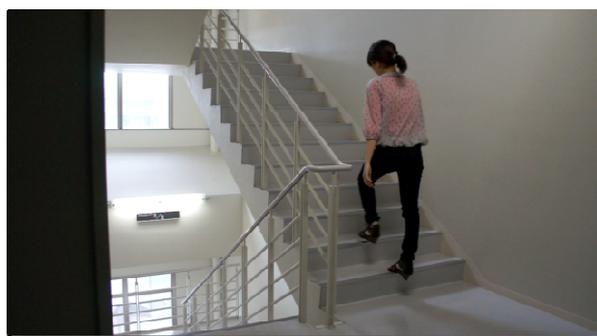


Figure 12: Video clip depicting *kaidan o agatte iku* (go up climbing the stairs)

7. Future prospects

From the foregoing discussion it should be clear that the handbook in preparation differs in many respects from bilingual dictionaries available now. The content of the entries is based on information gleaned from corpora and is augmented with insights from various sub-fields of linguistics, especially cognitive linguistics and contrastive linguistics. Further, the handbook includes audio-visual contents in order to improve information acquisition and retrieval capabilities.

The handbook will be made available for free access on internet around April 2013. After getting feedback from JFL learners and teachers of Japanese in various parts of the globe, we plan to make improvements both in content as well as presentation. We also plan to increase the number of headwords and the target languages beyond English, Chinese, Korean and Marathi, if collaborators are willing to volunteer their services. Finally, we strongly believe that the output of the handbook project will make a substantial contribution not only to Japanese language research and Japanese language pedagogy but also to corpus linguistics, contrastive linguistics and linguistics in general.

References

- Church, K., Gale, W., Hanks, P. & Hindle, D. (1991). Using Statistics in Lexical Analysis. In: Sernik, E. (Ed.) *Lexical Acquisition: Exploiting On-Line Resources to Build a Lexicon*, 115-164. New Jersey: Psychology Press.
- Chou, P., & Hsiao, H. (2010). The Effect of Static Visual Instruction on Students' Online Learning: A Pilot Study. *Interdisciplinary Journal of Information, Knowledge, and Management*, 5. [Available online: <http://www.ijikm.org/Volume5/IJIKMv5p073-081Chou456.pdf>]
- Dwyer, F. M. (1978). *Strategies for improving visual learning*. State College, PA: Learning Services.
- Dwyer, F. M. (2007). The program of systematic evaluation (PSE): Evaluating the effects of multimedia instruction 1965-2007. *Educational Technology*, XLVII(5), 41-45.
- Goldberg, A. F. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. Anchor books.
- Kilgarriff, A., & Rundell, M. (2002). Lexical Profiling Software and its Lexicographic Applications: A Case Study. In: Braasch, A. & Povlsen, C. (Eds.) *Proceedings of the Tenth EURALEX Congress*, 807-819. Copenhagen.
- Lin, C., & Dwyer, F. M. (2004). Effect of varied animated enhancement strategies in facilitating achievement of different educational objectives. *International Journal of Instructional Media*, 31(2), 185-198.
- Maekawa, K. (2012). Gendai kakikotoba kinkou koopasu (BCCWJ) no kouchiku to KOTONOHA keikaku no ayumi (The construction of “the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)” and the progress of the KOTONOHA plan). *Nihongengogakkai dai 144 kai taikai yokoushuu* (Proceedings of the 144th meeting of the Linguistic Society of Japan), 352-357.
- Pardeshi, P., & Akasegawa, S. (2011). BCCWJ wo katsuyou shita kihondoushi handobukku sakusei: koopasu buraujingu shisutemu NINJAL-LWP no tokuchou to kinou (Compilation of basic verbs handbook using the BCCWJ corpus: Salient features and functions of the corpus browsing system NINJAL-LWP). *Gendai kakikotoba kinkou koopasu (BCCWJ) kansei kinen kouenkai yokoushuu* (The proceedings of the symposium commemorating the completion of “the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)”), 205-216. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Pardeshi, P., & Kiryu, K. (2007). “Nihongo-Maraathiigo kihondoushiyouhoujiten” sakusei purojekuto: indo ni okeru nihongo kyouiku no kisozukuri ni mukete (“Japanese-Marathi Basic Verb Dictionary” Compilation Project: A step toward the construction of the foundation of Japanese language education in India). *Koube daigaku ryuugakusei sentaa kiyou* (Bulletin of Kobe University International Student Center) 13: 87-102.
- Sinclair, J. (1987). *Collins Cobuild Dictionary English Language Dictionary*. London: Harper Collins Publishers.
- Sinclair, J. (Ed.) (1987). *Looking Up, An account of the COBUILD Project in lexical computing*. London: Collins ELT.
- Teramura, H. (1990). *Gaikokujin gakushuusha no nihongo goyoureishuu* (Collection of errors of JFL learners). Report of grant-in-aid study [available online at: <http://teramuradb.ninjal.ac.jp/teramura.goyoureishu.pdf>].

8. データベース

I. NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

<<http://nlb.ninjal.ac.jp/>>

国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)を検索するために、Lago 言語研究所と共同開発したオンライン検索システム。

国語研の共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」(リーダー：プラシャント・パルデシ)、「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」(リーダー：影山太郎)、「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」(リーダー：プラシャント・パルデシ)による研究成果の一部である。

II. 外国人学習者の日本語誤用例集「寺村誤用例集データベース」

<<http://www.ninjal.ac.jp/teramuragoyoureishu/>>

日本語教育研究・情報センターで行われている2つの共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」(リーダー：迫田久美子)および「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」(リーダー：プラシャント・パルデシ)における研究の一環として、我が国の日本語教育研究の礎を築かれた故寺村秀夫教授(1928～1990)が、大阪大学で残された最後の仕事の1つである『外国人学習者の日本語誤用例集』(1990)を、先生のご遺族の承諾を得て電子化し、オンラインで公開した。

9. 成果物一覧

I. 学術論文

Compilation of Japanese Basic Verb Usage Handbook for JFL Learners: A Project Report, Prashant Pardeshi, Shingo Imai, Kazuyuki Kiryu, Sangmok Lee, Shiro Akasegawa and Yasunari Imamura, In Acta Linguistica Asiatica, Volume 2, No. 2 37-64 2012年

(本報告書「7. 学術論文」に全文掲載)

II. データベース

I. NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

<<http://nlb.ninjal.ac.jp/>>

II. 外国人学習者の日本語誤用例集「寺村誤用例集データベース」

<<http://www.ninjal.ac.jp/teramuragoyoureishu/>>

(I・II.とも本報告書「8. データベース」に掲載)

III. 発表・講演

1. プラシャント・パルデシ、赤瀬川史朗. 2013. 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』オンライン検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ への招待.」(2013年2月19日、於東北大学国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センター)

2. プラシャント・パルデシ、赤瀬川史朗. 2012. 「NINJAL-LWP for BCCWJ (『現代日本語書き言葉均衡コーパス』) 用オンライン検索システム NLB (<http://nlb.ninjal.ac.jp>) の実習」日本語文法学会第13回大会チュートリアル (2012年10月28日、於名古屋大学)

3. 赤瀬川史朗、プラシャント・パルデシ、今村泰也. 2012. 「BCCWJ コロケーション検索ツール NINJAL-LWP デモンストレーション」国立国語研究所・北京日本学研究中心共催国際ワークショップ「日本語ー中国語基本動詞ハンドブックの作成に向けて：現状および今後の課題」(2012年10月23日、於中国・北京外国語大学内北京日本学研究中心)

4. プラシャント・パルデシ、今村泰也. 2012. 「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成プロジェクトの歩み」国立国語研究所・北京日本学研究中心共催国際ワークショップ「日本語ー中国語基本動詞ハンドブックの作成に向けて：現状および今後の課題」(2012年10月23日、於中国・北京外国語大学内北京日本学研究中心)

5. Prashant Pardeshi and Shiro Akasegawa. 2012. NLB: A Lexical-Profiling-Based Corpus Browsing System for the BCCWJ. Invited talk given at the International Workshop on Corpus linguistics with a Special Focus on Korean and Japanese organized by the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) on 11th Oct. 2012. (招待有り)
6. プラシャント・パルデシ、赤瀬川 史朗、今村 泰也. 2012. 「BCCWJ から得られるコロケーション情報の可視化」 パネルセッション「日本語教育とつながるコーパス研究—現状と今後の展望—」日本語教育国際研究大会(ICJLE)名古屋 2012 (2012 年 8 月 19 日、於名古屋大学) (招待有り)
7. プラシャント・パルデシ、赤瀬川史朗. 2012. 「レキシカルプロファイリング手法を用いた BCCWJ 検索ツール NINJAL-LWP とその研究事例」日本言語学会第 144 回大会ワークショップ「コーパス基盤の日本語研究の新地平」(2012 年 6 月 16 日、於東京外国語大学)
8. プラシャント・パルデシ、赤瀬川史朗. 2012. 「コロケーションをどう教えるか—学習者向けコロケーション可視化ツールの開発」. 国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」国際ワークショップ「日本語—マラーティー語基本動詞ハンドブックの作成に向けて:現状および未来の展望」(2012 年 3 月 25 日、於 Sumant Moolgaokar Auditorium, Mahratta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (MCCIA), Trade Tower プネー,インド)
9. 赤瀬川史朗、プラシャント・パルデシ、今村泰也. 2012. 「BCCWJ コロケーション検索ツール NINJAL-LWP デモンストレーション」. 国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」国際ワークショップ「日本語—マラーティー語基本動詞ハンドブックの作成に向けて:現状および未来の展望」(2012 年 3 月 25 日、於 Sumant Moolgaokar Auditorium, Mahratta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (MCCIA), Trade Tower プネー,インド)
10. プラシャント・パルデシ、今村泰也. 2012. 「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成プロジェクトの歩み」. 国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」国際ワークショップ「日本語—マラーティー語基本動詞ハンドブックの作成に向けて:現状および未来の展望」(2012 年 3 月 25 日、於 Sumant Moolgaokar Auditorium, Mahratta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (MCCIA), Trade Tower プネー,インド)
11. Prashant Pardeshi、赤瀬川史朗. 2012. コーパスを利用した基本動詞ハンドブック作成—コーパスブラウジングツール NINJAL-LWP の特長と機能—. 言語処理学会第 18 回年次大会

(NLP2012) テーマセッション：「コーパス日本語学-その期待と可能性」（2012年3月15日、於広島市立大学）

12. 赤瀬川史朗、Prashant Pardeshi. 2012. 「理論言語学とコーパスの接点 —NINJAL-LWP による言語分析—」. 国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会（2012年2月18日、於国立国語研究所）（招待有り）

13. プラシャント・パルデシ、今村泰也、赤瀬川史朗. 2012. 「正用と誤用のコーパスを利用した基本動詞ハンドブック作成」国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」公開シンポジウム（2012年2月18日、於国立国語研究所）（招待有り）

14. プラシャント・パルデシ、赤瀬川史朗. 2011. BCCWJ を活用した基本動詞ハンドブック作成—コーパスブラウジングシステム NINJAL-LWP の特徴と機能—. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会（2011年8月3日）（招待有り）

15. プラシャント・パルデシ、山崎 誠、今村 泰也. 「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」第10回世界日本語教育研究大会ワークショップ『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の概要と日本語教育への応用」（2011年8月20日、於天津外国語大学）

16. プラシャント・パルデシ. 2010. 「日本語学習バイリンガル辞書の開発と対照研究の接点—『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』の作成を振り返って—」平成22年度筑波大学国際連携プロジェクト企画国際研究フォーラム「日本語学習者辞書の開発と日本語研究」於筑波大学（2010年12月11日）（招待有り）

執筆者紹介

<東京グループ> 見出し語：「売る」「買う」「貸す」

- ・大堀壽夫（東京大学）
- ・秋田喜美（大阪大学）
- ・古賀裕章（慶應義塾大学）
- ・山泉実（東京外国語大学）
- ・幸松英恵（東京外国語大学）

<筑波グループ> 見出し語：「あげる（授受動詞）」「もらう」「はしる」

- ・砂川有里子（筑波大学）
- ・今井新悟（筑波大学）
- ・高原真理（筑波大学）

<名古屋グループ> 見出し語：「あがる」「あげる（移動動詞）」「さがる」「さげる」

- ・靱山洋介（名古屋大学）
- ・吉成祐子（岐阜大学）
- ・眞野美穂（鳴門教育大学）
- ・秋田喜美（大阪大学）

<編者>

プラシヤント・パルデシ（国立国語研究所）

国立国語研究所共同研究報告 12-07

日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成

2013年3月31日発行

編者 プラシヤント・パルデシ

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話 042-540-4300(代表)

<http://www.ninjal.ac.jp/>

©国立国語研究所

ISBN 978-4-906055-27-2

ISSN 2185-0127

Compilation of a Handbook of Usage of Japanese Basic Verbs for JFL Learners

Prashant Pardeshi (ed.)

March 2013

National Institute for Japanese Language and Linguistics